駿臺雑話　巻四

○燈臺もと暗し

積雨―連日の雨

三伏の夏もはや半過ぎ行きし頃、人々すゞみがてらに、駿臺の菴にとぶらひ來けり。折ふし積雨新に霽れて、夕日梢にのこれるに、庭の竹樹露すゞしく、池の芙蓉風かをり、なにとなく見すぐしがたき折からなり。諸客はしゐしつゝ、勾欄によりて、詩歌を朗詠しけるが、はやもののあやめも見えぬばかりに暮れゆけば、やがて内に入りて、翁にいとま申さむといふを「今しばし」とあれば「さらば、宵の間過ぐる程こゝにありて、御物語承らん」とて、各坐につきけり。しばらくありて、燭もて至りぬるに、翁ふとおもひよりしまゝ、燭臺をさして、「世俗の諺に、「燈臺もと暗し」といふは、いかやうの事にたとへていふにやあらん。おの〳〵いうて見給へ」とあれば、座客の中ひとりいひけるは、「世に何事にてもあれ、外にはかくれなき事を、其もとにてきけば、却て分明ならぬやうの事に、かく申しならし候。但我等が愚見にて、是に道理をつけて申候はゞ、孟

子の「道在邇而求諸遠」といふ意にもたとへばたとへつべし。人ごとに本を忘れて末をつとめ、近きをすてゝ遠きに求むるは、常の事にて候。是を射る者の的にのみ志して、あたりの手前にある事を知らぬにたとへたれば、燈臺のもとくらきにたとへても同じこゝろならんかし」亦ひとり聞きて、「されば其事にて候。羅大經が鶴林玉露に、悟道といふ尼の作とて、

盡日尋春不見春　芒鞵蹈遍隴頭雲
歸來笑撚一梅花嗅　春在枝頭已十分

是も、道のちかきに在りて遠きに求むるたとへなり。終日山野に春を尋ねくらして、春はとくにわが宿の梅にある事をしらずといへるも、燈臺もとくらきの意にもよくかなひて、いとゞおもしろくこそ候へ」又ひとり、「道のさたばかりにも限らず、外の事にもあるべし。たとへは、東晉の時、桓溫、三秦に打入りしに當つて、王猛來見しけるに、「三秦の豪傑、なにとていまだ一人も見え來らぬ」と問ひしにぞ、桓溫が眼のくらきもしられけり。三秦の豪傑王猛に過ぎたるものやあるべき。眼前に豪傑あるをしらずして、豪傑にむかうて豪傑を問ひしは、燈臺もとくらきにて候はずや」又ひとり、「古より倭漢共に

蕭牆―かきれ、即ち身近きところ

短檠―丈の低き燈火

英主の遠畧をつとむるが、其威望遠く敵國に及べども、まぢかく蕭牆のもとに敵ある事をしらざるも、燈臺もと暗きにたとふべし。近代日本にていはゞ、織田信長、關東關西の諸國迄手をのばし討ちしたがへられしかども、手本にくらうして、明智にころされし、燈臺もとくらきにあらずや」といふを、翁きゝて、「すべて比喩の語は、義理のとりやうにて色々に申さるゝ物にて候。此諺も、各たがひに其義をつくされしにて、もはや此外はあるまじく覺え侍る。但各の申さるゝは。いづれも燈臺もと暗しを、あしきかたにたとへらるゝにて候。翁は又、此諺を、よろしき方に取りなして聞きたくこそ侍れ。又一種の道理もあるべきにや。韓退之が短檠の歌に、「長檠八尺空自長。短檠二尺便且光」とつくれるごとく、燭臺も、長きは燭のもとくらく、短きは燭のもとあかるし。夜中に書をよみ字を寫すやうの事には、手もとを明らかにして其用をかなふる故に、短きを貴ぶにて候へども、さりとて、一二尺の手燭にては、燭のもとこそあかるくあるべけれ、此座上にても、くまぐ〳〵のくらきを照しぬる事は難かるべし。まいて稠人廣座をいかゞして照し申すべしや。しかれば、もとをあかるくしては、遠きをてらし難し。遠きをてらすは、必ずもと暗きものとしるべし。翁いつの比か、關尹子を見侍り

しに、「吾道は處暗がごとし、よく明中の事を區畫す」といへり。關尹子は關令尹喜が書なり。尹喜は老子の弟子にて、道德經五千言も、此人の爲にあらはせると也。今世に傳る關尹子の書は、大かた後人の作にて、尹喜に名を託したる物にてもあらむかし。されど、老子の道は、たしかに處暗を宗とすることにて侍る。但老子の道にも限るべからず。吾儒にも簡要とする事也。たとへば、わが身くらがりにゐて、くらがりよりあかりを見れば、あかりの事殘なく見ゆるものなり。わが身あかりにゐて、あかりよりくらがりを見ては、くらがりの事一切見えぬものぞかし。されば、くらがりにゐてあかりを見るやうに、己が智をふかくひそめ養ひて、くらきより明らかなるを生ずるやうにすれば、其明悠長寛大にて、自然に遠きにおよびなん。それこそ眞の明といふべけれ。もし己が材智にほこり、聰明を盡して、たゞ手もとのあかるきを專にせば、あかりにゐてくらがりを見るがごとし。其明淺近短慮にて、遠きに及ばざるのみならず、たゞ手もとの事のみ見えて、下手の棊をうつがごとし。末の手は見えざる程に、毎々是非をあやまる事も多かるべし。こゝをもて聖人易において、「明入ニ地中一明夷、君子以莅ニ衆用一晦而明」と宣へり。古の聖王、冕旒目を蔽ひ、黈纊耳を塞ぐも、聰明の刃はやきを

淺近短慮―あさはか
冕旒―玉を貫きたる冠

きらうて、晦きをもちひて養はんとなり。古より倭漢ともに大智遠識の人の、己が材智に傲りて、好んで自ら用ひるをきかず。老子の「良賈深藏若ニ虛一、君子盛德若ニ愚一」といへるも、げにさることぞかし。ちかきころ、故板倉周防守、京師に留守たりし時、訴訟をきかれしに、己が材智のはやきり、聲色のうごきなば、我もそれに氣乘じ、彼もそれに氣奪はれ、兩造の辭を審かにせず、雙方の情を盡さゞる事あらんとて、必ず障子を隔てゝ、わざと手づから茶をひきなどし、たゞ心のちらぬやうにしてきかれしとなり。さすが近代の名人とはいひながら、おのづから聖人の心にもかなへり。それ故、曲直理を盡し、聽斷神に通じ、人々畏服せざるはなし。いはゆる用ニ晦而明一なるにあらずや。今に至りて世の談者傳へ誦して、口實とする事枚擧するにいとまあらず。中にも、翁が最感じおもふ事あり。周防守、ある時京の在家を通られしに、さる家に、幼少の子出であそびしが、「あれ周防こそ通らるれ」といひしを、周防守馬上にて聞きとがめて、「我不肖といへど、上の御代官としてこゝにあれば、京中村閭に住する者、男女老弱をいはず、我をかくおしくだしていふ事あるべからず。しかるに此家の兒輩かくいふは、常に家人の我をうらみてかくいふを、聞馴れし故なるべし。是は定めて子細あるべし」とて

のたれ
韃纊―みみあて
はやきり―意不明なり或は「はやまり」か
兩造―原告と被告

其家主の名をきかせて通られしが、翌日其家主を召しよせて、「汝先年何にても訴訟したる事やある。今尋ぬるは、少しもきづかひなる事にてはなし。ありしやうに申すべし」といはれしかば、始めなにかと辭退しけるが、再三とはれて「此上はかくさず申上げ候。それの年それの月の事にて候。父の配分の事に就きて、一類の者と爭ひ候うて訴へ候ひが、其者無實の事を申しかけ候へども、證人共を多くこしらへ候うて申出で候故、御聽斷の上、相手の勝に定まり候。其次第かやう〳〵とくはしく語るを、下役人に命じて、其手にあたりし簿案をくらせけるに、すこしもたがひなかりしかば、其上にていよ〳〵尋ねきはめて、「是はたしかに某が聽きあやまりたるなり。いと殘念なれども、もはや年久しき事なれば、今更すべきやうなし。其配分ほどを某償つて、我過を謝すべし」とて、自分の金銀を出して其者へとらせられしとぞ。是にてしるべし、周防守己が威勢をつのらず、己が過失をかくさず、我は常に悔に處て明を衒はず、我は常に愚に處て智を先だてず、其心公にして私なし。誠に古今に有りがたき明智といふべし。今是等をもて此諺を考ふるに、燭臺はながくしてもとのくらきにて、其明おのづから遠きにおよぶ。君子の道は闇然として日にあきらかなるがごとし。もし短うしてもとあかるければ、

簿案―控の帳簿

其明わづかに近うしてやみぬ。小人の道は的然として日にほろぶるがごとし。此理をしめして、明かなるものは必ずもとを暗うすといふ心にて、燈臺もとくらしといふにもあらむかし。但此諺の正意は、各のいへるごとくなるべし。翁がいへるをば、姑く一說にそなへ給へかし。さても根もなき事に、あまりくはしき僉議かな」とて、翁微笑しければ、諸客、「かやうの事にも、翁の心のつけられやうこそ別段の事にて候へ」とて、各感じあへり。

運慶―有名なる佛師なり。康慶の

○運慶が口傳

さて翁いひけるは、「月は盈つれば虧け、花は盛なればちる。家語に、子路持滿の道を孔子に問ひければ、「聰明睿智守之以愚」とのたまへり。翁が前にいへる、明を晦に養ふも、聰明を十分に盡さじとなり。すべて、物は十分に盡すを嫌ふ也。なに事をするも、七八分にして前を殘して盡さぬをよしとす。もし心ゆくまゝに、一旦に殘さず盡しぬれば、必ず後に悔みあるもの也。或人、佛師運慶が口傳とて語りしは、佛を作るには、耳鼻をば先大きにすべし。もし耳鼻を十分能き程に斲れば、後に小さく見ゆる時に、大きに

子にして後鳥羽帝より順德帝まで頃の人

木偶人—木人形

したくてもかなはず。口目をば先小くすべし。もし口目を十分よき程にあくれば、後にもし大きに見ゆる時に、小さくしたくてもかなはず。されば、耳鼻を大きにし、口目を小さくするを第一の口傳とするとぞ。是はもと韓非子に出でて、宋の蘇頌がいひし事也。

此木偶人を作る意得は、何事にもあるべし。しばらく思ひつけたる事にていふに、曲禮に、「君子不レ盡二人之欲一、不レ竭二人之忠一、以全レ交也」といへり。是等にてもしるべし。人の我爲に杯酒を催しなどして歡愛を篤うするを、人の歡といふ。人の歡を十分にきはむる故に、あまりしたしくなれば、反て無禮にもなり、あまり興あらむとすれば、反て無興にも成るもの也。陳の公子完、齊の桓公のために親愛せられしが、桓公其家に就きて飲まれしに、晝迄にてはあきたらずとて、「火をもてつけ」といはれしを、「臣卜二其晝一未卜二其夜一」とて、夜飲を辭せしは、人の歡をつくさじと也。人の我爲に音問をかゝさずなどして、心のまめやかなるを人の忠といふ。人の忠を十分に賴む故に、すこしとどかねば、必ずとがむるもの也。聖人易の恒の卦において、初六の九四に求望の心深きをいましめて、「復恒二貞凶一」といへるは、人の忠をつくさじとなり。こゝをもて、君子はかねて人の歡を盡さず、人の忠を竭さずして、人と始終交を全うするぞかし。もし國家の

政にていふとも、其理同じかるべし。いやしき諺にいふごとく、國の仕置は、すり木にて升の底をまはすがごとくすべし。すみ〳〵すり木の行きとどかぬところあり。其行きとどかぬ所、かへりて人のくつろぎ、事のよけいともなる程に、久しうしておのづから行きとどくもの也。然るを、法令を嚴にして、急に行きとどくやうにとするときは、終に行きとどかざるのみならず、外にさはり出來て、騷動にも及ぶぞかし。易に、「王用三驅失二前禽一」といへるも、天子の獵は不二合圍一とて、網の三面ばかり張つて一面をあけ、禽のにげみちを殘す也。其ごとく、政事のおほやうにて、たゞ七八分程にして、二三分を殘すにたとへていふなるべし。詩にいはく、「彼有二不レ穫穧一。此有二不レ斂穉一。彼有二遺秉一。此有二滯穗一。伊寡婦之利」。これ田畝の事ながら、周時上に寛政あり、下に遺利ある事をしるべし。又十分に盡さずして、前禽を失ふの心なり。翁嘗て歷史を考ふるに、漢は文帝に至り、宋は仁宗に至つて最盛なりと稱す。然るに、二君いづれも寛大にして、政事はかどる事なく、行きたらぬやうなりしが、天下穩にして、おのづから治り安かりき。文帝の後武帝に至りて、張湯、桑弘羊等をもちひて、威怒を十分にきはめ、貨利は一毫も遺さず。是より生靈荼毒し、民心離叛いて、漢家の危き事殆ど累卵のごとし。

濫觴―はじまりきざすこと

仁宗の後神宗に至りて、王安石呂惠卿等を用ひて、新法を造り、功利に趨る。是より朝野騒擾し、民心愁苦し、宋朝の禍こゝに濫觴しけらし。二君みな英明の主にてありしが、いかゞしてこゝに至るといへば、たゞ材力に驕り、諸欲を盡さんとして、持滿の道にくらく、三驅の法をしらざればなり。宋史に、史臣仁宗を贊していはく、

四十二年之間。吏治若二偸惰一而任レ事。蔑二殘刻之人一。刑法似二縱弛一而決獄多二平允之士一。國未二嘗無一嬖倖一而不レ足二以累一治。世之體一。朝未二嘗無一小人一而不レ足二以勝一善類之氣一。君臣上下惻怛之心忠厚之政。所二以培一植國基一者厚矣。

此贊よく仁宗の朝を推論してその理を盡せり。是をもて見るに、仁宗の時、君臣ともに聰明をつくさず、寛容をたつとぶとしれたり。誠に三驅失二前禽一の遺風といふべし。

○法は江河のごとし

されば古人も、「人君は貴レ明。不レ貴レ察」といへり。明と察とは、似て似ぬ事なり。明は燭臺にて座を照すがごとし。其光たかく其本をぐらけれども、座中をあまねく照すべし。察は紙燭にて物を照すがごとし。手もとあかるくして、物を見とむる事いちはやけ

利病―利益と病弊

れども、遠きを照すことあたはず。この故に、人君の明は燭臺のごとくなるべし、紙燭のごとくなるべからず。天下の法は、寛大にして江河のごとくなるべし、瑣細にして溝渠のごとくなるべからず。江河は大きにしていちじるければ、よけやすし。しかも深廣にしてあなどりがたき故に、犯しがたし。溝渠は小さくしてしげければ、よけがたし。しかも淺狹にして近づきやすき故に、犯しやすし。さるによりて、昔より江河を蹈あやまりて、はまるものあるをきかず。溝渠には、やゝもすればはまるもの多し。こゝをもて、後漢の郎顗が安帝に上る書に、「王者の法は江河のごとし。易レ避して難レ犯」といへり。古今不易の名言といふべし。されど、しかあればとて、政は一向に寛大なるをよしとするといふにもあらず。是は科條を繁くして、法令煩苛なるを惡むといふ事なり。もとより寛大なるをよしとすれども、時により事によりては、嚴急にするを貴ぶべし。大かた泰平の世は、民俗遊惰に流れ、驕奢を好むぞかし。今是を治むるに、もし無事を專にし、簡易をつとめては、舊弊除くべきやうなし。必ず政事を革め、法令を嚴にして、民の耳目を新にすべし。然るに、民は可二與樂一成、不レ可二與謀一始とて、民はおろかにして國家の利病をしらず、たゞ私の利害をのみ先とする故に、其事の始には、己が勝手にあ

しきを見て、衆謗競起つて、異議もまち〳〵なる物ぞかし。古より明智の人は、それに少しも拘らずして、其功を成就しぬれば、畢竟天下の利となる故に、つひには上下安堵して、もろともによろこぶものなり。是かの晦きをもちひ、遠きを照すの明ならずしては、成りがたし。小智短慮の人の及ぶべき所にあらず。むかし鄭の子産、鄭國の政をせしに、舊俗の弊を改めて、いとき びしく車服の驕を禁じ、田廬の制を定めしかば、富人おそれて、美服をば褐に入れてかくしけり。豪民の兼并する田をばことゞく取上げて、部伍に歸せしむ。さる程に、輿人これが爲に誦していはく、「取二我衣冠一而褚之。取二我田疇一而伍之。孰殺二子産一。吾其與之」とまで怨望せしかども、三年に及びて、驕奢の風やみ、侵暴の害除きしかば、亦誦していはく、「我有二子弟一。子産誨之。我有二田疇一。子産殖之。子産而死。誰其嗣之」とて、たがひによろこびけるとぞ。子産は惠人なりと孔子ものたまひて、其政民を愛養する事ふかゝりしかども、ひとへに寛を貴ぶにあらず、猛なるべき時はかくありしぞかし。其後政を子大叔に授けし時、子大叔が寛に過ぎん事を兼てさとりて、「火は烈くして民望んで畏るゝが故に、火に入りて死するものはすくなし。水は懦弱にして民狎れて翫ぶ故に、多く溺れて死す」といへり。此水火の

褐—長き下著

輿人—衆人

原本「愛養する」の下に更に「する」の二字あり。

たとへも、前にいひし江河溝渠の意と同じかるべし。然れば、古の明王賢相は、寛を本とすといへど、時によりて猛をも用ひけらし。この故に、「寛則民慢。慢則糾之以猛。猛則民殘。殘則施之以寛。寛以濟猛。猛以濟寛。政是以和」と孔子も宣へり。一偏には意得べからず。

原本「過ぎん事を」の下に更に「ことを」の三字あり。

○鴟鴞のふみ

たゞし、國家の事は、大小によらず、國弊え民瘼まば改めずんばあるべからず。其外は、おほやう舊貫によりて改めざるをよしとす。木の匠のつくれる器も、舊制を改めて新しく仕出したるは、一旦勝手に能きやうなれども、其すがた下りていやしきのみならず、其用手せばくして廣からず、小まはしにてやすからず。さるまゝに、いろ〳〵たくみ出して、わづらはしくなりゆく程に、やがてもちひずなりぬるぞかし。こゝにをかしき物がたり侍る。ある人鴟鴞を畜ひて、それを囮にして鳥を捕へけるに、同じく殺生する友達のもとより、みゝづくをかりに越しけるが、其文に、みゝづくを略し「づく」とかきて其末に、「づくとはみゝづくの事にて候。みゝづくとかき候へば、文字かず多く言長に成

鴟鴞—みゝづく

り候故に、づくとかき候」と長々とことわりけり。それならば、始よりみょづくとかけかしと、片腹いたし。文字をつゞめんとて、多くの文字をそへ、詞を短くせんとてかへりてながくなる事をしらず。翁、世間の事を見るに、此たぐひ多し。たとへば、ものをいふにも、常にいひつけたるやうにいへばよきを、我しりがほに、漢語などにて舌短にいひつれば、人きょとらぬ程に、亦いひなほしなんどして、いとむづかし。事をなすにも、今までなし來るやうにすればよきを、我かしこげに理窟をもて手廻しにしつれば、事つかふる程に、又でなほしなんどして、跡へもどる事おほし。かやうの事は、物馴れぬ人のある事なり。いづれもみょづくの文にたぐふべし。其外、なに事によらず、たゞありふりたるやうにすれば、やすらかにして事ゆきぬるを、よろしき仕方こそあれとて、あたらしく仕出しぬれば、事多くむづかしくなりつょ、かねての用意とはちがふ物なり。中にも國家の政には、もつとも此意得あるべき事也。古より、新進の人、己が材智をあらはさんとて、好んで新意を出し、舊政を改むる事、いづれの代にもなきにあらず。其内十に二三は益ある事もあれど、大かたは近効をのみ見て遠慮を忘れ、事の易きをのみ見て難きをしらず。さる程に思の外にさはる事おほく出來て、貨財を費し人力

ありふりたる―ありふれたる

奔競―爭ひせりあふこと

唐庚―宋人、文章精密を以て名あり文集三十卷あり

を耗しながら、何の甲斐なき事になるぞかし。しかのみならず、毛を吹いて疵を求め、風なうして波を生じ、忠厚の風日に敗れ、奔競の習日に長ずる程に、たとひ小利を得るとも、ながく國家の害を貽す事輕きにあらず。いはんや祖宗の良法成策、先代より用ひ來りて、天下の耳熟し目馴れし事久し。かやうの類は、輕々しくいろふ事あるべからず。宋の熙寧中に、しばしば法を變じければ、唐庚存舊の論をあらはしけるが、「國家の舊物は常に民の耳目に習はすべし。不得已に非ざるよりは、改易變置して民心を失ふべからず」と論じけるこそ、尤其理ある事に覺え侍れ。但それも一槩にはいひがたし。たとへば、祖宗の代に、時宜にしたがひ假に建置きて、ながく用ふべからざる事あり、いまだ首尾備はらざる事あり。さやうの類は、後嗣の代に至つて、或は改革し、或は斟酌してこそ、祖宗の志をなすともいふべけれ。もし祖宗の法とてそれに泥みて、世のわづらひ、治のさまたげとも成る事を、其まょさし置きなば、何をもて舊弊を改むべき。何をもて善政を行ふべき。又なにをもて孝子慈孫ある事を望むべき。定めて祖宗の心にもかなふべからず」とて、翁古を援き今を證して語りけるに、夏のみじか夜はやあけがたにちかければ、諸客皆いとま申してまかりぬ。

○つれ〴〵草

ある時、諸客來り會してけるに、翁が傍に兼好が徒然草あるを見て、一人の客いひけるは、「兼好は倭語に長じたる者にて、風景人情をよくいひとり、人に願を解しめ候。翁も好みて見給へるや」翁、「いやとよ、病中臥しがちにて日をくらしかね候故、かやうの書を兒輩に讀ませて承るにて候。これをとさして好むといふにも侍らず」といへば、外の一人、「兼好はやゝ見識ある人のやうに世にも申習はし候。翁はいかゞ思し給ふにや」翁、「世に一種の侘人ありて、兼好をしたひ侍る。それは、彼が名利をいとひ、閑寂を樂しむに同心するゆゑにて候。翁は、それもたしかには思ひ侍らず。太平記に、高師直が爲に艶書をかきし事見えたり。其後、伊賀守橘成忠が招に仍つて、伊賀の國に赴きしが、そこにて成忠が娘に通ぜし事、園太曆に載せて、其時の歌なども見えたり。是にてしるべし、世に諂らひ色にふけり、隱逸をこのみ名利をいとふといへど、もとより隱者の操ある人にあらず。されば、徒然草も佛法に朶頤し、諄々として出離をとくかと見れば、女色に垂涎して淫奔を語る、なにの見識かあるべき。されど、徒然草に限らず、此

朶頤—むさぼり求むること

程我國の物がたり草子をよませて承るに、事實を記し候書、三鏡、榮華物語などの外は、いづれも取るにたらぬものにて候。大かたはあまき佛ばなしにて、あきはて侍れど、それは世の流弊なればいかゞせん。其外、ともすれば好色のさたにて、聞くに忍びざる事おほく。中にも伊勢、源氏物がたりなどは、年弱なる男女には、禁じて見すまじき物なり。淫亂を導く媒ともなりぬべし。しかるに、縉紳家に、源氏物語を我國の寶といへるは、いかなる故ともしらず。定めて倭語の妙を得たるに心醉しての事にやあらむ。いはゆる庶子の春花を採つて、家丞の秋實を忘るゝ也。それに、近世此物語を註釋し講說して、毛詩に淫奔の詩を舉げて勸懲をしめすごとく、人の戒世の敎とするといへるは、俗話にいふ抄子定木なるべし。いかにとなれば、二南は脩身齊家の本なり。雅頌は論レ道述レ德の辭也。國風はもとより里巷の男女各言レ情の詩なれば、正もあり邪もあれども、其邪といふも、媒介によらずして淫奔するといふばかりにて、いづれも后妃を盜み繼母寡嫂に淫するやうの事やある。又伊勢、源氏のごとく。邪淫の事のみを始終いひ盡してやむにはあらず。よりて、正を見てはみづから勸めて、邪を見てはみづからこらすぞかし。伊勢、源氏は、いはゞ長恨歌、西廂記などの品にて、其冗長にして

三鏡—大鏡 增鏡、水鏡

縉紳—原本薦紳

二南、雅頌、國風—皆毛詩の卷の名なり

氷炭薫蕕を云々―薫は香草蕕は臭草、卽ち善惡正邪など相反するものの同在する意

俳諧―滑稽

醜惡なる物ぞかし。然るを、聖人垂教の書に比していふは、誠に氷炭薫蕕をひとしうするなるべし。昔より、我國釋教世に行はれて、佛につかふるより重しとするはなく。荒淫俗をなして、色に耽るより樂しとするはなし。それ故に、當時あらはしぬる物語もこの二端をしるすを高致とするならし。さて自餘の記しおく事も、多くは奇怪妄誕の談ならねば、俳諧鄙陋の說なり。ひとつとして義理にわたる事なし。責て此徒然草ほどの物も見當らず候。世に賞翫するも理にて侍る。其載る所、佛法のさた好色の事を除きて、風景をのべ人情をかたり、又は世にあらゆる種々の事をしるしおきけるも、尤おろかに聞ゆる事もあれども、大かたは理趣ある事になん覺え侍る。中にも、雜念をいましめて、「我心に主あらましかば、」そこばくの事は入來らじ」といひ、懈怠をいましめて、「道を學する人、夕には朝ある事を思はず、朝には夕ある事を思はず、たゞ今の一念の上においてたゞちにすゝむべし」といひ、貝をおほふたとへを引きて、「萬の事外にむきて求むべからず、たゞこゝもとを正しくして、前程をとふ事なかれ」といひ、松下禪尼のあかり障子をはられし事を引きて、世を治むる道儉約をもととする事をいひ、高名の木のぼりがいひし事を引きて、あやまちは危き程はなくして、安き所になりてある事をいふ。外にもかやうのたぐひ多かり。いづれも簡要の旨にて、聖賢の敎にもかなひぬべし。

あかり障子―今障子といふに同じ

時とし―時としてか

さすが人物怜俐なる故に、其いふ所時とし道理にあたる事もあるにこそ。鐵中錚々傭中佼々といへる類なり。管中より豹を窺つて、一斑を見るともいふべし。たゞし、是ほど顯悟なる人もおほく得がたし。もし聖賢の道を學ばしめば、中々釋門に陷るには至らじ。をしき事なり。それに、釋門に入りにし甲斐さへなくて、女色に溺れ一生を誤り、今に至つて汚名を殘しつるこそ、なげきても餘ある事なれ。是につけても、人欲の險しきをしるべし。

○靑砥が續松

しかはいへど、「君子は人をもて言をすてず」と聖人ものたまへり。翁も、徒然草にて一の益を得たる事こそ侍れ。それは、かの卷中の一條に、「いひやせましいはずやあらましとおもふ事は、おほやうはいはぬがよきなり」とあり。又一言芳談とやらんいふ物語を引きて、「しやせましせずやあらましと思ふ事は、おほやうはせぬがよきなり」ともあり。翁、いつも言語飲食につけて此語を思ひ出し侍る。いうてあしきと知れたる事は、誰も

いはぬものなり。いうてもよしいはでもよしとおもふ事をいうて、やゝもすれば跡にくやむぞかし。喰ひてあたるとしれたる物は、誰もくはぬ物なり。喰ひてもよしくはでもよしとおもふ物を喰ひて、やゝもすれば跡にくやむぞかし。兼好も身に覺えありてこそかくはいひつらめ。よのつねの人の省になる語なり。但兼好は老莊の無爲を尚ぶ人なれば、何事も必ずしもいはんとせず、必ずしもなさんとせぬ心にてかくいふなるべし。今翁が此語を用ふるは、さにてはなし。孟子に、「可以取。可以取。可以無取。取傷廉」といへる、其意、此語と相似たり。可以取は、はじめかくと見て、可以無取は、かさねて料簡をくはふる意なり。されば、兼好が此語も、かくいへばとて、一槩にたどいはぬがよし、せぬがよしとは意得べからず。其いはずやあらまし、せずやあらましと思ふ所に意をつくべし。道理にて思ふと、勝手にておもふとのちがひあるべし。道理においていふべき事なるを思ひよらずして、勝手にいはぬがよしと思うていはでやみ、道理においてすべき事なるを思ひよらずして、勝手にせぬがよしとおもうてせずしてやみなば、ひかへがちにて後の悔みこそなかるべけれども、それにはいつか善にすゝみ。義にいさむべき。されば、「まそほのすゝきます ほのすゝき」といふ事は、なに事かはしらねども、雨中に簑笠著て尋ねにゆきしをば、兼好もよしとおもへばこそ、是をもしるしおきけめ。

たゞうど―凡人

さいつころ、太平記を兒輩のよむを聞侍るに、北野通夜物がたりに、むかし青砥左衞門、夜に入りて出仕しけるに、いつも燧袋に入れて持ちたる錢を、十文誤つて滑川へ落したりけるを、よしさてもあれかしとてこそ行過ぐべかりしを、其邊の人家へ人を走らかし、錢五十文を出して續松を十把買つて、是を燃しつゝ、川を浚へて、終に十文の錢を求め得たりける。さていひける、「十文の錢は、たゞ今求めずは、水底に沈みてながく失せぬべし。五十文の錢は、商人の手に渉りて、ながくうせず。彼と我となにの差別かあるべき。彼此六十文の錢を失はず。豈天下の利にあらずや」といひしとぞ。五十文の錢を費して十文の錢を求むるは、常人の思案にていはゞ、勝手にはきはめてせぬをよしとする事なれども、道理においてすべき所を考へてかくするにこそ。いはゞ輕き事のやうなれども、拔群の見識なくてはなるまじき事ぞかし。「商人と我となにの差別かあるべき」といへるは、「楚王失弓、楚人得之」といふにかなひて、「天下の利にあらずや」といへるは、楚人得之といふよりも其識量一かさ大きなる事なり。青砥左衞門たゞうどにはあらず、其言行世に傳らざるこそ遺恨なる事なれ。

○渡部番

ある時、諸客來會せしに、翁いひけるは、「ちかき比、我國の書をよませて承るに、古より茂材懿行の人もあるべけれど、ふるき物語などは、少しも道理のさたに及ぶ事なく、記錄の類も、國史をはじめ、時政事實の略をしるす迄にて、當時の人物、又は人の言行をば、しるすべき事ともおもひよらねば、しるし置くべきやうもなし。よりて忠臣義士の事も、世に湮沒して傳らず。是も我國の一缺事といふべし。其後武家の世になりて、勇將烈士、君のため國のため死を潔うする事、歷擧するにいとまあらず。責て是はすこし風教の助ともなりなんかし。もし上にたち下を治る人にていはど、平家治世のはじめ、小松の重盛をこそ世に賢人とは稱すれ。父淸盛暴逆にして君に背きしを、重盛その間にゐて、忠孝ふたつながら闕けず、誠に後世臣子たる者の法とすべし。されど、燈籠の大臣といはれ、異國へ金を渡せし事を見るに、材識暗弱、恐らくはいふにたらず。其子維盛、浮島が原にて水鳥の羽音におどろきて都へにげ歸り、天下の人口に係りしも、家法嚴ならずして、子弟驕泰にそだつが故なり。燈籠の念佛崇をなすなるべし。

茂才懿行―すぐれたる才よき行

浮島が原にて云々―浮島が原は駿河駿東郡にあり。維盛源頼朝と富士川を挾みて陣し、半夜水鳥の羽音に驚きて敗走せるなり

其餘平家の君臣やゝ勇壯なるもあれども、それも優柔不斷にして、材力弱ければ、將率は運籌決勝の略なく、士卒は先登陷陣の勇なし。されば、上總介忠淸が士大將としていかめしく振舞ひしも、維盛と同じくにげ歸りしをば、其時の人、「ころもたゞきよ」と嘲弄せしぞかし。又筑後守貞能は、淸盛第一の寵臣にて、平家全盛の時は、意氣揚々たりしが、壽永年中、平家安德帝を奉じて西海に赴きし折しも、貞能出征して凱旋せしが、途中にて車駕に出合ひしに、ひとり引きちがへて都へ歸りしかども、身の置所なきまゝに、平家の跡を追ひて西國へ行きしが、平家の勢日に蹙りて、日に危亡に瀕きを見て、又逃去つて釋門に入りつゝ、肥後入道と稱しける。其後無程源氏の世となりしかば、鎌倉に至り、宇都宮朝綱と舊識のよしみあるによりて、朝綱に因て乞ひ降し故に、一命を助けられ、抖擻行脚して、あなたこなたと餬ひつゝ、一生を終るときこそし。恥をしらざるの甚しきものなり。是につきて、渡部右馬允番が事を感じ侍る。義經西國へ落ちし時、渡部にて番がもとへよりて事のよしをいひければ、番あはれみて見送りけり、後に其事聞えて、關東にめされて、梶原にあづけられ、十二年を經たりし程に、鎭西の追討使に、天野藤内遠景むかひけり。大將家のきりものにて、十世の宥を得る程の事な

運籌―はかりごとをめぐらすこと

抖擻―行脚といふに同じ

きりもの―きけもの、はばきゝ

りけり。（加賀の國に天野何がしといひし一人の浪士ありしが、遠景が子孫なり。それが家に、頼朝より遠景に下し給りし御教書一通あり。「天野藤内遠景は奉公他に異なるの間、頼朝十代、遠景十代所領相違あるべからず」とかけるよし、それをみたる人の語りし。いとめづらしき事におぼゆるまゝ、今十世の宥とはいふなり）其時鎭西の任はてゝ歸りしが、上洛の時渡邊を通りて、番が妹をめとりけり。相具して關東に下向しけるが、遠景、此上は彼御氣色においては、いかにもし申しゆるすべし。若御承引なくば、遠景申しあづかるべし」といひければ、番が親類郎等、「さりとも今は右馬殿の召籠はゆるされなん」と悅びあへり。さて遠景關東に下り著きて、いつしか使を番がもとへつかはしていひけるは、「思ひがけずかくゆかりに成りまゐらせて候へば、ひとへに親ともたのみ奉るべし。內外に付けて疎略を存ずべからず」といひやりたりけり。番多年の召人にて、今日きらるべしあすきらるべしといひて、十餘年に及びけれども、荷擔人一人もなければ、申しなだむる者なし。たまゝかゝるたより出來けるは、いかばかりかうれしかるべきに、番がいひけるは、「弓箭とる身のかゝるめにあふ事、恥にてあらず　さこそたよりなき身なれども、あながちにそのぬしこひねがふべき婿にあらず」とて、返事にいひけるは、「したしくならせ給ふのよし、存知がたく候。番は獨身の者にて候へば、御ゆかりに成りまゐらすべき事覺え候はず」とあららかにいひやりければ、遠景大きに憤り、やすからぬ事に思ひて、ともすれば大將にあしざまに申しければ、いよ〳〵罪おもくなりまさりにけり。されば共、番は少しもいたまず、物ともせざりけり。かゝる程に、大將奧州泰衡を伐ちし時、番をめしていはれけるは、「汝をとくに身のいとまとらすべかりしに、思ふ子細ありて今日までは生け置きたるなり。身の安否は此たびの合戰によるべし」とて、鎧馬鞍など給りければ、番かしこまり悅びてむかひけるが、身命を惜まずゆゝしかりければ、其科をゆるされて、本領返し給り、二たび舊里に歸りしとなん。番いかなる人とはしらねど、始終死を守りて志をかへざりしにて、其操の廉潔なる事思ひやるべし。當時嬖幸の臣にゆかりを求めて、命をたすかるをさへ屑とせず。いはんや貞能がごとく、仇を忘れ勢に附きて、苟も免るゝを幸とせんや。孔子も、行己有恥をもて士とのたまへり。番がごとき誠の士といふべし。

○大佛の錢

容悅—前に註せり

光源院殿—足利第十四代將軍義輝

金仙—佛

されども、忠淸、貞能がごときは、もとより容悅の具臣なれば、ふかくは論ずるにたらず。翁が日ごろうたてしくおもふは、重衡の事にて侍る。其身不幸にして生捕れしは、さして耻辱にあらず。然るに、鎌倉に囚れし時は、宴遊の席に臨みて艶女に欵語し、奈良へ渡されし時は、警衛の士にねがうて愛妾に邂逅す。すべて丈夫のすべき事にあらず、いとみぐるしき事なり。しかるに、それをばいさゝか恥ずして、父命によりて奈良の大佛を燬きし事を、自からも大きなる罪惡とくやみおそれて、鎌倉にて賴朝の前にても陳謝し、京師にて法然に邂逅しても、此事をいひ出してふかくくやみしは、罪障懺悔の爲とこそ思はれけめ。その愚暗是非もなき事なり。近世松永彈正がふたゝび奈良の大佛をやきしを、信長の猛惡にてさへ、是をば大罪と思はるればこそ、松永が主君三好義長を弑し、光源院殿をころし奉りし大逆罪にならべて、三ツの人のならぬ事をしたるとて、彈正をはぢしめられしぞかし。嗚呼佛法の人心を蠱惑する事、何ぞこゝに至るや。然るに寛文の比かとよ、松平故伊豆守信綱執政の時、千年以來金仙を尊みて、かく成りたる風俗の後に出でて、京の大佛を鑄て錢とし、天下を利益せられしこそ、先にも後にもきかざる事なれ。其卓識誠に古今に傑出すともいふべし。御當家創業以後、文明日に開き

私のもとめなく—賄賂をむさぼらず

し故にかくのごとき人も出づるぞかし。重愆などをしてきかしめば、ほとんど驚死にも至りつべし。されば、伊豆守善政多き中に、始て上聞して天下の殉死を禁じ、諸國の人質をやめ、大佛を錢に鑄られし、此三をば、世にも大器量の事にいひ傳へしなり。殉死を禁ぜられしは、ながく後世の害を除き、人質をやめられしは、あまねく諸國の患をすくひ、大佛を錢に鑄られしは、大きに古今の惑をとく。天下後世において大功德ありといふべし。但此時、伊豆守に限らず、諸執政いづれも至公至明にして、諸侯、諸役人に對して私のもとめなく、私の怒なく、只正道をもて下知せられし程に、其威令下に行はれしかば、諸侯諸役人も各おそれ愼みて、身持も正しかりしぞかし。しかも己が材智をもて人をふさがず、己が權柄をもて下をあなどらねば、諸役人も執政の威勢にはゞからず、上の御爲又は官守の事に付いては、必ず面爭ひて、言を盡さゞるなし。昔魯公伯禽、魯に、入封の時、周公いましめて、「平易近民、民必歸之」と宣へり。かの諸執政、この周公の詔に本づかるゝにてもなけれども、其心公にして治道に明なれば、おのづから聖人の心にも恊へり。されば其餘澤今に至りて、太平の化日に盛なる事、上の御盛德とは申しながら、かの諸執政の力なきにもあらず。中に就て伊豆守の平易にて無造作な

りしは、世にたぐひなき事にてありけり。其頃井上新左衛門といふ人は、執政府の從事たりしが、疎直に文飾なきをもて、伊豆守のために愛せらる。新左衛門常に詼諧を好みて、其爲人東方朔に似たり。ある時、いづかたよりか鱈を獻上しけるを、御前に披露するとて、伊豆守見屆けられしに、鱈に塵つきてありしかば、伊豆守氣色損じて、取次ぐ人をしかられしを、新左衛門傍にありしが、「いや、鱈には塵ある筈にて候」といふを伊豆守「いかに」ととへば、「三番叟に、ちりやたらりと申候はずや」といふ時に、伊豆守聞きて笑ひつゝ、氣色なほりて、「とかく物に念のいらぬ故にて候。なに事も念をいるるにしくはなし」といはれしを、新左衛門、「各樣には、御念のいり候がよく候。我等ごとき輕き者は、あまり念をいれ候へば、却てあしき事もある物にて候」といふを、伊豆守「なにか念をいれてあしきやうあるべき」といはれければ、「其事に候。昔唐の玄宗、方士に命じて、楊貴妃のありかを尋ねられしが、方士蓬萊宮に到りて貴妃にあひし程に、歸りて此よしを奏聞せんとて、其しるしを乞ひしかば、玉の簪をたまはりけり。しかるをあまり念過ぎて是は世にたぐひあるべき物なりとて、かさねて玄宗、貴妃との密語を聞きて還り報じければ、一旦首尾はよかりしが、玄宗、方士を疑ひそめられしより

方士―神仙の道を修むる人。道士

思はるゝは、此密語は貴妃とわれふたりより外他人知るべき事にあらず。然るを方士知りてかくいふは、兼て貴妃と通じたるにやと、つひに方士を誅し給ひしとなり。「前の玉の簪ばかりにて能く候を、あまり念をいれたる故にかくのごとし」といひければ、又新左が例のそぞろごとをいふとて、一座興に入りてやみける。其後天草の事出來て、伊豆守奉命てゆかれしが、不日に賊みな伏誅て江戸へ歸著せられしに、旅裝のまゝ直に登城ありしかば、折ふし在城の面々、殘らず迎勞しけり。新左衛門も衆中にありけるを、伊豆守はやく見つけて、「そこに語る事こそあれ。今御前より罷りて」とて、御前へ出られ、さてやゝしばらくありて、御前より退かれ、衆中にていはれしは、「此たび天草にて、諸侯一度に賊壘へ向ふべしと約束定りて、さておしよする時は、某が本陣にて、鐘を撞くべし。それを相圖に諸手の衆あつまるべしといひ合せて、僉議の間日を經けるが、某おもふには、今夜にても賊方の者か又は馬鹿ものありて、忍び入りて、鐘を撞きて、我衆を誤る事もあらむかと、撞木を取りよせて我側に置きけるが、又おもふには、必ず撞木にも限るべからず。鐵砲やうの物にても撞くまじきにもあらずと、鐘を地へおろさせ、こもにて卷きて置かせたり。然る所に、賊徒挑戰つて、思ひよらず俄に手合せ

迎勞―出迎

馬鹿ものありて―原本「あ」を脱す

ありければ、さらば鐘を撞くべしといふに、上へ釣上げこもをとく程に、つひにまにあはずして、たゞかゝりに懸りて攻潰しけり。其時、かのいつぞや申されし、方士蓬萊宮の物語は、かやうの事にこそと、そこの事を思ひ出せし」とありしとなり。これ戯れに近き物語なれども、伊豆守理にさとく、人の言をすてず、それに、たゞ今馬よりおり、御前へ出でて天草の首尾を申上げらるゝ折ふし、常人ならば、中々おもひつけじ。たとひ思ひつくとも、此節はさてやむべき事なるを、只常の氣色にて、稠人廣座の中ともいはず、我あやまりたりし事をも其のまゝに語られしにぞ、伊豆守の心公にして、器量の大きなるもしられける。世に古今の良相とするも、げに理と覺ゆるぞかし。是をもて見るに、世の權威にほこり、邊幅を脩る人は、誠に馬援がいはゆる井底の蛙也。嗚呼いやしいかな」

馬よりおり—原本「馬おりより」とあり

○泰時の無欲

他日繼ぎての會に、諸客、「前日平家の人物をば御評論承りて候。鎌倉以來の人物は多き事に候へば、あまねく承るに及ばず。其中に、翁の取給へる人は誰々にて候や承りたく候」といへば、翁「鎌倉治世の後に至りて、北條泰時こそ、漢の丙魏、唐の姚宋にもはづかしからぬ人にて候へ。わが國にはあまり比類なかるべし。此人、樽尾の明慧にあうて、「某不肖の身をもて、重任に當り、群下に臨み侍る。いかゞして衆を治め、爭をやめ侍るべき」ととはれしに、明慧、「たゞ無欲になり給へ」といはれしを。泰時重ねて、「某ひとり無欲に成り候共、群下なにとて無欲に成り候べき」といはれけるに、明慧、「下に目をつけずして、御身先無欲に成りて見給へ」といはれしを、泰時ふかく信じて、父義時死去の時、所領財寶大かた諸弟に配分して、其身はわづかに足るばかり取られけるを、二位の尼、泰時に、「自分の取られやうあまりすくなき事」といはれしに、「某は家督をうけ候へば、なにの乏しき事もなく候。只弟どものゆたかなるやうにとこそおもひ候へ」といはれしかば、二位の尼も感涙に及ばれしが、其後年を逐つて親族蕭穆し、鎌倉の武臣も感服しけり。明慧浮屠なれども、孔子の季康子に宣ひし、「苟子之不欲、雖賞之不竊」といふにかなへり。泰時の明慧の一言を信用して、鎌倉よく治りしにて、聖人の言誣ふべからざる事をしるべし。明慧も唯人にはあらざりけらし。さて、泰時家督以後、日ごとにつとめて公廳へ出でて、ひねもそ蹇々として庶務を治められしに、群長

蕭穆—和らぎて爭なきこと
浮屠—僧侶
蹇々—一身をなげうちて事に當るをいふ

を待つ事恭謹にして、爭を分ち訟を聽るゝ事明恕なりしこと、東鑑を見てしるべし。昔ある老儒の語るをきゝし。泰時ある時、訟をきかれしに、雙方對決しけるが、半に成りて、一方の相手忽に理に服して、「只今迄己が申す所をよしと思ひて候へばこそ爭訟に及び候へども、今日始て手前の非を覺悟いたして候。此上はもはや一言申すにも及ばず」とてやみぬ。泰時感じて、「此爭は汝がまけなり。理非によりて決斷すべし。但某今迄多くの訟をきゝしかども、卽座に汝がごとく理に服するものを見ず。是を賞せずして なにをか賞すべき」とて、別に恩賞を行はれしが、後は爭訟もやうやく稀に成りて、訟庭も閑になりしとぞ。此事何やらん古き物語にて見しといひしが、忘れにき。其後考へもし侍らず。此一事にても、泰時の公明にして、無情者は其辭を盡す事を得ず。又恩威二つながら正しき事もしられたり。其孫謀のよき、後嗣に及びて、時賴、時宗いづれも遺訓を守り、成法に依りてよく政を務められしかば、四方の人心鎌倉に歸嚮せざるはなし。北條氏皇朝の陪臣をもて天下の權を執りて、數代の安きを得たるは、泰時の功といふべし。世に時賴を泰時より賢明なるやうに稱しぬるは、意得がたく思ひ侍る。たゞ早く高位を脫屣して浮屠に歸し。微行をこのみ下情を察せらしを、奇特の事とこそいふ

孫謀―前に註せり

脫屣―惜げなくすつること

らめ。それは道理をしらぬ人のいふ事なり。其身宗廟社稷の重きを受けて、自ら佛寺に逃れ。微行を樂とする事やあるべき。君德を穢し、治體を失へり。人主の法とすべからず。是にて見れば、其治規模近小にして、遠大に昧かりけらし。中々に泰時に及ぶべき人にあらず。其外鎌倉の人物を考ふるに、上下ともにすべて取るに足らぬ人なるべし。但建國のはじめ、あまたの人材幕下に群集すといへど、血氣勇悍の人迄にて、いづれも粗暴無識、皆絳灌が下にて候。其中に、畠山重忠は、勇力世にすぐれ、古今の壯士といふばかりにてもなく、志操潔白にして、きはめて正直の人なり。世に和田と並稱するは、その倫に非ず。梶原が讒にあひし時、「誓文をもて陳謝せよ」といひしを、「重忠、一生僞をいはねば、今更誓文に及ぶべきやうなしとてうけざりしかども、賴朝も疑をのこさず、梶原も怒を加へず。是にてもとより忠信の上下に感孚する事をしるべし。其上、己が善に伐らず、人の功を蔽はず、おのづから寬厚長者の氣象なんありけり。當時諸將の中に求むるに、少しき似たる人もなし。不幸にして、三浦と同じく、前後北條が爲にころさるゝこそ、いと口惜き事なれ。其最後も、さすがに他よりは一きはいさぎよく見えしぞかし。こゝに至りて、時政、義時が惡、天道にさかひ、人望に背く、其罪

絳灌―絳侯（周勃）灌嬰の二人、共に漢高祖の功臣にして武勇一邊の人

田樂入道―北條高時をさす、常に田樂を好みし故なり
縉紳家―公卿
韜鈐家―武將
龍馬の諫―龍馬に託して後醍醐帝を諫め奉りしこと太平記に詳し

誅しても餘りあり。もし泰時なかりせば、北條家の滅びむ事、高時が時を待ち侍らじ。ひとり田樂入道をのみ罪すべからず。

○楠正成

建武中興の人物にては、縉紳家に藤藤房、韜鈐家に楠正成、もとより輿論の歸する所にて候。もし其人品をいはゞ、藤房は公卿輔弼の臣たり。正成は將帥禦侮の臣たり。其材の大小をいはゞ、正成の材、藤房の及ぶ所にあらず。藤房龍馬の諫は、直言極諫朝廷を聳動す。まことに朝陽の鳳鳴といふべし。然れども、正成恢復の功とは並べ論じがたし。其上藤房は一諫の後國をさり世をのがれしが、正成は其身國難に死するのみにあらず、忠義代々家に傳へ、天下にあらはる。當時誰か正成に比する人あるべき。たゞし正成も外の言行世に傳はらざれば、その爲人くはしき事はしれ侍らず。世に楠家の遺書とて、きれ〴〵流布する物あれど、おほくは後人の僞作と見え侍る。しかれども、其しるき事は、喪亂の始、一城をもて天下を引受けて、始終少しも挫屈せざるにて、其材量のたくましきを思ひはかるべし。殊に仰慕すべきは、天下一盛一衰の間、名將勇士といへども、

尙論―古にさかのぼりて古人の行跡などを論ずること
關趙―「關張」にて關羽張飛をさすなるべし

時勢に附いて反側を常とし、朝夕をたもたざる中に、獨楠家のみ子孫累葉かたく遺訓をまもり、一門闔族心を壹にし、力を戮せ、各身をもて國に報い、三代の間一人も貳心ある事をきかず。古今比類なかるべし。正成德澤深厚にして、ながく人心を結ぶ事なからんには、いかでかかくの如くなるべき。然るに世の尙論する人、推尊んで諸葛孔明に比するは、兩人いづれも兵略をつとめ、興復を謀り、父子國事に死するも同じければなり。それはさる事なれども、孔明は臥龍なり。道德を懷抱し、功名を遺外し、草廬にて一生を終んとせしに、はからざるに蜀の先主の三顧に遇て、不得已して出仕へしが、一朝關趙が上に立ちて、君臣魚水のごとくなりし。されば、その出處、伊尹、呂望に近しとなん古人の論もあるぞかし。正成はもと功名科中の人なり。後醍醐帝笠置に臨幸の時、近國の名士を徵れし間、正成も召に應じて參じけり。是その出處孔明とは大きに異なる上、恢復の後も尊氏義貞の下に列して、專に任用せらるゝ事をきかず。孔明をもて擬せば、恐らくは其倫にあらじ。其兵を用ふるも、孔明は正大にして奇計をもちひず、節制の兵といふべし。翁かねて論ずらく、正成が敵を料り兵を用ふるは、韓信に似たり。韓信楚に寄食する時より、既に項王の易制をしり、正成河内に家居する時より、既に鎌

倉の易弱をしる。よりて韓信高祖を見て、盛に項王の勇を稱して、其勇は恐るゝにたらざる事をいひ、正成、後醍醐帝に謁して、盛に鎌倉の強きを稱して、其強きは恃に足らざる事をいふ。其後兩人共に多くは籌策を用ひて取勝し事、掌握にあるが如し。韓信は囊沙背水敵を破り、正成は鉤屏木偶敵を鏖にするを見給へ。兩人の兵を用ふること一轍に出でざるかは。何れも摧堅拉鋭といへど、韓信が材は敏速に長じてよく攻む、いまだその守るをきかず。正成が材は持重にたへてよく守る、未だその攻むるを見ず。韓信に城を守らしめば、よく正成が如くならんか。正成に敵を攻めしめば、よく韓信が如くならんか。古人も「攻守勢殊也」といへば、いかゞあるべき。翁が未だ決せざる所也。しかいへど、韓信が兵は、利欲の私にいでて、一身のためにし、正成が兵は、忠義の公にいでて、國家のためにす。其底績の心おのづから同じからず。むかし河内の人の語りしとて或人翁にいひしは、金剛山のあたりに、南北の明神と號する祠あり。その中坐を正成とす。左右は孫子吳子なり。正成常に、「われ天下に武功を立つる事は孫吳のかげなり」といひしによりて、是を祔祭するとぞ。是にて今に正成が遺愛の民にある事をしるべし。但正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を學びずして、

掌握にあるが如し―手に握れるものを處置するが如しとの意にて、容易にして誤なき意

底績―功を立つる

孫吳が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし。湊川にて自殺するとて、最後の一念を語る事甚だ陋し。

○足利家の亂れ

足利一統の後、幕下の人物にては、細川頼之をこそ世に良相と稱し侍れ。先君の遺命をうけ、幼主を輔け、上を奉じ下を御するをみるに、やゝ老成の材といふべし。然れども、小術を用ひて君威を強うする事をしりて、曾て陳善閉邪ことをしらず。されば、義滿昏弱の君にあらず。其輔佐よろしからば、いかやうなる英主ともなるべき人ぞかし。その驕泰をきはめ、僭逆を肆にするに至るは、頼之といへども其罪をのがるべからず。是をもていふに、其人稱するにたらず。其外足利家の名門右族、いづれも跋扈將軍にあらざるはなし。應仁文明の比、京都には細川畠山、黨を分ち、鎌倉には足利上杉、雄を爭ひ、日夜合戰して虚しき月なし。しかのみならず、君臣相害し、親族相殺し、その毒鬼蜮のごとく、其暴虎狼のごとし。天下に人倫の道絶えはてゝ、たゞ日月地に墜ちざる迄にぞありける。是をぞ古今亂世の極といふべし。もろこしにていはゞ、李唐の季、五代

鬼蜮―「蜮」は「魃」に通ず。即ち共に「おに」の意なり

の初に似たり。いつぞや唐書を讀み侍りしに　僖宗、昭宗の時に至りて、其頃、君上の廢立多くは人臣の手にいでしかば、楊復恭が、昭宗を己がたてたるとて、「負心門生天子」といひしをこそ、古今になき事なれ、とあまりの事にをかしかりしか。其後我朝近代の野史にて、「新參の主人譜代の家人に背くやうやある」といひし事あるを見て、さても亂世の風俗、からもやまともよく似たる事よと思ひ侍りし。されば應仁の後、足利家の代を終るまで、前後百年の間、其名將勇士、寒促飛廉が徒にあらざれば、賁育黝舍が類なり。中々賢愚得失を論ずるに及ばず。但鎌倉兩上杉の時、太田道灌こそ、名將の譽ありし。然れども翁おもへらく、上杉氏、山内、扇谷兩黨たりといへども、山内を宗室とす。此時越後の上杉房顯山内の家を繼ぎて、其子顯定に及べり。道灌は其父道眞より、扇谷の上杉定正が家老たれば、定正を輔けて、顯定と嫡庶の義を講じ、親族の好を篤くして、扇谷の家を安んじてこそ、身の輔相たりし甲斐もあるべきを、反つて謀をもて山内の權を奪ひしかば、兩上杉不和になりける程に、終に兵難を招きて、定正と同じく顯定が爲にころされたり。恐らくは、其材、主を庇し身を保つにたらざるに似たり。しかいへど、武略すぐれたるのみにあらず、文學に志ざし、和歌をこのみて、かゝる亂世には得がたき人ともいふべし。翁いつも思ひいでて感吟するは、世に傳ふる、「かゝる時さこそ命の」とよめる歌にて侍る。此歌を、世には道灌敵にころさるゝ時、臨終によみしといへど、さにてはあらず。慕景集とて、彼が自からかきあつめし藻鹽草あり。其中に此歌をのせて、其詞書に、

藻鹽草―筆記もの

康正元年の冬、藤澤の役に、かたきも味方も入りまじり、三日をかさねていどみあらそふ事になりぬ。されども、味方の武威つよくして、かたき北條憲定のぬしつひに自腹して、餘兵おのがじしむなしうなり、あるはあたにあたりてかたみに死するも侍る時、藤澤のかたへの松原の群にてたゝかふ男あるに、味方は中村治部少輔藤原重頼とて、京家の人の世にしづみて、屋形に扶持せられて侍りしにん。敵の男は、栗毛なる駒に乘りて、二ッ引りやうに上り龍の紋付きたるさしものなりけり。遠目ながら、よろひの毛もいかめしうぞみえける。しばしたゝかうて鎗をあはせしに、目の前に敵の男つきとめられ、やがて中村手づから首を取りて、我陣に來たりて、かう〳〵となん語りけるに、いまだ壯年にもたらぬ男の、色しろうしてたけたかゝるべき心地したり。鬢のあたりたゞならずたきしめつゝ

屋形―上杉定正

あはれもいやまし、仇ながらにくからぬおもかげなり。中村重頼、「この心ばへのやさしきに、歌ひとつものして手向に」とすゝめ侍りければ、その首にむかひて、

かゝるときさこそ命のをしからめかねてなき身とおもひしらずば

重頼返し、

なき身とは誰もしれども諸ともにいまはにおよぶことをしぞ思ふ

此道灌の歌は、孔子宣へる「勇士不ㇾ忘ㇾ喪ㇾ元」といふ心にもかなひ侍らんかし。されど、古の勇士の不ㇾ忘ㇾ喪ㇾ元といふは、其志朝夕に義を重んずるにあり。首を刎ねらるとも義を失はじとなり。必ずしも戰場に死を輕んずるに限るべからず。我朝の武士の、かねてなき身と思ふといふは、其志戰場に死を輕んずるにあり。首をとらるゝともうしろをみせじとなり。あながち朝夕に義を重んずるによるにあらず。其おもむき同じやうにて、しかもちがひありとしるべし。されど、其僉義はしばらくさし置き、此事歌にのみあらず、敵も味方も、死したるもいきたるも、とりぐ〜いさぎよく、優にやさしき事といふべし。

○武田信繁

爰に足利氏の季世、天文、永祿の間に至りて、賢と稱すべき人あり。甲州武田信玄の弟、左典厩武田信繁是なり。然るに、近代武功をのみ尚びて、德行をば稱せざる故に、信玄の名は高けれども、信繁の賢はかくれて世に知る人なし。今翁があらはさずしては、誰かいひ出づる者あらん。信玄の父信虎、信繁を愛して信玄を廢する心あり。それ故信玄父子不和なりしに、群臣いづれも信玄の武畧に長じたるを見て、信虎をすてゝ信玄に思ひ附きしかば、信玄群臣と謀りて、信虎をすかし出して是を距ぎし程に、信虎甲州へ歸る事かなはず、今川氏眞が外祖父たるによりて、駿河に出奔して、今川家の寄公となりて、年を經れども、信玄つひに父をむかへて國に入ることなし。信虎後に京都に流落して、一生をなん終へたり。信繁、信虎の愛子として、信玄を廢して信繁をたてんとするをば、かねて信玄も知りたる事なれば、必ず忌惡むべし。それに、國に殘りて信玄につかふるは、危難の場なり。父を追出す程の人なれば、露友愛の心あるべきにもあらず。しかるに、信繁嫌疑の間に處ながら、信玄につかへて、兄弟の間少しも違言ある

寄公―かゝりうど

事をきかず。むかし後漢の東海王强は、光武の太子たりしが、廢せられて諸侯王に下れり。明帝母寵によりて、弟をもて立ちて太子となり給ひけるが、其後明帝の代に至りて、東海王恭謹にして、上を奉じ身を全うして終られしをば、前史にも褒稱して記置きしぞかし。されど、それは明帝孝友なればこそ、つかへやすかるべし。信繁はそれとはちがひ、殘忍至極の兄につかへて、朝夕國に惓々として、人臣の節を失はず。信玄といへども、常に親任して疑忌の心なく、始終一のごとし。その忠信誠實人を感孚するにあらずして、いかでかくのごとくなるべき。さて川中島にて討死せられしこそ、尤義にあたりて覺え侍る。信玄一生の危き折なれば、此時死せずして、いつの爲に命ををしむべき。されば主辱かしめらるれば臣死するの義を守りて、こゝろよく討死せられしは、誠に見レ危授レ命といふべし。其子を誡められし條子がきの物を見侍るに、一として恭敬篤實のことにあらざるはなし。其中一條に、「假令海は野となり野は海となるとも、盡未來際おやかたに對して二心あるべからず」といひ、又一條に、「たとひいかやうの御懇意にても、後庭へ出入すべからず」といひ、又一條に、「諸人同座する時、もし好色の語に及ばゝ、目にたゝぬやうにして其座を立つべし」といふにてしりぬ。信繁人がら恭謹なる物から、し

褒稱―ほめたゝふること

感孚―感ぜしめてうごかし化すること

かも身を守ること嚴正にて、かり初にも汚俗に同ぜず。其高風淸節、古人に恥ぢざるべし。又一條に、「合戰に、赴く時、敵ちかくならば、人數を急にあらくつかふべし」とあり。是にて、信繁戰陣に勇ありて、兵をまはすに熟しぬる事をしれり。しかれば、勇威武畧さへ兼備りけらし。易にいはゆる、「知レ剛知レ柔萬夫之望」とは、此人のたぐひをいふべし。嚮に信玄社稷の慮ありて、はやく此人をたてゝ世子とし、監國の任にをらしめば、甲州ながく滅びざらまし。しかるに昏昧剛愎の勝頼に傳へしかば、信玄死していく程なく、織田氏のためにほろぼされにき。なげかしき事にあらずや」

昏昧―智くらく心のくらきこと

○兵法の大事

後日諸客來會しけるに、例の講はてゝ、翁いひけるは、「各日比、武田流の兵法を講ぜらるゝよしきゝ侍る。前日申せし信繁の、「敵近くならば人數をあらくつかふべし」といはれしは、いはゞ輕き事のやうなれ共、尤用レ兵の要を得たり。信繁も是にて毎度利を得て、簡要の事と思はるればこそ、かく子息へもいひ傳へられける。此序に、兵法の事をあら〳〵語り侍るべし。翁日ごろ兵書を考へ見るに、兵術の要は、孫武が十三篇にあり。

十三篇の要は、軍形兵勢の二篇にあり。おほよそ用兵の法は、形勢のふたつに過ぐべからず。しばらく常語にていはゞ、軍形は軍のかた、又は軍のもやうといはんかし。兵勢は兵のきほひ、又は兵の調子といはんかし。軍形は行師の法にして、兵勢は合戰の法なり。軍形は行師の法といふは、今僅に百ばかりの人數にても廻して見給へ。それさへ末々迄は下知とゞかぬ物ぞかし。まいて三軍の師をまはすに、時に當りての下知ばかりにしては、いかで自由に廻るべき。たゞ將帥たる人、成算より割出して、軍伍を定め、手分を定め、約束を定め、其外の事迄分段を明かにして、人數を一定の形にはめて師をやれば、三軍ひとつもやうになりて、なにの造作もなく廻るべし。軍の強弱は、もやうにより生ずるものなり。又兵勢は合戰の法といふは、常の輕き事にても考へ給へ。急節に臨みては、すこし手延なれば、度を失ふ物ぞかし。まいて合戰の勝負は、呼吸の間にあり。それに鎗先に向ひては、士卒の勇怯ひとしからねば、とかく猶豫しやすし。たゞ將帥たる人、こゝに至りては、人數をはげしくあらくつかうて、其きほひに乘じてすゝめば、おのづから調子めいらずして勝利を得べし。兵の勇怯は、調子によりて生ずるものなり。されば、孫子に「勇怯は勢なり。強弱形也」とこそ見えて侍れ。譬ば

三軍―大軍

震恐せしが―原本「せ」なし。今意に從ひて補ふ

陷穽―おとしあな

猛虎深山にありては百獸震恐せしが、陷穽の中に在るに及びては、尾を搖かして食を求むるがごとし。猛虎にはかに弱くなるにはあらず。又をかしきたとへなれ共、世にいふ女の丑時參りといふ事あり。常には闇がりをさへおそるゝ者が、嫉妬の怒に乘じては、丑時參りして、少しもおそれやらず。其女にはかにつよくなるにはあらず。是にて、勇怯の勢にあり、强弱の形にある事をしるべし。但軍形は本なり、兵勢は軍形よりしてこそ出來にけれ。もし軍形亂れなば、士卒勇なりといふとも、必ず敗軍すべし。此故に、「勝兵先勝而後求戰。敗兵先戰而後求勝」といへり。先勝は軍形にあり。未だ戰はぬ先に、必ず勝つべき手だて定まる故に、先勝とはいふなり。先勝つて戰へば、兵鈍らず。戰とゞこほらず、敵を破る事破竹のごとくなるべし。よりて孫子に、「勝者之戰若決積水於千仞之谿者形也」となん。是は必勝の形先定まりて、其勢に乘じて戰へば、なにの手もなく勝つ事をいへり。然るに、合戰の場に臨みては、ゆるやかなるを嫌うて、はげしきをいとはず。おそきを嫌うて、はやきをいとはず。もしゆるやかにおそれければ、士卒の心たるみて、其勢を失ふものなり。信繁の、人數をあらくつかへといひしは、こゝなり。是則兵勢なり。孫子は是を論じて、「激水之疾至於漂石

者勢也。鷙鳥之疾至二於毀折一者節也。故善戰者其勢險。其節短。勢如レ彍レ弩。節如レ發レ機」といへり。すべて物には、鼓の拍子あるごとく、はり合ひてはずみのあるは節なり。竹のふしあるごとく、きはだちて析めのあるは節なり。水激して石のおもきを漂はすに至るは、岩にあたるはずみのつよければなり。安流する水の水さき弱きが石をたゞよはす事をきかず。鷹鷙つて鳥の翅をとりひしぐに至るは、禽にせまる析めのきびしければなり。ながのしする鷹の羽つがひゆるきが、毀析する事をきかず。よりて善戰者は其勢必ず險しく、其節必ず短し。一足も所レ向を退けば斬る。一毫も軍法を敗ればきる。かく險しからねば、其勢弛ぶものなり。日を刻して急に進みて兵を駐めず。戰勝つては早く引いて長追せず。かく短かからねば、其節延るものなり。其勢弛び其節延ぶれば、士卒倦怠つて、必ず勝利を失ふべし。されば、勢如レ彍レ弩とは、必ずはりつめて少しも手をゆるさず。節如レ發レ機とは、忽急に放ちて、暫しもゆとりせず。この故に、良將の下に怯卒なし、愚將の下に强兵なし。孫子に是を論じて、

善戰者求二之於勢一。不レ責レ於人一。故能擇レ人而任レ勢。任レ勢者。其用レ人也如レ轉二木石一。木石之性。安則靜。危則動。方則止。圓則行。故善戰レ人之勢。如レ轉二圓石於千仞之山一者勢也

ながのし―遠く飛ぶこと

孫武が此語、一字一句も兵の肯綮にあたらざるはなし。孫武は誠に兵家の祖なるかな。

○孫臏韓信が兵法

されど、孫武が兵法、その書ありといへども、自ら兵を用ひて敵を料り勝つことを制するをきかず。そのかみ、吳王闔閭に用ひられ、十三篇をも吳王に傳授せし事、史記孫子が傳に見えたり。闔閭西のかた强楚を破りて郢に入り、兵威諸國に振ひしは、定めて孫武が謀より出でたる事にてあらんかし。その事實世に傳らねば知るべきやうなし。孫武が後、孫武が兵法をもちひて、其功天下に著れしは、孫臏、韓信のふたりにてなむありけり。孫臏は孫武が子孫なりしが、先祖の兵法を傳へて、齊の威王の師となる。此時魏より齊の與國趙を圍みしを、威王將田忌に孫臏をさし副へて、趙を救はしむ。孫臏は、其前に魏將龐涓とともに兵法を學びしが、龐涓その能を嫉んで、陰に臏を召して、至れば其兩足を斷ちし程に、此度もたゞ車中に坐して、軍の指圖をしけり。田忌すでに趙へゆかむといひしを、孫臏止めて、魏趙久しく相攻めぬれば、魏の輕兵銳卒必ず外に竭し

與國―同盟國

老弱、運漕して内に罷るゝを謀りていふやう、「趙に至らんよりは、速に魏都大梁に赴きて、其虚を衝かんにはしかじ。彼我國の危きを聞かば、必ず趙をすてゝ歸りて自ら救はむ。然らばわれ一舉して、趙の圍をとくのみならず、その弊を魏に收むるなり」とて、直に大梁に向ひしかば、魏師果して趙を捨てゝ還りけるを、迎へ擊つて大に勝利を得けり。これ趙を救ひながら、趙を救ふとは見せずして、魏を攻むる形をもてしめし、虚に乘ずる急迫の勢をもて逼りしかば、魏師などか趣をすてゝ歸らざる事を得べき。これにより て見れば、前にいひしごとく、形にはめ、きほひにのすれば、わが士卒のみにもあらず、敵を制する事も掌握にあるがごとし。孫臏が魏を伐つて趙の圍をとくにて、その形勢に熟するをしるべし。さればこそ、孫臏も形格へ勢禁ずれば、おのづから解くることをすといへり。形にはむれば、敵必ず形に格へられ、勢にのすれば、敵必ず勢にせかれて、自由を得ぬ程に、おのづから我計中に墮るぞかし。後十五年ありて、魏より韓を攻めし時、韓告急於齊しかば、田忌又將兵として、前に趙を救ひしごとく、すぐに大梁に赴きけり。魏將龐涓是を聞きて、韓を捨て歸る程に、齊師とくに行過ぎて先にあり。孫臏田忌にいふやう、「三晉の兵素より悍勇にして、齊を怯しとす。善戰者は、敵の勢により

掌握にあるがごとし―手中に握るが如く、確にしてあやまりなきなり

て、その勢のまゝに、態と利導して、己が思ふ圖に引付くるぞかし。兵法に、百里而趣利者蹶上將といへり。さらばいよ〳〵魏を驕らしめて、百里にして利に趣かしめん」とて、齊師魏の境に入りて、始て一舍する日は十萬竈をなし、その明日は五萬竈、又明日は三萬竈と、日々にかまどの數を減じて、軍行の跡に遺しけり。さる程に、龐涓齊の師の後を追つておしけるが、是をみて大によろこびていひけるは、「我もとより齊師怯き事を知る。いかにとなれば、吾地に入る事三日にして、士卒のにぐるもの既に過半に及べり。いざ急に追ひつめん」とて、其日歩軍をすてゝ騎兵ばかりにて、二日の道を一日にうちけり。孫臏其行を度るに、暮に馬陵に至るべし。馬陵は旁に阻隘多くして、兵を伏すべし。こゝに龐涓を討取るべしと思ひつゝ、大樹を斫り白けて、「龐涓此樹下に死なん」と大書したり。さて善く射るものをすぐり、萬弩をそろへて道を夾んで伏さしめ、それ等と約して、「暮に火の高く擧るを見て、萬弩一度におこれ」と、其期を待ちけるに、龐涓果して夜に成りてかの斫れる木の下に至りしが、白書を見て不審におもひ、急に火を高く擧げて燭しけるに、其書をよみて未畢に、萬弩俱に興りしかば、魏師大に破れて、龐涓自ら刎ねて、「遂に豎子が名をなしつ」といひて死にけり。龐涓が前に孫

阻隘―けはしくしてせまきところ

臏を足たちし時、人の足をきるは則わが首をきるといふ事を知らず。曾子の「戒之戒之。出乎爾者反乎爾者也」と宣ひしこそ思ひあたりしか。聖賢の言いつかたがひ侍るべき。是は小人の戒とすべし。

ながく世にたてじとてこそあしきらめ足はたゞねど首はとりけり

是は翁がたはことなり。足のかはりに首を得たれば、孫臏はかへどくしたりといふべし。しかるに、竈を減じてみせ、樹をしらけて見せける、ひとつとして敵を形にはめざるはなし。竈を減じて見すれば、敵必ず道を倍してゆき、樹をしらけて見すれば、敵必ず火を擧げて見る。火を擧ぐれば萬弩俱に發す。萬弩俱に發すれば敵自刎ねて死す。一として敵を勢にのせざるはなし。よく敵を料りて兵の形勢に熟せずんば、いかでかかくあるべき。孫武が後一人といふべし。炎漢の初に至りて、高祖の諸將の中に、韓信こそは兵術に精しく、合戰の上手にてありし。其趙王歇を攻めし時、背水の陣にて勝ちしは、今にあまねく世に稱する事なり。兵法に、「右倍山陵。前左水澤」といへるは、軍形の常なり。然れ共兵に常勢なし。敵に因て變化すれば、軍にも常形なかるべし。此時趙兵二十萬と號す。漢兵數萬にたらず。其上皆あつまり勢にて、決戰の心なし。韓信これによりて、水にそむきて陣せしめたり。水に背きて陣するは死地なり。一足跡へむけば、水に逐ひはめられて死する故に、おのづから面々にかせぎて殊死して戰はざる事を得ず。趙軍漢の軍の死地に陷るを見ては、必ず何の用意もなく輕々しくすゝめ戰ふべし。我死戰の衆をもて輕進の兵を擊ちなば、必ず一戰に勝利を得べしとはかりしが、果してその謀はづれざりけり。然れども、水に背きて陣せしをば、當時諸將も口には諾せしかども、心には服せず、敵もこれを望見て大に笑ひしぞかし。これ敵もみかたも形にはめられ勢にのせられて、みづからおぼえず。戰勝つても其勝ちける故をしらざりけらし。その外、伴りて旗鼓を捨てゝ走りて、敵をして空壁逐利しめ、趙旗を拔いて漢の赤幟をたてゝ、趙軍の氣を奪ひしなど、いづれも敵を形におとして、自然の勢をもて驅せしかば、みかたはいよ〳〵勇戰し、敵はみづから死を救ふにいとまあらざりけり。孫臏が後、兵の形勢に熟し合戰に長じたるは、韓信ならし。うべ自ら將兵の能を論じて、「多ければ多くして益善」とはいひけり。げにさもと覺えし。然るに孫臏、韓信が兵法をもて、孫武が書に考ふるに、符節を合せたるが如し。こゝをもて、兵法は、いよ〳〵形勢にある事を知るべし。孫子にいへらずや、「先爲不可勝以待敵之可勝」

とは、先不レ可レ勝は我にあり。萬全不レ敗の形也。敵之可レ勝は敵にあり。必勝不レ失の勢なり。其機を形にこめ、其戰を勢に決す。其機を形にこむるに當りては、淵のごとく深く、龍のごとく潛まる。いはゆる藏二於九地之下一ものなり。其戰を勢に決するに當りては、颿のごとくおこり、雷のごとく擊つ。いはゆる動二於九天之上一ものなり。忽かくれ忽あらはれ、奇正相生じ、虛實相形る。環の無レ端がごとし。兵術の妙、こゝに至りてもはや加ふべき事なし。但其簡要をいはゞ、兵は神速なるにあり。もし神速ならねば、其計策多くは敵にはかられ、又は長陣すれば、將軍も退屈する程に、軍形兵勢もいづれの處にか用ふべき。孫子にも、「兵聞二拙速一、未レ覩二巧之久一也」といへり。善將レ兵者は、たゞ形勢に明かにして、其餘勝敗の數にあづからぬ事は、多くは不調なれども、反て是をもて勝利を得る事速なり。是を「拙而速也」といふ。兵家の貴ぶ所なり。若し勝敗の數に暗くして、たゞ屯營を周備にし、號令を煩瀆にして、すぎて持久の計をすれば、軍法調熟して、すきまもなく見ゆれども、兵久しければ變生ずる程に、はては敗軍に及ぶぞかし。是を巧而久しといふ、兵家の忌む所なり。況や兵久しうしてやまねば、其間多く財を糜し人を殺し、永く國家に害を貽す事少なからず。むかし蜀の先主自將とし

煩瀆—わづらはしくかされて面倒になすこと

て吳を攻むる時、七百營を連ね、三十屯をたて、吳と相拒ぐこと半年に及ぶ。巧而久しといふべし。つひに兵疲れ意沮んで、陸遜が爲に破られたり。我朝にても、近代上杉、武田の兩虎爭雄しが、いづれも征法疎かなるにあらず、軍令精しからざるにあらず。然れども先爲レ不レ可レ勝て敵の可レ勝を待つ事をしらず。互に一戰の間に勝つことを力めて、しば〳〵相攻むる事年を經てやまず。是又巧而久といふべし。遂になにの成功なくして、僅に其身を終へて國滅びにき。たゞ豐臣秀吉は、もとより不仁にして、誅レ暴、止レ亂の兵にてはなけれども、勝敗の大數に明なりしかば、出レ師になにの造作もなく、行レ兵になにの巧計もなく、戰となれば必ず功を一擧に收む。遂に兵を頓して曠日することをきかず。いはゆる拙而速なるものに近し。其將暑、恐らくは謙信、信玄の及ぶ所にあらじ。然れ共剽輕猾賊の人にして、禮樂慈愛は夢にもしらざりし程に、晩節無名の師を起して、朝鮮を征伐し、久しく師旅を暴露し、多く人民を魚肉せしかば、天下の人心離叛きけり。亦兵久しくして收めざるの禍なり。孫武が一言、兵の要旨を得たりといふべし」

剽輕猾賊—躁急にして狡猾を極め人をそこなふこと

師旅を暴露す—軍隊を

長く戰地に留めて風雨に苦します

魚肉す—魚肉の如く取扱ふ卽ち殺す意

權道—其場合に應じ假に設くる道

○兵は詭道

他日繼いで諸客來會せしが、「前日兵家形勢の說くはしく承り、感服し侍る。世に兵法を傳ふる人も一ならず候へ共、大かた上杉武田家の流にて、兵の故實器數には精しく候へども、中々形勢などの沙汰には及ばず。是にて敵を料り勝つことを制するは、なりがたかるべきやうにかねて思ひ侍りしに、翁の論を承り、いよ〳〵世に傳ふるは皆兵の末事にて、兵法とするにたらずとこそ思ひ侍る。但形勢を審にし、智謀をもちひ候事、仁義の兵にもあるべきにや。聖賢の道には、少したがひたるやうに覺え侍るはいかゞ」といふに、翁聞きて「それはよき不審にて候。兵は聖人の常道にあらず、いはゞ權道ともいふべし。みづから義を制する權度なくしては、にはかに用ひがたき道にて候。とかく兵は別段の事にて、常には用ひざる道と意得給ふべし。さらば古今兵の異同ある事を語り侍るべし。戰國以來料敵制勝の術を兵と申候へども、元來甲冑の士を兵といへば、兵は士卒の事にて候。むかし荀況古今の兵を論じて五とす。湯武の仁義、桓文の節制、秦の銳士、魏の勇卒、齊の技擊是なり。王者の兵は、道德に本づき、仁義を崇ぶ

淬勵—きたへはげますこと

故に、三軍心を同じうし力を戮せて、君上の難に赴く事、子弟の父兄を衞り、手臂の頭目を捍ぐがごとし。是を仁義の兵といふ。桓文の兵は、信義を守り、律令にしたがふ故に、三軍畏威て、一人も節義を踰ゆる事なし。是を節制の兵といふ。嬴秦の兵は、ただ賞罰を嚴にし、首級を尙ぶ、曾て兵に節制ある事をしらず。然れども士卒を淬勵して勇敢を倡ふが故に、敵に赴きて戰死する事を樂しむ。其强き事、魏齊の兵に比するに甚優れり。魏の兵は勇力の卒を募り、齊の兵は技擊の材を選び、一朝かりあつめて敵と鬪はしむ。其兵ただ利を要して、あへて死敵の志なし。是によりていふに、秦の銳士より以下は、やゝ優劣ありといへど、一切に武力をもて取勝のみ、すべて兵法ある事をきかず。兵法は節制の兵より以上にあるべし。仁義の兵といへども、僅に兵といへば、形勢智謀をすてぬ事にて候。是を捨てゝは、いかで敵を料り、勝つことを制し候べき。もとより、仁義の兵に、後世の兵のごとく詐僞を尙び反間を用ひるやうのむづかしく巧なる事はあるまじく候へども、たゞ敵と對したる正面において、或は敵の銳氣を挫き、或は敵の惰氣をうち、或は不意にいで、或は險阻に逼る。とかくに敵を制して敵に制せられず、敵をいたして敵に致されざるやうに謀るは兵の法なり。昔趙宋の時、いづれの戰

にか、ある一將、城守して敵に圍れしに、炎天の事にて有りけり、敵しきりに戰をいどみしかども、堅く城を閉ぢて兵を出さず、一人に冑をきせて庭中にたゝせ置きけるが、時を移して冑火のごとくなりて、其人堪へがたかりける時に、敵もさこそ困しまんと量りて、急にきりて出でければ、敵一こらへもこらへずして敗軍したりとなり。此事を、朱子兵を論ずるとていひ出でて、兵はかくあるべき事なりと仰せられし。語類に見えしと覺え侍る。されば孔子も、三軍を行はゞ、臨事而懼好謀而成者にくみせんと宣へり。異國の事は遠ければ姑くさし置き、我朝武家の世になりしより、天下攻伐をつとめて、戰爭やむ事なかりし。建武以來、宮方武家がたとて、諸國にたて分れて、日夜合戰に及びしかども、いづれも諸國假合の卒をあつあて、衆の多寡をくらべ兵の强弱を爭ひ、なにの成策もなく、兩軍よせ合せて相撲角力の場のごとく、一時に勝負を決する外はなし。或は勝つ時もあり、或は負くる時もあり。勝も負も一且の事にて、むなしく士卒を多くころしてやみぬ。なにの兵法か論ずべき。いはゆる齊の技擊、魏の勇卒ともいふべし。足利氏の季世に至りて、英雄蠭起し、四方に割據して、兵を磨き士を養ひ、日ごろ拊循して用ひしかば、其兵勇鋭にして百戰して挫けず、秦の鋭士ともいふべきに

事なりと―原文「と」字なし

假合の卒―假にかり集めし兵卒

拊循―慰撫する義

や。中にも武田、上杉などの兵は、號令脩り、約束明かに、師出るに律をもてすれば、桓文の節制にも近かるべし。されば本朝の兵は、こゝに至りて始て兵法をも論ずべかめり。然れども、當代兵家者流と號する人、多くはかの兵律を傳ふるのみにて、兵法のもとは、敵を料り勝つことを制するの謀にありといふ事をしらず。其中、ことに理にくらき人は、兵に荷擔して、國家を治むるの道も、是に外ならずといふめる。先年人のいひしは、ある兵家の說とて、孫子の「兵者詭道也」とあるを、兵は詭るも道なりとよむべし。兵は詭道なりとはよむべからずとぞ。翁きゝて一笑を發しき。是は兵を詭道といふを嫌ひて、兵はもと正道なれども、時としてはいつはるも道なりといふにやあらん。詭字は詐僞の二字と倭訓同じけれども、字義に差別あり。たゞ眞手になく、常格をたがへたる道を詭道とはいふなり。されば孫子も、「能而示之不能。用而示之不用」といはずや。よくしてよくすと見せ、用ひて用ふると見せては、いかで敵を料り勝つことを制すべき。よりて兵は眞手になく、常法に引きちがへて行ふ道なりといふべし。すぐに詐僞の道とはいふべからず。然れ共、此筋を今日の常に出せば、詭遇して獲禽の心になりて、やがて詐僞に陷るべし。そこを孫武さすがの明者にて慥に見つけし程に

詭遇して―云々獲禽の心孟子の言

に基く。正道によらずして遇合するを願ふ卽ち僥倖を欲する心

十三篇の初において、兵は詭道なりとはいひしぞかし。詭道なれば常道にあらず、常道にあらずして、いかで國家を治むるの道とすべき。況や當代の兵家に相傳ふるは、皆兵の末事なるをや。或は城とり、或は軍のそなへ、又は古戰の跡を僉議する迄にて、孫子の書をよむ人稀なり。たま〳〵よむ人ありても、文字にくらき故に、詭道二字の義にさへ通ぜず、何とて孫子のふかき心を得べきや。さるによりて、其說を聞くに、多くは臆見に出でて相違したる事なり。無知妄作といふべし」

○不レ忘レ向レ君ことをきみに

後數日ありて、諸客來會せしが、「前日兵の拙速を貴ぶ事を承り候うてより、自分にも考へ見候に、兵に限らず、大かたは何事も不調法にして速なるがよく候。然るを餘り思案過ぎ候うて仕方のよきやうにと拵へ候へば、多くは文に拘り實を失ひ候故、やゝもすれば機會におくれ候うて、後悔する事も出來候。是巧にして久しきの害にて候」といへば、翁きゝて、「さにてこそ候へ。但其速なるに本源あり、たゞ常に心ゆるまず、氣たるまざるを本源とす。心ゆるまず氣たるまざれば、事物に奪はれぬ程に、おのづから落著候うて、緩やかなる物にて候。されば、すみやかなるは緩やかなるより生ずると思ひ給ふべし。もし速なるがよしとて俄にすみやかにすれば、心せき氣騷がしく候程に、事に當りて狼狽して、たゞおそきのみならず、却て不慮の害をも招くぞかし。近代諸侯の家にある宿老の武臣を見るに、そのかみ兵戰の世を經て、おのづから心ゆるまず氣たるまぬ故に、緩急の場に臨みて、其速なる事他人の及ぶべき所にあらず。翁、加賀にありし時、其先祖越後の堀の家に仕へし者ありて語りしは、「越後守の家老に堀監物とて名ある者あり。(監物二代あり。二代監物は、慶長十五年、弟丹後守直奇と爭訟して、最上に謫せらる。この監物は父監物直政なるべし)主人越後守伏見の邸にて、日暮に客を送り出でけるに、越後守に怨ある者ありしが、かくれ居て急にきり懸けしを、越後守も拔きあはせし所に、監物はるかのうしろより、一番に來て彼者をきり倒しけるを、左右に供したる士共、諸ともに打ちとめけり。後日に右の士ども監物に逢ひて其日の事をいひ出でて、「日暮といひ不慮の事といひ、我等ども心ならず少しおくれ候ひしを、御身にはるかの跡に御渡り候ひつるに、いかなれば一番に手に御あひ候にや、不審なる事にこそ候へ」といへば、「いや、各とて武邊の某におとるべきにてはなく候へども、某はかねて

某に―原本某を

横渠―張載

ひとつの覺悟ありての事にて候。各は此覺悟なき故に、某に先をさせらるゝとこそ存じ候へ。此後も各は殿の御供を勤めらるゝ事にて候へば、向後御心得にもなるべく候まゝ、今迄は人に申さぬ事に候へども、傳授いたし候べし。惣じて君の御前に伺候し御後に供奉し候時は、假にも脇へ目をやらず、初中終君に目をはなさずしてをるを簡要の法といたし候。たとへば、君の動靜針程の事も見つけずといふ事なし。よりて不慮の事ある時も、我しらず手にあふ事速なる物にて候。此某が一言を必ず忘れ給ふべからず」といひしとなり。是は武の心懸より覺悟したる事にてあるべけれども、聖賢の心にも協ひ侍るべし。翁日比論語鄕黨篇を讀むに、「君在すときは與々如たり」とあるを、朱子の註に、「威儀中適之貌」というて、又張子の說を引きて、「與々不忘向君也」とも釋しおけり。威儀中適にてよく聞えたる上に、張子の說を引かるゝは、不忘向君といふに一種の義理もあるにや、いかやうの意味にかあらんと思ひしが、其後此事をきゝて、横渠の說緊要なる事をさとりぬ。かの監物が始終君に目をはなさぬといふは、是則不忘向君に非ずや。君に扈從し君に侍坐する時の第一の心得たるべき事也。監物固より横渠與々の說を見て、其にて心付きたるにてもなけれど、其意おのづから相叶へり。奇特なる事といふべし。

端的に―うちつけに

○大敵外になし

翁かねておもふ事にて候。今の學者、聖賢の書を讀みて、なまじひに義理の僉議をいたし候へども、大かたは僉議に日を暮し、何にてもひとつ取りとめて身に得たる事は侍らず。是も巧にして久しきと申すべし。然るに武臣たる人は、不學にして、一己の見付けたる所によりて覺悟を決して、直に行ひ出し候故、端的に其驗を見せ申すにて候。學術なく候へば、理に當らぬ事もあるべく候へども、其得たる所おのづから聖賢の敎にもかなひ候。いはゆる拙而速なるに候はずや。右の監物が事にて思ひ知り給ふべし。それに付いてこゝに殊勝なる事こそ候へ。寛永の頃にかあらん、永井信濃守尙政、しきりに昇進して、寵任せられけるが、其比井伊掃部頭直孝、一代の元老にておはせしに、或時邂逅して、「我等事、弱年の身にて、特恩を蒙りて、重職をつとめ候事、誠に至極と申すべく候。そこもとには、御老功の御事にて候へば、我等心得にも成るべき事おほし召しよりも候はゞ、仰せきかされ候へ」とあれば、掃部頭、先感じて、「奇特なる御心得に

てこそ候へ。いかにも一ッ存じよりたる事候まゝ、傳授し候べし。されども、大切なることを、あからさまには申しがたし。いよ〳〵御聞きあり度候はゞ、某が宅へ御越し候へといはれしかば、日を定めて、禮服を著し、彼宅へ往かれしに、掃部頭出でて對面の後、「世話に油斷大敵といふ事、定めて御心得あるべし。某が傳授外にはなく候、此一言にて候ぞ。必ず御忘れあるな」といはれしとて、むかし周の武王卽位の初め、大公望を召して、「簡約にして行うて恒とし、萬世に傳ふべき道ありや」と問ひ給ひしかば、太公望まうさく、「其言丹書にあり。王もし聞かむと欲せば、齋戒し給へ」とありしかば、武王齋戒端冕して東面して立ち給へり。其時太公望西面して、丹書の言を武王にさづけていはく、「敬勝ㇾ怠者吉。怠勝ㇾ敬者滅。義勝ㇾ欲者從。欲勝ㇾ義者凶」今油斷大敵の語、鄙諺なれども、丹書の戒に叶へり。然るに君につかへ事を務むるに油斷のあしきとは、誰も知りたる事にて、しかも眞實に知らぬ故に、右の諺をも等閑に聞きすぐして、こゝに心をとゞむる人なし。よりて每々油斷して、過失を生じ禍咎を招きて、ともすれば、臍を噬むことおほきぞかし。掃部頭は常に油斷を禁じて身に近づけぬ心から、眞實に此事の簡要たるをしらるゝ故に、この諺を大切の事として、信濃守にも傳へられ

端冕―冠を正すこと

しなり。拔群の識あるに非ずしては、いかでかくあるべき。其上あからさまにいはれず、前に日を定め其人に盛服させて、おもく傳授せられしも、かの太公望の丹書を武王に授けし面影あり。かくあらねば、其事輕し。そのこと輕けれは、其信深からず。其信深からねば、其人の益に成りがたし。亦誠意懇到を見るべし。掃部頭學術のありし沙汰もきかねども、おのづから聖賢の敎に叶へるこそ、極めて殊勝の事といふべし。我朝武家の代になりて五百年以來、世に是等の人あり是等の事あるをきかず。しかしながら、祖宗德澤仁厚なるが所ㇾ致なり。これによりて、謹んで考ふるに、御當家天下をしろしめして、仁政四海に廣被せしより、歷代殘殺の風變じて、太平禮義の俗となりしが、寬永明曆の間に至りて、在廷の諸公運に應じて出でて、承ㇾ化輔ㇾ治しかば、其澤日に隆治なりしぞかし。今其人がらを聞くに、いづれも篤實簡重寬厚の長者也。其政を謀るには、虛文を抑へ、事實をつとめ、人を取るには、材辯を退け、實行をすゝむ。近世智巧を尙ぶの風より見れば、其拙きに似たれども、凡百の有司、いづれも廉靜寡欲なりしかば、各守ㇾ身恭ㇾ職して、時勢に附かず、身計をなさどりき。是によりて庶政あがり、百事熙まり、たゞ此時を別して盛なりとす。勿論時運のしからしむるといひながら、其い

懇到―ねんごろに行渡ること

祖宗―家康をさす

御當家―德川家

民瘼—「瘼」はやまひ、即ち民の疾苦

出將入相—出でては將軍となり入りては宰相となる意

武侯と—原本「と」字なし

はれなきにあらず。然るに篤實の士は、謹厚にして用にうとく、材智の士は、敏捷にして事にさとし。この故に、古今人材をもちふるに、多くは德行をすてゝ材智の士を取るぞかし。さし當りよく職を辨じ、しば〳〵近効をたつる程に、敏速の功あると見ゆれども、事おほに僉議がちにて、事實常に隱れ、下情常に塞りぬれば、政弊民瘼も是より起るぞかし。是によりていふに兵に限らず、治世の政も、拙速をよしとして、巧遲を得たりとせず。むかし諸葛武侯の蜀につかふる、出將入相として內外の任を兼ねしが、高世の材をもて自ら用ひずして、つとめて衆思の益をあつめ、僚作の諫を求む。自ら至拙の地に處るといふべし。然るに、其魏をうつ、毎「戰必ず勝しかば、司馬懿畏るゝ事虎のごとし。其益州を討ずる、七縱七禽にせしかば、孟獲心服して、天威とす。その神速なる事想ひ見るべし。其後出師表にいへらずや、「劉繇王朗各據州郡、論安言計、動引聖人。群疑滿腹。衆難塞胸。今歲不戰。明年不征。使孫策坐大遂并江東」これ巧遲の害を論ずる事明白なり。但武侯の度量規模、もとより孫武が及ぶ所にあらず。今其意によりて、孫武の拙速巧久の語、最軍國の龜鑑として、武侯といへども加ふる事あたはざるをしるべし。孫武も亦人傑なるかな」

駿臺雜話　卷五

薄酒—味薄き酒、廉酒といふに同じ

あるじまうけ—馳走の支度

○月は世々の形見

今年もはや半過ぎぬれば、いつしか秋のけしきたちて、荻吹くかぜも身にしむころなり久しく翁のがり行かねば、此ほどの老のねざめも覺束なし。いざたづね問はむとて、ある夕暮に、例の人々打ちつれて來しが、又もまゐらんとて歸らんとせしを、翁とどめて、「今宵は月もよし、薄酒すゝめ奉らん。しひてとまり給へ」といへば、「翁の心をいかでそむくべき。さあらば」とて、各座をしめて、清談の露やう〳〵繁き程に、家人やがて心得て、取りあへぬまでにあるじまうけし、さかな取りそへて、盃出しけり。諸客皆醉ひて、興に入るとぞ見えし。其中に、一人盃を停めて、「青天有月來幾時。我今停盃一問之」と、李白が詩を高らかに打ち吟じけるを、又ふたり脇よりつけて、「人攀明月不可得。月行却與人相隨」とうたふ。又外の人々迭に唱和して、其次を「皎如飛鏡臨丹闕。綠煙滅盡清輝發」とうたふ。又其次を、「但見宵從海上來。

寧知曉向雲間沒。白兎搗藥秋復春。姮娥孤棲與誰鄰」とうたふ。其次よりは翁も助音して、「今人不見古時月。今月曾經照古人。古人今人若流水。共看明月皆如此。惟願當歌對酒時。月光長照金樽裏」とうたひをさめけり。其後數獻におよびて、玉山倒るゝばかりに見えけり。さて翁いふやう、「大かたは月をもめでじとはよみたれども、老の心も、月みるにぞなぐさみ侍る。されど、其につきて千載無窮の感もおこりぬれば、うべ、月を人の老となりともいふべかめり。但月を見るにいろいろあり、今思ひ出し侍る。童子の時、家にて八月十五夜の宴に、ひとり隅にむかひて居たりしに、さる武士の一丁字知らぬが、月をつくゞゝと見て、「月は徑りいく尺かあるべき。各考へて見給へ」といふ。又同じやうの人かたへより、「おれはものゝ切口とみゆ。奥へ長さいかほどかあらん」とて、たがひに僉議しけるを、きく人々皆舌を喰ひけり。翁もをさな心にをかしかりし。今おもへば、世俗月を賞して、光のあかきをほこり影のきよきにめでて、良夜とてたゞ打ちより、物喰ひ酒のみなどして歌ひのゝしるを樂とするは、かの寸尺を語るにひとしかりぬべし。又騒人墨客の月を詠めて、字ごとに金玉を雕り、句ごとに錦繡を裁するも、風雅には聞ゆれど、其もたゞ景氣のうへを翫ぶば

玉山倒るゝ—醉へるさまの形容

大方は月をもめでじ—大方は月をもめでじこれぞ此積れば人の老となるもの（業平）

舌を喰ひけり—あきるるさま

かりにて、月にふかき感ある事をしらぬなるべし。翁が千載無窮の感と申すは、我儕古人をしたひて、其書をよみ、其心をしりつゝ、常に世をへたる恨あるに、月ばかりこそ世々の人を照し來て、今にあれば、古人の形見ともいふべし。されば月に對して昔を忍びては、さながら古人の面影もうつるやうに覺え、月はものいはねども、語るやうにもおぼえ、忘れてはむかしの事をとはまほしくもおもふぞかし。今李白が詩、月の景氣をすてゝ、一氣に古今を洞觀して、「青天有月來幾時」といひ出るより、氣象の高さ拔群に聞えて、詩の豪蕩超逸なるも、外の詩人の及ぶべき事がらにあらず。むかしより李杜とて、杜甫が上に稱するも理にてこそ侍れ。然れども、李白が詩も、古今流水ごときを感ずる迄にて、後代を待つの心は見えず。翁むかし楚辭をよみて、「往者余弗及。來者吾不聞」といふに至りて、屈子が心をおしはかりつゝ、感にたへずなんおぼえき。この二句の意をいふに、屈子一代に知己なきを悲しみて、古人は誠にわが心を得たれば、あはれ一度あうて語うてとおもへど、其世に及ばねばかなはず。又末の世にさる人こそありて、我と心を同じうすらめとおもへど、其人をきかねば、誰とかしらんとぞ。是なん屈子に限らず、古今心あるきはは、大かた此恨なきにしもあらず。翁も此心にして月を

「古今流水」—この下「の」字を脱するか

屈子—屈原名は平、楚の同族なり、誠意を以て君に盡すも用ひられざるを憂へ、汨羅に投じて死す

見るにや、いとど感ふかく覺ゆるなり。もとより今は末の世の昔なれば、いづれの代にか、又わがごとく月に對して今を忍ぶ人もやあらん。月はさこそ其世をも照すらめ。もしあつらへ告げらるゝものならば、月にさは一言をも殘さましとおもひ侍る。そのこゝろを、

月見れば末の代までも忍ばれて見ぬいにしへのいとどゆかしき

こゝをもて、翁が月に無窮の感ありといへるを、諸君考へ見給へ。いはれなきにはあらず」

○離騷の祕事

諸客聞きて、「屈子の心をもて月を見る人、世にあることをきかず。今の世に翁ある事を屈子にきかせぬこそ遺恨にて候へ。されば、來者は吾不レ聞といはれけるもこゝにて候」といへば、翁、「とてもこよひは月にあかさん。さらば屈子のむかしをかたりて、離騷の意をくはしく說き申さん。きゝ給はんや」といへば、諸客、「是は大なる幸にこそ」とて、耳をすまし居ける。さて翁、「楚辭は離騷を第一とす。屈子三閭の家に生れて、楚王

國と同族―屈原は國王の一族なりしなり

の爲にいろ〳〵心力を竭しけるを、懷王不明にして、小人の讒を信じ其忠を察せず、終に遠ざけられしかども、君を露怨むる心なく、國をうれひ俗をなげくのあまり、此篇を作れり。一篇の大意をいはば、屈子國と同族にて、世卿の家に生れしかば、身を潔し行を脩めて、上に奉ぜんと思ひしより、一國の賢をしたしみつゝ、群に拔でて志をたてし事を、衆芳を佩びて奇服を好むになん言葉を託しけり。かゝりし程に、はからず、讒にあひて、君の心にはかにかはりしかば、さしもと思ひし人々も、時俗にしたがひて心かはりゆくを、蘭蕙をはじめもろ〳〵の芳草、にはかにあらぬものになん變じたるといへり。さて、今こゝに有りて、讒臣國を危うするを見聞くも心うければ、いづこの國へもさらましとおもへど、それはわが本意ならねばするに忍びず、又國に人なければ、故鄕に思ひものこらず。よしさらば、湘水にみづから投じなむといふにて篇ををへり。誠に惓々の心、匪躬の節、言外に溢れて、これを讀む人、袖をしぼらぬはなかるべし。されど、是は知れたる事なれば、今更いふに及ばず。但離騷のおこりをいはば、水の源あるがごとく、木の根あるがごとく、大切のところひとつあり。是をしるを離騷の祕事とす。其祕事といふは、外にあるにあらず、たゞ篇端の數語にあり。「帝高陽之苗裔兮。朕

惓々の心―君を思慕する情

匪躬の節―

君王の爲に身命をかへり見ずして忠をつくすみさを

祖孝―「祖考」の誤か

皇考曰伯庸といひ出せる心を、いかにと尋ぬべし。是たゞに身を思ひあがるにはあらず。又六朝の士太夫の門地にほこり、日本の武士の王孫を名乘るとは、其心大にちがひたる事にてあめれ。それ人は、先祖をおもはず、親を忘るゝ心より、身もちも輕々しく、人がらも崩るゝぞかし。屈子さすが先祖たゞしく、名だかき家に生れ、父のおもきあとをうけながら、いかに身をもちさけ、先祖をはづかしむべきと思ひつめてこそ、かくいひ出すらめ、といとあはれなり。其次に、「皇覽揆余于初度兮。肇錫余以嘉名。名余曰正則兮。字余曰靈均」といひ、又次いで、「紛吾既有此内美兮。又重之以脩能」とくり返し自贊するとて、屈子が心いよ〳〵しるし。其自贊の本意は、父の我を大事の物とおふしたてゝ、嘉名を名づけ、脩能を授けつゝ、かく、教育する心を、かりにもあだになさじとなり。こゝをもて見るに、君を愛し國を憂ふるの志、もと祖孝を思ふ仁孝の心より生じて、其根ふかく源遠し。うべも其誠始終一のごとくにて、死に至りてかはらざりけり。孝弟を爲仁の本とするも、是にてこそあなれ。それは、其説ながければしばらくさしおく。たゞ屈子忠藎の本は、こゝにありとしるべし。然るに、屈子死して二千載に及びぬれども、離騷をよむ人、其辭をのみ玩びて、一篇の見どころ此數句にとどまるといふ事をしらず。翁久しく離騷を讀みて、ひとり此意を得しより、身づから屈子が知己として、いとどあはれを添ふる中にも、又うれしくもなんありける。されば、祕事といひしは、是をふかくかくして人にしらせじとにもあらず、たゞ多年工夫して得たる事を淺はかにいはゞ、きく人さへ等閑にきゝて過なましとおもふ程に、祕事とは申しけるぞかし。諸君此意を得て、容易なる事とな聞き給ひそ」といへば、諸客「翁のいひ給ふごとく、古より離騷をよむ人おほけれど、先儒の論も終にこゝに及ばねば、我等ごとき淺見にて、中々おもひよらぬ事なるを、こよひ翁の御物語りにてこそ承り候へ。「共君一夜話。勝讀十年書」とは、かやうの事をや申すべき」とて各よろこびあへりき。

○遍照が黑かみ

翁又いふは、「父母は人のもとなり。人窮しては父母をよぶ。是人の天性にして、自然の誠なり。古より、仁人孝子は、常に父母を思ふ心を失はず。我より父母の名をあらはさんことをおもうては、善を果し、我より父母の恥を貽さん事をおそれては惡を遠ざく

こゝをもて、孝を百行の本ともするぞかし。されば、屈子讒にあうて父祖をおもふにて、その君に忠あるの根ざしふかきを知るべし。むかし良岑の宗貞、深草の帝におくれ奉りて、俄に出家し、僧正遍照となんいひし。その遍照かしらおろすとて、父母を思ひいでて、

たらちねはかゝれとてしもうばたまのわがくろかみはなでずやありけん

すでに佛に歸して世を捨れども、そのきはになりて父母をおもひ出づるにて、天性に父母を忘るゝに忍びざる物のあるとはしらる。「しかるに、親をすて子をすてゝ出家するを、眞の道に入るとするこそかなしけれ。孟子の人の性を戕賊するといへるも、このたぐひなるべし。屈子は古今の賢人、宗貞は一代の寵臣、其人物もとより同日の談にはあらねども、いづれも名卿世錄の家に生れぬれば、その父母の心、わが子のながく國につかへ、身をはづかしめざるやうにとこそ期しつらめ。今身窮して、ひとりは離騷を作りて父祖をよび、ひとりは倭歌を詠じて父母をよぶ。それは似たれども、屈子は身をもて國に報じて、死して家聲を墜さねば、我父のつけし名をはづかしめずとなんいふべし。宗貞は家をすて世をのがれて、抖擻の身となり下りぬれば、たらちねのなでし髪をあらぬものにすといふべし。翁さいつころ遍照が歌を見て、返しの意につかうまつりし、

たらちねのかくはなでずとしりながらなどおろすらんその黒かみを

彼が徒もし聞かば、「出家の功德にて父母も成佛する程に、髪をおろすを父母の報恩とす」といふにやあらん。それはもと佛說に惑うて天理に盲すれば、今更なにとさは告ぐべきやうなし。責ていはゞかくなん。

たらちねを思ふこゝろは世をすつる身にもすてえぬものとかはしる

いつぞや源平盛衰記をよませきゝ侍りしに、賴朝敵におはれて、ふし木の穴に隱れおはせしが、敵にさがされて、すでに自殺に及ばんとする時、髻の中に佛の小像をゆひ添へしを、首を敵に渡さん時、大將軍の所爲にあらずといはれんとて、かたへのくらき所にかくしおかれしとなり。いつか正しく公なる事の、人にはづかしき事あるや。佛をたのみて後生をたすからんとおもふは、丈夫のしわざにはあらず。はづかしと思はるればこそ、さしもたふとしとしける佛をばすつれども、この心をばすてえぬにてこそあなれ。是をもて、人皆羞惡の心を固有すといふ事をしるべし。されば、遍照は父母を思ひいでて、本意なしとしりながら、かしらをおろし、賴朝は敵にしらせて、はづかしとしりな

たらちね―垂乳根と宛つ。父母をいふ

抖擻―前に註せり

がら、佛にへつらふ。いづれも本心を失ふといふべし。

○世をすてゝ身をすてず

さはいへど、遍照が世をすつるとて、たらちねを思ひ出づるこそ、孝心言葉にあらはれて、殊勝に覺え侍る。古より、簪纓家の出家する多けれども、父母の事など思ひ出づるは、なほ俗習のまよひとする程に、かゝる心ある人をきかず。その外、遍照の歌どもは、さすが天理の殘香ありてきこゆるにや。

簪纓家—公家

皆人は花のころもになりぬなり苔の袂よかわきだにせよ

君をしたふのなさけふかし。

はちす葉の濁にしまぬ心もてなじかは露を玉とあざむく

直きを崇ふの心たかし。さて遍照が後には、西行にてこそあなれ。東國へ行脚の序に鎌倉を過ぎしに、鶴岡にて群集の中に紛れゐたりしを、其人がらの拔群なるにて、賴朝やがて見とがめて、營中に請じ、弓馬、倭歌の事などとはれしに、かの巍々然たる物にすこしもかゝはらず、思ふまゝに物語うちして、營中に候ひける三浦、畠山をはじめ其外の群傑をも、人なきごとく思ひけり。賴朝もさこそとゞめたく思はれけめども、拘留せらるべうもなく、まいて引出物などは、中々沙汰にも及ばず、前にありし銀の猫を賜りしをば、其まゝ受けて、出づる時、道の邊にあそびゐたる兒にとらせてさりぬ。其後跡を消ちて、ふたゝび音もせざりけり。其ころ高雄の文覺といひし豪猛至極の惡僧、鎌倉の權をかりて釋門に威を振ひしが、西行が人となりをにくみて、「おのれもし西行にあひなば、まのあたり辱しめん」といひしに、或時、西行高雄わたりにて行きくらしける程に、文覺に宿をぞかりける。文覺幸とよろこびて、其徒弟にいひけるは、「汝ら見よ。西行見えば、かならず打たん」とて、拳を握りて待ちける程に、弟子ども、事出來んとて、うとましく思ひしに、文覺、西行を一目見て、氣を奪はれ、しほ〳〵と屈伏しけり。後日に、弟子ども、「何とて言葉には似給はざりける」といひければ、文覺、「彼がつらだましひを見よ。我をうつべきものなり」といひける。是等にて、其人がら高潔にして、氣魄精神たゞうどにあらざる事を知るべし。たゞ惜むべきは、儒道世に行はれざる故に、かやうの人あれども、眞の道をしらず、其質の高明なるまゝに、大かた世をいとひて浮屠に歸するこそ、歎かしけれ。但君をすて親をすてゝ佛に歸して、我身ひとつを助

浮屠—佛法

けむとおもふは、世をば捨つれども、其心は、君にかへ父にかへても身をばすてぬにてありけり。身を捨てずしては、世をすつともいふべからず。世にありて名利をねがふも、世をすてゝ極樂をねがふも、清濁はかはれど、身の樂を思ふは同じかるべし。もとより、佛の教は人倫を假と見れば、君父をすつるはよしさもあらばあれ、たゞとても捨つるとならば、第一に身の樂をおもふ心をもすてゝ、扨名利にはなれて見よかし。世をのがるゝにも及ばず、名教中に自然の樂地あるべし。何ぞ必ずしも人倫をすて、事物を離るべき。人倫をすて事物を離れて、たゞ己が往生極樂をねがふは、世をすつるといへどいまだ世をすてえぬより起りて、樂欲はなはだしともいふべし。むかし或人語りしは、「わが鄕里にひとりの婦人ありしが、夫におくれて日夜哀慕し、玉の緒も絶えぬるばかりに見えしを、其子ふかく憂へて、いろ〳〵諫むれどもきかざりしに、日ころ佛法をとき聞かする僧のありしが、婦人にいひけるは、夫をしたふはさる事にて、それは佛法に妨とならず。たゞし、夫にわかれて、男女の道もたえ、身もさびしく、賴なくなりたるにつけて、我身のためにかゝりて、かなしむ心の少しもまじりなば、これ私欲のまよひにて大に罪障を增長すべし。その所をよく〳〵分別してなげきてよ」といひしかば、婦人忽に心をひるがへして、それよりなげかずなりにける」とぞ。翁おもふに、此僧婦人を敎誨せしは、誠にかしこく聞こゆれども、其身も同じことなるをばしらず。されば、昔より、佛に歸する人、貴賤男女をいはず、いづれも身の苦樂をおもふより起らぬはなし。明智の人といへど、此婦人の覺悟にも及ばぬなるべし。あたら人材をむなしうして、既にいく世をか經たる。末の代とてもさぞあるらめ」と、なにとなく空の打ちながめられて、

宇宙依然百代流　道喪文弊思悠々　誰知天上孤輪月　長照人間萬古愁
詩書道廢共誰陳　邪說紛々日競新　明月似知千載恨　慇懃來照白頭人

翁自ら此詩を賦して口ずさびければ、諸客も傳へ誦しけるが、月落ち河傾きて、夜も既にあけける程に、各いとま申してまかりぬ。

河傾き―天の河のうつり行くなり

○詩文の評品

他日繼いで諸客來會せしが、各疑問事訖つて、詩文の談におよぶ。いづれも翁にむかうて、「詩文は學問の餘事なれば、急務には候はねど、是も藝に游ぶの類とや申すべき。されば、翁の詩文の論を承りたく候」といへば、翁先詩の事を論じて、「詩は三百篇はとか

三百篇は云々―詩經をさすなり

綺靡―巧に花やかなること
王猛―猛は孟の誤
殘膏剩馥―遺風餘香といふに仝じ

う議するに及ばず。漢魏以後の詩も、文理悠暢、意思淵永にして、風雅の趣を失はざりしなり。蕭統が文選にのする古詩十九首、もろ〳〵樂府歌行の詩よみて知るべし。しかるに六朝に至りて、綺靡をきそひ、浮華をつとめしかば、風雅の體はほろびにたり。唐興りて李杜王猛が徒いでて、六朝の餘習を一洗し、大に古風を振興せしより、今に至りて詩を手習ふ人は、唐詩を學びざるはなし。盛唐の詩は、古をさる事遠しといへど、風景を寫し人情を述ぶるに、なほ風雅の殘膏剩馥ありて、おのづから人心を感ずるの妙あれば、學者の性情を吟詠するには、唐詩も捨てがたきものに侍り。宋の司馬溫公、杜甫が、「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心」といふ詩を論じて、古人の詩は意在言外を貴ぶ。山河在といへば、餘物なき事知るべし。草木深しといへば、人なき事しるべし。花鳥は平時娛むべき物にして、それを見てなき、聞きて悲しめば、當時流離の情いはずしてしれたり。又明の王鏊が唐詩を論ずるとて、國風緣衣燕〳〵、碩人黍離等の篇、いづれも言外無窮の感あり。後世たゞ唐人の詩のみ此意あり。溪水悠々春自來といへば、懷友をいはねども、懷友の意言外に溢る。「潮打空城寂寞回」といへば、興亡をいはねども、興亡の感言外に溢る。風人の體を得たり、といひし此二子の論、ふかく其理を得たりと覺え侍る。是にて唐詩の妙をしるべし。李白が大原早秋を賦して、「霜威出塞早。雲色渡河秋。夢繞邊城月。心飛故國樓」といへる、此類の詩は、雄壯の氣をもて勝れたり。杜甫が江亭を賦して、「水流心不競。雲在意俱遲。寂々春將晚。欣々物自私」といへる、此類の詩は、深遠の心をもて勝れたり。其外王維が「日落江湖白。湖來天地青」といひ、杜甫が、「吳楚東南坼。乾坤日夜浮」といひ、孟浩然が「微雲澹河漢。疎雨滴梧桐」といひ、柳宗元が「壁空殘月曙。門掩候蟲秋」といふ、みな馴雅の詞をもて不群の思を發せり。誠に宋人のいはゆる、「難狀の景を寫して目前にあるがごとく、不盡の意を含みて言外にあらはる」とは、是等の作をやいふべき。其餘の詩も是に例して知るべし。杜甫が秋興の八首、王昌齡が宮詞の諸篇は、其體はかはりたれども、各其能を縱にして、ことに傑然たるものならんか。しかるに、中唐より晚唐に至りて、韋蘇州、柳儀曹が外は、昌黎が文章古今に卓絶すといへども、其詩風雅には少し遠かりき。まいて孟郊賈島が寒瘦、元稹が輕浮、白居が淺俗、李商隱が僻澁、溫庭筠が媚艶、いづれも詩の厄といふべし。其作たま〳〵盛唐に出入するもあれども、其大槩を論ずるに、意趣鄙しく品格下りて、見るにたらず。其餘の作

王維―原本「王淮」に作る
難狀の景を寫して云々―此語詩人玉屑に見ゆ

窩臼に落ちて―かたにはまりて

者も、大かた聲律に拘り、窩臼に落ちて、詩は性情を吟詠すといふ事をしらざるなるべし。鄭谷が雪を賦して、「江上晩來堪盡處。漁人披得一簑歸」と作れるを東坡が評して、「是は村學中の詩なり」とて、柳子厚が作りし「千山鳥飛絶。萬逕人蹤滅。孤舟簑笠翁。獨釣寒江雪」といふ詩を引きて、別格の事といへり。鄭谷が詩は、巧にして俗耳には諧ふべけれども、子厚が詩をもて見れば、その鄙俗あらはれておほふべからず。東坡が眼力のたかきを知るべし。それにつきて思ふに、「細雨濕衣看不見。閑花落地聽無聲」といへるは、盧綸が詩なり。人口に膾炙して佳句となん稱し侍れど、よくいひおふせたるばかりにて、吟詠するに餘味なし。宋の僧志南が、「霑衣欲濕杏花雨。吹面不寒楊柳風」といへるは、清麗閑暇、咀嚼して味あり。盧が詩にはまさりぬべし。されば志南が詩を朱文公の稱し給ひしを、けにさることとおもひしが。其後擊壤集を讀みて、「梧桐月向懷中照。楊柳風來面上吹」といへるを見るに、又一等從容の氣象ありて、有道の言とこそ覺え侍れ。誠に風流人豪と申すべし。此三人の作、句調景趣ともに相似て、おのづから三段にきこえ侍る。盧は辭を主とし、志南、康節は情を主として、情に高下あり。是にてしり給へ、詩は辭に拘れば、理屈に落ちて味なく、情に發すれば、意思を含みて味あり　しかいへばとて、初學の人、辭の雅俗をしらずして、にはかに情の沙汰には及びがたし。今世好みて詩を賦する人を見るに、多くは、日ごろ唐詩をくはしくよまずして、たゞ主意を先だてゝ、己が俗腸よりたどちにいひ出す程に、巧なるは詼諧をきくに似たり。拙きは禪錄をよむに似たり。又世に一種偏曲無實の人あり。なにの主意もなく、樂府古詩の辭を剽掠して高古に傲り、己が家流の外一代に詩なしとおもへり。然れども其詩をよむに、猥碎流麗一向に文理をなさず、浮萍のごとく斷綆のごとし。文字の怪といふべし。しかるに、其黨の人は相師祖して是を文雅風流とし、あまつさへ聖人の道は文雅風流なる物といひしよしを聞き侍る。文雅風流はよしそれにもせよ、道は文雅風流なる物といへるは、いかなるいはれにかあらん。さいつころ、人ありて翁にかくと告げける程に、「さては道は仁義にはあらずして、詩歌管絃にあるよな。しからば、孔孟よりは世の騷客伶人こそ道に近かりけめ。今まで知らざりしは、いと口惜しかりける事よ」といひしが、是は翁が戯なり。もとより詩文を好み、華飾を事とするは、道に益なきといふばかりにてもなく、人の心術を害するなれば、學者の專につとむべき事には侍らず。但一向に詩歌をたちて風雅の趣をしらざらんは、質勝ちて野なる方と

浮萍云々―飄轉して定まる所なきをいふ

斷綆―原本斷梗

や申し侍らん。

○倭歌に感興の益あり

されば我朝に歌あるは、もろこしに詩あるがごとし。よりて詩歌とて同じやうに取りはやし候へども、我朝はむかしよりもろこしの文辭にうとく、李杜諸名家の詩をよむ人まれなり。たとへ讀みても、その旨に通じがたし。たま〳〵白居易の詩和かにて、倭歌の風にもかなひ、平易にして通じやすき程に、是を唐詩の上等として、このみて長慶集をのみ學びけらし。この故に、其詩みな膚淺粗俗にして、見るに足らず。懷風藻、本朝文粹など考へて知り給へかし。反て近來五山老禪の賦する絶句の體の、一種澹泊の味ありて取るべきにはしかず。しかれば我朝の詩は、すてゝ論ずる事なかるべし。さて倭歌に至りては、我朝の人これをもて性情を吟詠すれば、からやまと詞はかはれども、その所はかはるべからず。詩は一首にて詞理ともに具足して、曲盡人情たれば、もとより三十一字の及ぶべきにあらず。翁わかき時より、盛唐の詩を好みて讀みて、賈至が早朝大明宮の詩に、「千條弱柳垂青瑣。百囀流鶯遶建章。劍佩聲隨玉墀步。衣冠身惹御爐香」と賦し、それを和して、王維が、「九天閶闔開宮殿。萬國衣冠拜冕旒。日色纔臨仙掌動。香煙欲傍袞龍浮」と賦し、岑參が、「金闕曉鐘開萬戸。玉階仙仗擁千官。花迎劍佩星初落。柳拂旌旗露未乾」と賦し、杜甫が「旌旗日暖龍蛇動。宮殿風微燕雀高。朝罷香煙携滿袖。詩成珠玉在揮毫」と賦するを見るに、文彩の煊赫たるのみにあらず、開元泰平の氣象目中にあるがごとし。かやうの所に至りて、倭歌の風情は、殆ど螢燭の日におけるやうに覺え侍る。たゞその情に發する一ふしは、おのづから詩にかなふ所ありて、人心を起す益なきにあらず。國風芣苢の詩に「采〳〵芣苢。薄言采之」といふがごとし、是は婦人のおほばこを采りて日をおくるを自ら賦したるなり。なにのをかしきふしもなけれど、其時代泰平にして、婦人までも無事をたのしむの情、言外にあらはる。それにはからずしてかなひたるは、もゝしきの大宮人はいとまあれやさくらかざしてけふもくらしつとよめるにぞ、我朝も延喜天曆のころは、朝廷和平、群臣閑暇なりし事おもひやられて、いと感ふかし。芣苢の詩によくかなひ侍る。其外、古今集の歌は、詞すなほに餘情ありて、おほくは一倡三歎するにたへたり。

たとへ—原本「へ」を脱す

原本「白居易」の下に「の」の字なし今假に補ふ

長慶集—正しくは白氏長慶集、白居易の詩文集七十一卷

あり

煊赫—かゞやくさま

螢燭の云々—くらべものにならぬとの意

もゝ千鳥さへづる春はものごとにあらたまれども我ぞふりゆく

此歌を吟ずれば、老人の懷舊の情を感ずべし。

春の夜のやみはあやなし梅のはな色こそ見えね香やはかくるゝ

此歌を吟ずれば、有德の不可揜の誠を感ずべし。

世中にさらぬわかれのなくもがな千世もといのる人の子のため

此歌を吟ずれば、孝子の愛親の情を感ずべし。

風ふけばおきつしらなみたつた山夜半にや君がひとり行くらん

此歌を吟ずれば、貞婦の思夫の情を感ずべし。

忘れては夢かとぞおもふおもひきや雪ふみ分けて君を見むとは

此歌を吟ずれば、君子不忘故舊の情を感ずべし。此歌外にもなほ多かるべし。古今集以後八代集に至りては、あげて數ふべからず。中に翁が常に好みて吟ずる歌一首あり。

鎌倉三代實朝の歌に、

武士の矢なみつくろふ籠手の上にあられたばしるなすのしの原

此歌を定家卿評して、鬼をとりひしぐ體といはれしとぞ。誠に勇壯をもてすぐれたる歌

なり。外に此體の歌おほく見え侍らず。武士たる人常に此歌を吟ぜば、その金革をしきねにするの志を感じて、勇氣をすゝむべきとこそ思ひ侍れ。さて春秋のあはれをいひ、月花などを詠めし歌も、たゞ其まゝに寫しとりて、さながらみるやうにあるは、なにのをかしきふしもなけれど、かの詞つゞき巧に、よくいひかなへたると見ゆるよりは、感ふかうしてすてがたく覺え侍る。今思ひ出したる數首をもて例していはゞ、

久かたの光のどけき春の日にしづ心なく花のちるらむ

朝日かげにほへる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとぞみる

うちしめりあやめぞかをるほとゝぎす鳴くやさつきの雨の夕暮

庭の面はまだかわかぬに夕立の雲さりげなく出る月かな

夕されば門田のいなばおとづれてあしのまろ屋に秋風ぞ吹く

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月の影のさやけさ

津の國の難波の春は夢なれやあしの枯葉に風渡るなり

駒とめて袖うちはらふかげもなし佐野のわたりの雪の夕暮

是等の歌、不盡の景氣をうつして、さながら目に見るがごとく覺え侍る。折にふれて是

あしのまろ屋―葦にてふきたる假小舍

を吟詠せば、襟懷を清くし、塵想もけぬべし。西行が、「わが佛法は、倭歌によりてすゝむ」といひし、さもありなんかし。わがともがらも、吟詠をたすけ、性情を養ふには、たよりなきにあらず。されば、倭歌のすてがたきはこゝにあるべし。但此ごろの歌は、あたらしくいひいでて、一ふしをかしくきこゆるはあれど、こと葉の外にけしき覺えて、あはれふかきはなし。いかでか人の心を感興するの益あるべき。是も晩唐以後の詩のごとく、詞にのみもとめて情に本づくといふ事をしらぬなるべし。なに事も、風俗の衰へ行くまゝに、浮靡にながれて、實をとり失ひぬるこそ、なげかしき事なれ。詩歌のみに限るべからず」

浮靡―うはべを飾りて浮華なること

○六義の沙汰

座中ひとり、「紀貫之が古今集の序に、歌の樣を六種にわけて、からの歌にもかくぞあるべきといへば、詩の六義に其意かよひ侍るにや、承りたくこそ候へ」といふに、翁、「倭歌の事は知らず候へども、詩の六義は、古今集の序にいひける六くさの趣とは、大きにかはりたる事になん侍る。詩は風雅頌賦比興をもて六義とす。風は諸國にあらゆる男女、各己が情を詠ずるの詩なり。國々にて其風體かはるにて、風といふなり。雅は朝廷の公卿大夫以下、己が情を詠ずる詩なり。聲正しく體いやしからぬにて雅といふなり。頌は宗廟において、祖考を尊び、福祚を禱るの詩なれば、頌といふなり。この三にて詩の全體をすべたれば、いはゞ織物のたてあるがごとくなるゆゑに、是を三經とす。さて賦比興の三は、右之三經を横に貫くありて、風雅頌の詩いづれも賦比興の三の體にはづるるはなく、いはゞ織物のぬきあるがごとくなるゆゑに、是を三緯とす。三經三緯を合せて六義とす。三經は前にいふごとく、詩の部立なれば、格別の事なり。三緯は每章詩の仕立にてわかつ事なり。賦は葛覃卷耳などの詩のごとく、情事をすぐに詠ずるをいふなり。比興のふたつは、すこし紛はしき體ともいはんかし。比は他物をもてその本意に比喩す。宮人螽斯を賦して、螽斯の多子なるをもて、后妃の子孫多きに比し、婦人栢舟を賦して、栢舟の漂流するをもて、己が夫にすてられてよるべなきに比するがごとし。本意すぐに比する物にありて、別に本意をいふに及ばず。興は他物をもてその本意をいひ興す。關雎の詩の、關々たる雎鳩をもて、窈窕たる淑女を興し、樛木の詩の、樛木の葛藟をもて、君子の福履をいひ起すがごとし。上はいひ起す迄にて下に本意をいふなり。

福祚―さいはひ

宮人螽斯を賦して―以下「君子の福履をいひ起すがごとし」までの數行は、詩經中の詩に

つきて實例を示せるなり

今詩の六義をもて倭歌を論ずるに、萬葉集にのする國々の歌は、風ともいふべけれど、その外古今以下代々の歌、多くは輦轂のもとの作なり。これを雅といへば、閨秀桑門の作、又は戀釋教等の歌まじれり、雅といふべからず。神祇慶賀の歌などは、その意や頌に近しともいふべけれども、これ又宗廟樂歌のこと葉にあらず。その體又別なり。しかれば、風雅頌の三は、倭歌にはきはめてあはぬことなり。いかでか是をもて、倭歌の部立を定むべき。賦比興の三は、倭歌の體をわかたば是はわかれもし侍らんか。されど、廿一代集の歌、大かたはすぐに風景をうつし、情事をのべて、比興するは稀なれば、十に八九は賦といふべし。中に比興の體もたま〳〵は見え侍る。仁德帝の御卽位をすゝめて、

難波津にさくやこの花ふゆごもりいまは春べとさくやこの花

とよみ、齋宮の御子の、さはり出來て、齋宮にたゝずなりなんとしけるに、其事はれて、つひに初に復せし事をよろこびて、

大空をてりゆく月のきよければ雲かくせどもひかりけなくに

とよみ、わが身の老朽ちて世にもちふるかたのなきを打ちなげきて、

かも—もは感動詞

おしてるや「なには」の枕詞

おほあらきの森の下草おひぬれば駒もすさめずかる人もなし

とよめる、みな外のものをもて比して、始終本意をあらはさず。この類の歌は、詩にていへば此の體にかなへり。人丸が夜のながうしてあかしかねたるを、

足曳の山鳥の尾のしだり尾のなが〳〵し夜をひとりかもねむ

とよめる、此類の歌は、詩にていへば興なるべし。いかんとなれば、上の句に山鳥の尾をもていひ起して、本意は下の句にあり。其外世の人口にある歌に、自ら痛みて老いにけるをなげきて、

おしてるや難波のみつにやく鹽のからくも我は老いにける哉

とよみ、うき身の世にすみがたきといふ意を、

あし鳧のさわぐ入江の水のえの世にすみがたき我身なりけり

とよめる、皆上の句に外のものをもていひおこして、下の句にて本意をいふ。いづれも興の體にかなへり。さはいへど、和歌はもとより風雅頌のわかちもなく、賦比興の體もさだかならず。貫之がいへる六くさは、詩の六義を深く考へずして、たゞ歌のさまを六くさにわけて、詩の六義とかずをあはせて、かくいふなるべし。されば、詩の六義は

詩の六義、歌の六義は歌の六義と、格別に見て、あはせ論ずべからず。倭歌に限らず、官職律令等の事にても見給へ。我朝にて漢唐をまなびて建てたる事に、取誤りて名實齟齬したる事多し。しかるを、倭書をとく人、多くは强ひて牽合して、其誤を信にせんとす。恐らくは公道にあらず。たゞ信以傳信。疑以傳疑といふにしたがひて、是非のまゝに沙汰するこそ、明達の論ともいふべけれ」

○作文は讀書にあり

後數日ありて、諸客來會せしが、翁にむかひて、「前日倭歌唐詩の事くはしく承り、異聞を得侍る。但倭歌は、我等ごときのかねて學ばぬ事に候へば、必ずしも自らよむには及ばず。詩も必ずしも自ら作らずとも、古詩を吟詠しても、襟懷をきようするに足りぬべし。たゞ文章はそれとはたがひ侍るべし。たゞ今聖賢の書をよみ候も、文辭によりて求むる事にて候へば、文辭の法にくらくしては、其蘊に通ぜざるのみならず、其義を誤る事もあるべく候。其上、孔子も辭は達するのみと仰せられ候。自身に文辭をもて書を解し義理を論じ候にも、其法をしらずしては、道理をいひ達する事もなりがたく侍るべし。

蘊―奥義

晩進後生―おくれて學に志すもの

今我等ごときの晩進後生、文章を學び候には、いかゞ意得てよくあるべく候や承りたくこそ」といふに、翁笑つて、「むかし漁獵をこのむ人のいふをきゝしに、魚をとるよりは、鳥をとるはおもしろく、鳥を捕るよりは猪狩は又おもしろき物なりとぞ。其相手にする事がらの大きなるにしたがひて、おもしろさもまさるにて候。翁いとけなかりし比、小倉の百首をよみ習ひしより、和歌のをかしきふしをもかたはし承り知り、其後學に就き候うてより、又詩文を好み候うて、是には多くの年月を費し候ひし。今は悔しき事に思ひながら、はや七十にあまり候へども、さすが日ごろのすきはいまだやみがたくこそ候へ。それにつきておもひ候に、和歌よりは詩はおもしろく、詩よりは文章は又おもしろく思ひ侍る。翁かねて申す事にて候。義理はふかき物にて候へども、義理の工夫は、我邦の人とても、からにおとるべきにもあらず。さる程に、宋明諸儒の說をも爰にて是非し、その及ばざる所をも發明するにて候はずや。たゞ此文辭ばかり、こゝにて常に取りあつかはぬ事にて候へば、書をも國語をもて訓じ、顚倒して讀み來り候程に、老師宿儒といふとも、よく辭に得て意に通ずる事難かりなん。況や多くは涉獵をつとめて、書をよむ事も雜駁なれば、いかでか文辭のふかき味を知るべき。これによりて自ら作れる文章

なけれど—原文「なけけれど」とあり、今意に從ひ一字を削る
鉅作—大作
三蘇王曾—蘇老泉、蘇東坡、蘇子由、王安石、曾鞏

も、辭なづみ意塞り、或は奇險を務め或は怪僻に涉り、自ら古文辭と稱して世に傲れども、大かた見るにたらぬ事にて候。たとへば、富商大賈の己が貨財多きに誇りて、簪纓家の風流を眞似するが如し。珍器名物などのかざりにて紛らかしぬれば、はしぐ似たるやうにもあれど、かのやすらかにしておのづから風流なるに比すれば、なにとなくいやしきさまありて、更に同じ物にあらず。又口吃する人のものがたりするがごとし。さながらわけ聞えぬにてもなけれど、言葉つかへていひとりえざる事おほし。今此弊を矯めむとならば、漢唐以來明理の文を讀みて、其中より文法をさとるにしくはなし。其鉅作をもていはゞ、賈誼が治安の疏、董仲舒が對策の文、韓退之が原道、歐陽永叔が本論等の篇を最とすべし。其外、柳子厚三蘇王曾に至りて、古今大家と稱する人の文章を見給へ。平易條暢ならざるはなし。いづれか今人の好める弇州滄溟が文のごとく、詭異難澁なる事やある。文に韓柳歐蘇あるは、詩に李杜王孟あるがごとし。されば、宋明諸家の文章を論ずるにも、韓柳歐蘇を宗とせざるはなし。然れども、諸家の文章を論ずる、皆過高にして、初學に益なし。章法、句法、抑揚頓挫などやうの沙汰は、粗熟して後の事なるべし。むかし孫莘老、歐陽公と相識る事久し。或時乘間じて文字をもて問ひし

弇州滄溟—明の王弇州李滄溟
李杜王孟—李白、杜甫、王維、孟浩然、原本孟を猛に作る
捷徑—ちかみち
のこさぶる—のこさるるの誤か
躁進—前後も顧みずかろ〳〵しく進むこと

に、歐公のいはく、「作文無他術唯讀書多則爲之自工。世人之患在懶讀書。又作文字少。毎一篇出卽求過人。如此少有至者。疵病不必待人指摘。多作自能見之」翁おもへらく、歐陽公の言平實にして味あり。文章を學ぶに、これより近きはなかるべし。翁數年文章に心を用ひて、何とぞ捷徑もあらんかといろ〳〵尋求めしが、後に、文を學ぶに別に悟入の法なし、たゞ讀書にあり。歐陽公の言我を欺かざる事をしりぬ。歐陽公古今文章の大家として、其言かくのごとく、其上古人の爲にいへるに、心底をのこさゞる事あるべからず。しかるに、その意是に過ぎざれば、此外に餘法なき事明らけし。又韓退之答李翊書、柳子厚答韋中立書、并に蘇老泉が上歐陽內翰書を見て知り給ふべし。三子いづれも初より著作を事とせずして、積年の力を讀書にもちひしかば、讀書に勞して著作に逸せし事、はからざるに符節をあはせたるが如し。されば、韓柳歐蘇が文章におけるは天授の材といへど、それさへ讀書より得ざるはなし。今吾黨の學は、文辭を專にせねば、必ずしも文章家を學ばんとにはあらねど、常に用ふるに辭達して事のかけぬ程にとならば、それも古文辭をよむにつとむべし。今の後生多くは躁進にして、久しく潛思讀書にたへず、常に銳志著作にして、たゞ自ら文を作りて、

師友の指摘を求むるをのみよしと思へり。しらずや指摘の益は、大體文字程に中りて、中に一二所の疵病を改め、又は彼善に於此とするをいふなり。今卒易にして不成體の文字をもて是正を求むるは、たとへば室屋のごとし。結構次第を失ひ、材木等倫を失ひ、或は堂を後にし室を前にし、或は棟を椽とし椽を棟とせば、一向に住居をなさずといふべし。大匠といふともいかゞ脩補すべきや。たゞ穹を窒ぎ、傾を支ふる迄にしてやみなまし。今後生の文字を指摘するも亦かくのごとし。爾においてなにの益かあらん。この故に翁かねて後生にいへらく、「先筆を下さず、その作の功を讀に用ひて、古文辭に覃思せよ。久しうして必ず古人の口氣になれ、古人の作意を得て、我心に悅懌する所あるべし。しからば時々譽揚するも工夫のひとつなりと先儒もいへば、著作を一向に廢せよとにもあらず、但十に七八の力を讀にもちひ、二三の力を作にもちふべし。かくして月を經年を經ば、韓柳歐蘇がやうにこそなくとも、相應に悟入する所ありて、文字を作るに手熟し筆活して、用ふるに隨ひて足りぬべし。是晩うしてはやく、遠うして近きの道なり」

疵病—缺點

口氣—くちぶり

悅懌—よろこぶこと

○多錢善賈

座中の諸客、「文章の學は讀書を要とする事くはしく承り候。しからば文章の爲によむべき書はなに〳〵と承りたく候」といへば、翁きゝて、「韓退之が進學解に、規をとり作を擬するの書をいふに、上姚姒より下大史所錄子雲相如に至り、柳子厚が韋中立に答ふる書にいふにも、詩書を首として太史公に至る、二子いづれも班固以下は取る所にあらずと見えて候。されど韓退之が答李翊書に、「三代兩漢の書にあらざれば敢てよまず」とあれば、西漢書をばすてざりしにや。歐陽、東坡などは、ことに博學の人にてあれば、古今の書によまざるはなかるべし。歐陽が韓文を學び、東坡が孟子を學ぶといふは、多讀の功つもりて、こゝに至りて、性のちかきより悟入する所あるによりていふなるべし。曾南豐陳無己に伯夷傳を與へてよませけるに、無己それより文法をさとるとなり。古人多くはかくのごとし。今伯夷傳をよまざる人はなし。しらずよく文法を悟らんや否や。ちかき頃歸化の人舜水の朱之瑜が物がたりに、東坡潁濱わかきころ、父老泉なにやらん常に一書を枕中より取出でてよみけるが、ふかく祕して見せざりしを、父あらぬ時にひ

舜水の朱之瑜—朱之瑜名は魯璵、

舜水は其號、明末の遺臣、逃れて我國に來る、德川光圀に聘せられ、長く水戸の客たり

浩繁―量多く類繁きこと

そかに取出して見れば孟子なりけるとぞ。此事なにの書にも見えず。あなたにてたゞ世にいひ傳へし事ときこえし。老泉が批點の孟子とて世に傳ふるも、眞僞はしられねども、是をもていへば、さもありぬべし。老泉も日ごろ先秦兩漢の書を見たればこそ、孟子を讀みて悟入しける程に、かく愛玩はしつらめ。されば多錢善賈、長袖善舞といふごとく、文章も多讀にしくはなかるべし。但先秦兩漢の書とても、卷帙浩繁にして、吾徒の材力にてはあまねく精讀し難かるべし。是によりて翁は其中を取りて、五經論孟の類は勿論にて、老莊屈宋が作、淮南、荀卿が書、さて丘明が國語左傳、司馬遷が史記、班固が西漢書に極めたく候。其外は唐宋大家の文を熟讀すべし。是も全集をよむにはおよばず、幸に明の茅鹿門の抄錄したるあれば、是にてこと足りぬべし。八大家の文をよみて自得する所あらば、明朝諸家の文は、遙に其下に出づる事を知るべし。體製迭に出でて呈新とも、珍とするにたらず。奇怪相競ひて獻異とも、驚くにたらず、いはゆる觀於海者難爲水とは是等の謂なり。されば、義理は濂洛關閩に至り、文章は韓柳歐蘇に至りてもはやかふべからず。後世作者ありとも、これを易ふる事なかるべし。しかるに世の宿儒と稱する人、己が麤淺猥瑣の文をもて、みだりに韓歐が文を非毀するよし聞

濂洛關閩―前に註せり

四六俳偶―四字六字の句にて對句をなすこと

え侍る。ちかき頃も其徒のいひしとて「韓はなほ取るにたる。歐陽はいまだ文辭を解せぬなり」と語るをきゝてをかしかりしか。むかし韓退之文を作りて人に見せて、人笑へばよろこびとし、人譽むればわが文いまだ俗人のよろこぶ所あると知りてうれへとすといへり。老子にも「下士聞道大笑之。不笑不足以爲道」とこそ見え侍れ。此等の人に笑はるゝにて、いよ〳〵韓歐が文の高きをしる。もし此等の人に譽めらるれば、韓歐とするにたらず。是も程朱を譏ると同じ意にて、もとよりいふにたらぬ事なれども、己が量をしらざるの甚しきをいふべし。古人を笑ふとすれど、みづから笑を後世に貽さんこそなげかしく覺え侍れ」

○文章の盛衰

しばらくありて翁、古今の文章を論ずるに、西漢の文章は、奏疏制策の外、賈誼が過秦論、司馬遷が答任安書、司馬相如が諭巴蜀檄、楊雄が解嘲、此類猶多し。其文大抵雄偉高邁、後人の及ぶところにあらず。東漢以後、文章衰弊して振はず、六朝に至りて、四六俳偶をもて工とせしかば、規模蕩盡し、氣象萎蕭して觀るにたるものなし。唐に至

りてその餘習いまだ除かざりしに、韓退之、柳子厚の二子、いづれも「超絶の材をもて、一生の力を盡し、古今の意を陶鎔して自ら機杼を出したれば、その文上追西漢て殆ど過ぎたりともいふべし。東坡が韓文公の碑に、「文起八代之衰道濟天下之溺」といひしが、道濟天下之溺はしらず、文起八代之衰といへるは異論なき事なり。誰かしからずといふべき。其後五代を歴て漸く衰へしを、歐陽、東坡の二子相繼いで出でて振起せしかば、文章ふたゝびいにしへに復しぬ。其文光明正大、又追配韓柳て羞ぢざるべし。是をもていふに、韓柳歐蘇は文章家の大宗たり。古今文章においては、一人も非議するものあるをきかず。されば明朝に至りて、詞臣文士多く出でて、文章世に盛なりしが、劉基宋濂李夢陽何景明が徒名を一時に擅にし、大家と稱せしかども、韓柳歐蘇が文においては、一言も雌黄を下す事なし。おもふに、ふかく慕尚して欽服しけらし。其外文章をもてきこゆるもの、唐順之王愼中が徒、各一家の言を立つといへど、いづれか韓柳が遺流をくみ、歐蘇が餘波を揚げざる者ある。然るに文章は時運と盛衰するものなれば、明の中葉より以後稍々衰へゆく程に、平易なるは鄙俚となり、簡古なるは剽竊となり、それより天下の文章科舉帖括の習に落ちて、是を時文と稱せしかば、古文は見るべからざる事になりにけり。此時に當りて、古文に志ある人世に輩出して、復古矯俗に急なりしも、韓柳歐蘇が文をこそ赤幟とせしが、篇ごとに揄揚し、句ごとに品藻せざるはなし。しかあれど、材識高からず、蘊畜深からざるによりて、その所作の文を見るに、古に似て古にあらず、雅に似て雅にあらず、最後に李攀龍王世貞出でて、その平易にて膚俗にちかきを厭ひて、相與に奇怪の文を造作し、狂蕩の論を譸張し、洸洋自ら恣にし、一世を鼓動せしかば、四方の文士靡然として歸依せし程に、號して文章の主盟と稱しき。されば滄溟鳳州も、常に韓柳歐蘇が文をば褒稱して、終に非議する事をきかず。鳳州は晩節に及びて文友と文を論じて、やゝ後悔して、平正にかへる志ありしかども及ばざりけるよし、錢謙益が列朝詩集に見えしと覺え侍る。しかるに、今文章をもて自ら許す人の、王氏が棄餘を拾ひて彼が四部稿を師祖とすと見れば、また鳳州が心にたがひて、反つて韓歐を毀るこそ、いと意得がたけれ。定めてふかき意もあるにか あらん、翁などが小見にて知るべき所にあらず。

機杼―をさ、機軸といふに同じ

雌黄を下す―是非する

揄揚―ほめあぐること

品藻―批評して定むること

洸洋自恣にし―海洋の限なきが如く、漫然と心の向ふまに説きたつること

○曇陽大師

今更こと新しき申し事にて候へども、人は第一義理の大筋を知りたきものにて候。かやうの事をいふを今世の儒者きゝては、「たれ義理しらぬものやある。初心なる事をいふ」とて、さこそ嘲けり笑ふにてあるべく候へども、世に鉅儒と稱する人にも、義理の筋くらき人も見え侍る。孔子も「君子は義以爲質」と仰せられて候。是は君子言行の上にて仰せられ候へども、すべてよろづの事、義理を質とせざるはなし。況んや文章は質ありての文なれば、義理にもとづかずしては、浮靡亂雜にして、文章とはいふべからず。されば韓柳歐蘇の四人、いづれも文章科中の人なれば、道の深きをしりたる人とは許しがたけれども、義理の筋しらぬ人にはあらず。但韓歐は道のあらましをもうかゞひ、一代の正人たりしぞかし。柳蘇はふたりながら釋氏に浸淫し、それに柳は叔父が黨にいり、蘇は洛學の仇となる。これをもて、正人君子のために貶議せらる。それは學術の正しからぬによれば、今更是非するにたらず。その文を見るに、必ず義理に根據して、識遠く思ひ永し。中に柳が文は、精深雅健にて、氣格ことに雄拔しける。蘇が文は、議論振發し、理致明白にして、確乎として拔くべからず。こゝをもて韓歐に配して愧ぢざるにあらずや。明朝に至りても、弘治正德のころまでは、文章といへば義理を主とせざるはなかり

鉅儒—大儒

されば—原文「ば」なし假に補ふ

貶議—批難

義理を主とせざる—原文「…主とせる」とあり、恐くは「ざ」を脫せるものならん

徵逐—招き又招かるゝこと、往來といふが如し

暴卒—急死

譚浪笑敖の友—たはむれ笑ふ義、詩經に譚浪笑敖中心是悼

き。もし己が博聞に傲りて、たゞに文辭に馳騁して、義理を主とせざるの文は、しひてその辭を矯飾して、文彩目を驚かし、變幻百出すといふとも、明眼の人一たび觀ば、その猥淺にして見るにたらざるをしらんかし。滄溟鳳州等が文是なり。翁かねて二子の爲人を考ふるに、狂率輕俳にして、夢にも義理しりたる人とは見えず。なにによりて文章の義理にもとづくべき事をしらん。今その大概をかたり侍るべし。二子莫逆の交をなし、日夜徵逐して詞賦をもて相誇り、中原二子をもて自ら許すに至る。その顚狂恣睢いふばかりなし。いく程なくして、鳳州が父王忬、怨家のために誣ひられて、下獄論死せられしかば、鳳州弟世懋と同じく、棄官て長安に走り、父の死に代らんとこひしかどもかなはざりしかば、號泣徒跣して柩を負ひて歸葬しける。これは、さすが本心を失はぬ所もあるかと見えしか。それより身の不幸をかなしみけるにや、又は滄溟も心病にて暴卒せしかば、譚浪笑敖の友もなくなりし程に、志氣沮喪しけるや、忽に故態を變じて釋氏に歸依し、伽藍を建立し、又弇州の園をつくりて、日夜賓客と其中に宴游し、歲月を玩愒しける。なほそれよりもあやしむべきは、社友王錫爵が女、比丘尼となりて、恬澹教門を立てしを、鳳州これが弟子となりつゝ、其尼を尊びて曇陽大師と號し、錫爵

宿好―以前よりのすきの道

地望―地位名望

晋の清談―三國の頃より清談の風行はれしが茲に至りて最甚其徒老莊を尚び詩

と同じく結廬戒食し、それより賓客を謝し、筆硯をやき、朝夕梵誦をのみ勤めけるこそ希有なるわざなれ。しかもそれにもたへず、やゝ久しうして宿好を忘るゝ事あたはず、又出でて詩人酒客の間にあそびけるが、程なく身まかりにけり。各是にて鳳州が爲人を考へ給へ。病狂喪心の人に似たり。然れども、博聞宏詞の名を竊むに足り。同俗合汚衆を收むるに足りしかば、其時に當りて地望の高き、游道の廣き、海内の人物を鼓動せしかば、王守仁が良知の説をもて天下を傾けし後はきかざる所なりとて、世の論者、陽明を並べ稱して一代の盛事としき。翁おもへらく、明朝の學は二はに變ず。義理の學は陽明に變じ、文章の學は鳳州に變ず。但良知の説は内省存心の工夫に係りて、儒者分内の事を離れず。鳳州に至りては、名撿をいとひ規矩を破り、たゞ文雅風流をもて學とすれば、その害晋の清談に似てなほ甚しきものといふべし。今世師儒と稱して法を孔子に誦すといへど、實は名聞をつとめて露道に志なければ、二百載の下鳳州が聲威をかりて、世好に投じ時望を收めんとするは、いとさかしき謀なり。今其師といひ弟子といふもの、群居して文談するをきくに、口にまかせて大言し、道を語れば程朱を排し、文を論ずれば韓歐を貶し、自ら牛耳を執りて一世人なきやうにいへるこそ、むか

酒にのがれ道德爲に地を掃へり

いふべし―原文「いふし」とあり今「べ」を補ふ

遷國が史―司馬遷が史記と班固が前漢書

しの攀龍世貞が會に髣髴しけれ。よく其傳を繼ぎたるといふべし」

○寸鐵人をころす

後數日ありて諸客來會せしが、翁に、「前日文章のために讀むべき書御示教ありて承りて候。それにつき請益たき事の候。右御差圖の書は、我等とも日頃讀み候うて、常に取りあつかひ申す物にて候。今改めて文章のために讀み候には、よみやうの意得もあるべく候や。承りたく候」といへば、翁、「それは尤なる心づきにて候。大凡書は多讀をよしといたし候へども、たとひ千卷萬卷の書讀み候うても、其書に意を精しうせず、たゞ上邊にてひと通りに讀通しては、何の益をか得べく候。寸鐵人を殺すとて、一寸の鐵にてもよく鍛へば人を殺すに足り、長道具たりといへども、なまりては用にたへざるが如し。むかし東坡自ら西漢書を讀みしことをいふに、治道、人物、地理、官制、兵戰、貨財の類一過ごとに、專ら一事をもとめしかば、數過を待たずして事々精覈なるとぞ。虞邵庵是をもて人に敎へて、讀書の良法としけり。今此法にしたがひて、五經、左傳、遷固が史をも文章の爲とよまんには、義理事實に貪著せず、たゞ文章の一筋を主としてよむべ

し。志慮分るゝ所ありて專一ならねば、意を精しうすることを得がたし。それにつきて、翁日ごろ四法を定め侍る。その一に字例、文字を用ふるの例なり。たとへば藥の能あるがごとし。參芪同じく補なれども、其用ひ異なり。芩連同じく瀉なれども、その用ひ異なり。文字も亦しかなり。勉字務字同じくつとむるなれども、其用ひ異なり。愼字敬の字同じくつゝしむなれども、其もちひ異なり。すべて我朝同訓の字、皆其同異を辨ずべし。もし同訓にまよひて其同異を辨ぜずしては、こまの行きをしらずして象棋をさすが如し。必ず用ひ誤る事多かるべし。其外の文字も、一字あれば一字の能あり。焉矣乎哉等の助字に至るまで、同異しりやすきもあれど、少しのたがひにて、疑似するもあれば、とかく古人の用ひし例をひろく考へ、彼此をかよはして見るにしくはなし。其二に語類、字かさなりて成語をなす、其類一ならず。政治に係る語あり、兵戰にかゝる語あり、人の性行に係る語あり、事の措置に係る語あり、古訓の語あり、比喩の語あり、其外あげていふべからず。必ずしも其語を直に取るにはあらねども、古の成語を多く記して、其中より轉化し出せば、おのづから雅にして俗ならず、直にして迂ならず。其三には鋪叙語を鋪きて章段をなすをいふなり。群分類聚の所あり、交互錯綜の所あり、意を

觀美―見た上のうつくしきこと

設くるの廣く、言を布くの贍はしきを見るべし。其四には體裁、鋪叙によりて首尾をなすをいふなり。起端あり、承接あり、轉折あり、收結あり、文勢の抑揚頓挫條貫の滯らざるを見るべし。右の四法をもてよめば、汎然とよむにあらず。加之歳月の功をつまば、おのづから自得する所あらん。筆を下し文作るに、用字に誤らず、造語にいやしからず、鋪叙備り、體裁正しく、言をたて道を論ずるの助けとするに足らんかし。もし徒に文字をもてあそび、觀美をつとめ、これをもて學問の事とせば、浮虛無實の甚しきといふべし。かの文雅風流を道とするものと、なにをもて異なるべき。しからば、今かく云々するも、人を邪に納るゝにして、翁も其罪なしとせず。今世の學者、多くは輕俊にして實行を心とせず、たゞ文辭に馳騁して虛譽を求めざるはなし。然るに師儒たる者、たとひ痛く懲すとも、猶たえざるべし。況や道は文雅風流にあるの說をもていざなはんには、誰かあひ率ゐてしたがはざるべき。且いへ、道は道德にあるか、文章にあるか。道德にあるといはゞ、文辭はもとより道德にあらず。文章にあるといはゞ、いはゆる夫子の文章は、道德の美の威儀文辭にあらはるゝをいふなり。今たゞに文辭をさして道とするは、玉帛をもて禮とし、鐘鼓をもて樂とするに同じ。されば孔子も、「禮云禮云。

玉帛云乎哉。樂云樂云。鐘鼓云乎哉」と宣ひし。翁も聖言を眞似て、文といひ章といふ文辭をしもいはんやといはましとぞ思ひ侍る。

○言は身の文

翁かねて思ふに、口を發する上にていへば言とし、言の連續する上にていへば語とし、語の模樣をなす上にていへば辭とし、それを文字に寫す上にていへば文辭とす。しかれば、言語、文辭同じものなり。たゞし後世文字の辭を文辭といふより起りて、文辭に限り文章といふは、古意を失ふのみならず、身に取りて文章のおもきは言語にあり、文辭はその餘事なる事をしらず。古より、愼言の訓一にしてたらず。孔子も「言行は君子の樞機、榮辱の主」と宣ひ、子貢も「君子は一言もて知とし、一言もて不知す」といひ、南容は日に白圭を三復しけり。是によりていふに、身の文章は言語よりおもきはなし介之推が、「言は身之文也」といひしをぞ、ふかく其理にあたりたるといふべし。世の儒者と稱する人、多くは出ニ辭氣一して鄙倍を遠ざくる事をしらず。或は大言を恣にし、戲謔を好み、或は女色を論じ、貨利を議し、其言をきくに委巷の談のごとく、奴隷の語

に似たり。文雅風流安にかある。それにたゞ詩を賦し文を著はし、琴を皷し笙を吹きて古人の文雅風流とす、いはゆる買レ櫃還レ珠の類なるべし。たとひ文雅風流古人に似たりとも、優孟が孫叔敖を學ぶがごとし。況や大きに似ざるものをや。誰か眞の孫叔敖とすべき」座客の中にいふは、「兵家山鹿の何がしが、世に士の金銀の事を口に沙汰するはいやしき事といふは、大きなる僻ごとなり。金銀はなくて叶はずして、至りて大切なる物なり。それをいやしめ輕んずべきにあらずとて、諸侯より金銀を贈れば、取りて戴きてさしおきけるとぞ。翁はいかゞ思ひ給へる」といへば、翁、「それは兵家利害の僉議よりいふにやあらん。士の道はさにはあらず。いかにとなれば、士は義理より大切なるはなし。其次には命を大切とし、金銀は又その次なり。此二つも大切なる物故に、やゝもすれば生死の場金銀の事に臨みては、かの義理といふおもき物を取違ふるぞかし。よりて貪レ生貪レ利の事をば、心にとゞめじ口にもいはじと心づかひするは、士は假りにも利欲に近づかじとなり。惣じて利欲といふは、金銀の欲にかぎらず、身の勝手を思ふは皆利欲なり。されば、命は金銀より大切なる物にあらずや。勝手をもていはゞ、命をいくるばかり勝手によき事はなけれども、義に臨みては、塵芥よりも輕んずるは士の道なり。

牙儈―仲買人
内子―卿大夫の正妻
ひずかし―心のゆがみねぢけたるをいふ

いはんや金銀においてをや。もとより大切のものなれば、常に身の養生をつゝしみ、金銀もあらく費し用ひざるはさもあるべき事なり。さればとて、命惜し金銀たつとしと心におもひ口にもいふは、商賈などには似合ひたるべし、士にはあるまじき事なり。むかし小説の書にて見侍る。唐の柳公權が家に久しく召仕へし婢ありしが、柳家をいでて揚巨源が家に仕へしに、夫人絹を買ふとて、自ら牙儈と價の高下を議せしを見て、俄に驚疾を得て揚家を謝し去りけり。その後人にむかひて、「われ多年柳家にありしに、終に内子の自ら物をかひ物の價を問はれしことをきかず。しかるに夫人牙儈と價を議せられしを見ければ、氣も消ぬやうに覺えて、驚疾を得たり」といひしとなり。柳氏はさすが唐の世族にて、家風いさぎよく、新進の家とは格別の事なんありける。されば中唐のころにはめづらしき事なればこそ、かく記し置けるならし。我朝は君子國と稱せらるゝしるしにや、中古までは風俗淳素にして、貨利にひずかしからず、義理を堅く守るとにはなけれども、おのづから廉恥の風もほろびずなんありける。武家の世になりて、風俗大きに變ずといへども、士たる者は、金銀の事をば常にいろはずして、しかも儉素質直にて、いさゝか驕なかりき。近き頃までもしかなり。ある老人の物がたりに、朝鮮陣の時、日根野備中守朝鮮へ使に行きしが、家貧にして支度なりがたかりければ、三好新右衛門をもつて、黒田如水より銀百枚をかりける。歸朝して後、新右衛門同道して如水のがり行きて一禮をいひしに、如水對面して、しばらくありて人をよびて、「さきに貰ひし鯛を三枚におろして、其骨をたゞ今吸物にして出せ」といふを兩人聞きて、心に不足しけるに、酒をはりて、三好銀を取り出して返ししかば、如水、「最初より貸しぬる心にてはなし。合力する心なり」とて、再三しひてかへせども受取らずしてやみぬ。飲食の事には、もらひし鯛をもみだりにもちひず、しかも客のまへにていうて、いふまじき事とも思ひよらず。さて朋友急用の爲には、銀百枚を惜しむべしともおもはず。是等の事にても、其時代の士の風俗儉素質直にして、しかも義を忘れず、心事潔白なることを知るべし。翁わかき時の事をおもふに、其頃までも、年わかき人などは物の直段の事をば假りにも口にいはず、女色の咄をきゝては赤面する人もありけり。大かたは古戰軍術の事を聞きてよろこび、君父への奉公、武士の覺悟などを僉議せしぞかし。當代わかき人の出合ふをきくに、多くは勝手損得のはなし、又は女色遊興の事を互に語りあうて、一座の慰とせざるはなし。此五六十年前とは、格別の風にこそ成行きけれ。又其ころ、加賀に青地

采女といひし士あり。其子藏人といひし者は、翁が亡友なり。其父采女が子弟にいひしとて、「人と物をかへて興とする事、世にある事なれども、汝等必ずすべからず。替負けて彼に得あればよし、もしかへ勝ちて我に得ある時、碁象棋に勝ちたるとはちがひ、心すみせぬものなり」と語りしこそ、心慴く覺えしか。當世は人と物をかへては、かへかちたりとよろこび、又はたかき物をいやしく買得て、ほり出したるなど、といふは、商賈のわざにして、士たるもののすまじくいふまじきことなり。また先年新井筑後守がいひしを覺え侍る。「人の噂をいふとて、吝き人とはいふまじきことなり。金銀にさへしはければ、命にはいよ〳〵しはかるべしとしれたり。しかれば、臆病の唐名ときこゆべし。侍講のとき文廟へも申上げける」とて語りし、尤道理ある事なり。されば、士は一言の上にも心をつけて、利欲、臆病、好色等の筋の事をいはず、口に無二擇言一をこそまたなく見事なるともいふべけれ。かの世儒のいふ文雅風流も、こゝにもとめば、道に中らずといふとも遠からじ。今身の言行をすてゝ徒に文辭の末にもとめて、聖賢の道こゝにありとす。これその所レ好に僻して、自ら道に背くことを知らざるなり。しかしながら、正學をみだり、後生を誤るこそなけかしけれ。詩にいはく、「誰生二厲階一至二今爲一梗」こ

新井筑後守—新井白石

文廟—六代將軍德川家宣

の謂なり」

烏羽玉—「やみ」の枕詞

白玉京—白玉を以て飾りたるみやこ卽白玉樓のある都などの意なるべし白玉樓のことは李

○一日の澤

冬もやう〳〵深くなりけるに、暮行く雲のけしきすさまじく、雪もちら〳〵打ちちりしが、とかくする程に、日もすでにくれはてゝ、烏羽玉の闇さへいとどうとまし。かくて夜もふけ行くまゝに、夜寒身にしみ渡り、暫しもいねやらで、丑滿ばかりになりぬるに、鐘のこゑも聞えず、鷄の音もせで、何となく靜になるやうに覺えしが、いつ明るともなく、窓のしらみあひける程に、家にありし童よびおこして、閨の戸あけさすれば、夜のまに雪いとおもしろうふりつみて、庭の草木も花さき、にはかに春來るこゝちし、四の山の端も皆白妙になりて、人間世界、さながら天上の白玉京かとあやまたるゝ折しも、あたり近き池の水鳥の、聲々になくも、程なければきこゆ。さこそ波の浮寢の寒からめと、それさへ哀を添へて、さても心あらん友もがなと、人ゆかしう思ひし折ふし、いつも問ひかはす人の許よりとて、文もて來ぬ。急ぎ開きて見れば、

めづらしき雪にて侍る。いかゞ見給ふやらん。さては此雪に、御起ふしも覺束なく

長吉の故事に基く

おもひ侍る。

となんかきけるにつけて、かの兼好が、雪のいと面白う降りたりし朝、人の許いふべき事ありて文やるとて、雪の事何ともいはざりしに、此雪如何見ると一筆いはぬとて、口惜しき事といひこせし事をふと思出て、是は彼方よりかく氣を付ていひこせしを、此方より返事なくば、恨みやせんと思ひしまゝに、使暫しまたせて、返事かきて奥に、

空にふる雪はこずゑの花なれや散るか咲くかとあやまたれける

とかきて、さて、「けふはひとへにさびしくくらし侍る。思ふどちいひあはせて來られよかし。それこそ誠の志と思ふべけれ」といひやりけり。かくてやゝ日たくる程になりて、門をたゝく音しけり。人してあけさすれば、かの文こせし人、例の人々伴なひて來にけり。形のごとく主設して、翁うれしく、さむさ忘れてにじり出で、かたみに語りあひしが、酒煖めて出しけるに、衆客もみな醉を勸めて、清談いとこゝろよく見えし。翁、

あるじする心ばかりはこゆるぎのいそぎありくにおとらめや君

「われら事足たち侍らねば、御爲にさかなもとめてありくことはかなひ侍らねども、心ばかりはそれにもおとり候まじ」と、戯ごとなどいひて程を經けるに、衆客、「けふの雪には、翁の、から歌なくてやはあるべき」とて、翁に簡を授けしに、翁、「いやとよ、むかしは雪月花の折にあへば、はや詩の思ひよりも候ひしが、今は老いほれて、其心もさふらはず。詩も久しくすてゝ作らねば、口澁りていひ出づべき事も覺えず。されど、けふの御尋ね忘れがたく侍るまゝ、いかさまにも申してこそ見め」とて、しばし打ち案じて、

安道子猷―晉の王子猷親友戴安道を雪夜に訪れし故事

家住駿臺下　門臨萬里流　隱雲平野樹　棹雪遠江舟
吾老愧安道　客來皆子猷　草堂偏閒寂　喜共故人遊

「もとより翁が家は、地たかく長流に俯し候へども、門はながれに臨まず候。然るに今の詩に「門臨萬里流」といへるは、そらごとにちかく候へども、言葉つゞきよく、句勢あるやうにと思ふより、かく申すにて候。韋蘇州が「野渡無人舟自横」といひし類にて候。されば、詩は詞に泥みて心ならず不實になり候故に、古より、篤實なる人は、多くは、詩を好まぬも理にて候。たゞし是程の事は、詩にはゆるし申すにてもあるべく候。常の言語に此くせ出で申さぬやうに、意得べき事にて候。さらば各も一首賦せられ候へ」とて、筆硯を授けければ、一人、

冬天衝雪到君家　此日倚欄眺望賒　兩岸水寒如夾鏡　千林樹合似開茶

又ひとり、

天從雪後海寰新　積素凝華先入春　清白由來誰相似　草堂高臥是何人

又ひとり、

欲問駿臺臨雪時。行吟招隱太冲詩　古人高義今何在　此地無君誰與期

又ひとり、前の翁が詩の韻を和して、

高堂幽僻地　積雪暗長流　歸騎迷來路　漁人滯去舟
行藏論古道　經濟問嘉猶　寄語世間客　誰知塵外遊

夫より迭に唱和しける。かくて酒酣になる程に、翁も今少したうべんとてのまんとしけるが、座中に世に行はるゝ散樂の謠によき人ありしに、翁其人に一曲と勸めしかば、肩上の笠には無影の月をかたぶけ、擔頭のしばには不香の花を手折りつゝと謠ひ出しけるを、外の客もつけて謠ひける。翁打ちきゝて、「折からよくこそ思ひよられ候へ。山家雪中の景氣を見るやうに覺え侍る」とて、硯引きよせて、

六出花埋三徑平　忽聞白雪入歌聲　市中賒酒酒家近　堂上開書書帙清
玉樹玲瓏四隣合　銀沙的皪一川明　幽棲何減山陰興　莫厭留談到日傾

散樂—サルガクと讀むを可とすこは能の意なり

字眼—文字中の眼目となるもの

大蜡の祭—支那にて、十二月に萬神を饗する祭

翁諸客にいひけるは、「律詩は文字のもちひやうこそ簡要にて候へ。たとひ聞え候うても、相應ずると相應ぜぬとあり。又一字にて景趣を生ずると意味なきとあり。自作の詩にて申し候は如何に候へども、しばらく愚意を申し候ふべし。此詩、第一句の平字かふべからず。雪深くして三徑のきはもなく、ひとつにふり埋みし體にて候。第二句の入字、字眼とも申すべし。諸君の謠を白雪の曲に比し、けふの雪の聲に入ると申す所に意趣あるにて候。第五句の合字は、雪にて四隣の樹のひとつになるを申すにて候。第六句の明字は、上に雪を銀沙に比し候故、的皪には明字的實にて、力あるやうに覺え候。いづれも心をつけたる字にて候。惣じて、律詩は韻字の取りやうにて、作者の品は其まゝ知れ申すものにて候。世間の詩を作り申す者、一兩句を得ては韻になづみ、其韻を搜し候うて其一句をすきとかへ申し候歟、又は其韻をすてゝ、他韻にて作るべき事にて候。唐詩の強ひてもちひ候故、さながら韻に苦み候と知れて見ぐるしく候。其韻に相應の字なくば、韻の用ひやうをよく考へて見るべし。是唐詩を學ぶ簡要のことなり。思過半とも申すべし。さて詩の僉議は是までにて候。今日の會ぞめづらしく覺え侍る。むかし子貢大蜡の祭に會飲せられしを、孔子「樂しきか」と問給ひしに、「一鄕の人酒に醉ひて狂するが

ごとし。これを見てなにのたのしき事をしらず」と申されしを、「百日の蜡、一日の澤爾が所ㇾ知にあらず」と仰せられしと家語に見えたり。民ども四時稼穡を勤めて、歳終に一日飲酒宴樂して百日の勞を忘る、是先王の遺澤なり。民のながく勤勞に服して、相ともに君澤に樂しむを觀ては、君子も同じく樂む心あるべきを、子貢のそこに心づかれぬをかく宣ふなるべし。しかれば、翁も諸君も諸ともに飲酒宴樂して、一日の餘暇を樂むは、太平の餘澤なり。幸に時も蜡のころにあたれば、今日の會をばいはゆる一日の澤とも申すべし。我等ごときは、民のごとく稼穡を勸むる事はなくとも、各學問をつとめ忠信を脩め、仁義の道を世に明にして、風教を助くることを忘るべからず。是太平の澤に答揚して、不報の報と申すべし。何ぞ必ずしも官にをり職に住するをのみ國家に報ずといはんや。

尤物―すぐれてよきもの

○尤物人を移す

翁弱冠のころにかあらん、左傳を讀みて、叔向が母の、「夫有ㇾ尤物一足ㇾ以移ㇾ人。苟非ㇾ德義一則必有ㇾ禍」といふに至つて、竦然として戒懼の心にたへざりき。誠に龜鑑の名言といふべし。されば、德義の移ㇾ人は、伯夷が清のごとく、柳下惠が和のごとし。天地の間の尤物なり。こゝをもて、伯夷が風をきく者は、頑夫も廉に懦夫も志を立つる事あり。柳下惠が風をきくものは、鄙夫も寛に薄夫も敦し、人を移すにあらずや。其極をいはゞ、舜の韶、孔子の聖、天地の間の大尤物なり。孔子韶を聞き給ひて、三月肉味を忘るゝに至り、七十子終ㇾ身まで親炙して去ざるに至る。又人を移すの甚しきといふべし。其外、忠臣孝子高潔義烈の行の人を感慕せしむるも、皆其類なり。およそ德義の類は、大に移せば大によし。小しき移せば小しきよし。何の禍かあらん。もし德義の類にあらずして人を移すは、儀狄が酒、南威が色はいふに及ばず、其外錦繡珠玉珍禽奇獸に至るまで、人を移すにたるものはみな尤物なり。その爲に移さるれば、大なるは必ず身を殺し國を滅ぼし、小なるは必ず名を辱しめ咎を招く。古今歴々として考ふべし。詩文書札に至りては、儒者の事において近うして、又闕くべからず。然れども、李杜摩詰が詩、韓歐東坡が文、二王の書のごときは、是も又古今の尤物といふべし。各一種の人を移すにたゝものあり。しかも亦外物にして德義の類にあらず。この故に、古より詩賦を好み文章を好むの人、多く一心を投じ外事をすてゝ、こゝに寢處せざるはな

摩詰―王維

雕鏤―文を派手にかざるにいふ

し。やゝ實に近きは、言論の雄偉を尙ぶに過ぎず。其文に馳するは、雕鏤の美巧を衒ふに至る。身において何の益かあらん。道においてなにの得ることかあらん。いづれも玩物喪志をいふべし。かの好書ものは、最下れり。しかるに、唐の太宗の明をもて、遺命して蘭亭の本を棺に入れて、自ら隨へるを觀るに、其移人こと詩賦文章よりも甚し。これによれば、詩賦文章文字の類も、尤物の移人ものなり。聲色の移人とは違ひ、必ずしも有禍といふにはあらねども、人をして虛文にはせ、實用を忘れしむ。道に害なしといふべからず。翁老泉が高祖を論ずる意を取りて、文章を論じておもへらく、學者の詩賦文章におけるは、醫者の毒藥を用ふるがごとくなるべし。其毒をして治病に足りて、人を殺すに至らざらしむ。されば詩懷に足り、文章は辭達するに取りて、ふかく好まざるをよしとす。もし深く好まば、必ず其毒に中るべし。それに詩賦文章も一難事なり。今不逮の材をもて精しうせんとせば、必ず歲月を費して、學問の功を妨ぐべし。韓愈が文を學びし事を自ら叙るを見るに、處若忘。行若遺。儼乎其若思。茫乎其若迷」いへり。翁こゝにおいて、嘆息して、ふかく韓愈が爲にをしまざる事を得ず。嗚呼韓愈が材をもて、心を道學に用ふる事かくのごとくせば、

不逮の材をもて―古人におよび難き劣れる材を以て

聖賢に至るも難かるべきにあらず。たゞその學一生文辭の間にとどまりて、已に實德の驗を見ざりし程に、居恒飲博過從の樂に日を曠うし、潮州に流されし時は、大顚に動かされしぞかし。是其根源をたづぬるに、文章の爲に誤らるゝ故にて侍る。それにつけても、程朱の學者の詩文を好むをいましめられしも、あながちに詩文を禁絶せよとにもあらず、詩文の移人ことをおそれよとなり。是にて程朱道の爲に慮る事の遠きを、諸君よく思ひ知り給へ」といへば、諸客、「けふは終日觴詠のあそびに陪從し、又翁の訓戒を承れば、誠に樂みて淫せずとも申すべし。詩にいはく「好樂無荒。良士瞿々」今日の謂にてこそ候へ。我等とも此儘にて學問いたし候はゞ、庶幾は宴安の鴆毒を懷ふには至るまじく候。是皆翁の賜にて候」とて、各恭謝の體に見えしが、冬日の習にて、程なくたそがれ時になりしかば、諸ともに翁にいとまをこひてまかりけるが、一人門を出るとて、

暮下駿臺一雪滿蹊　漫々平白失東西
一條正路依然在　知我同行醉不迷

かく自詠しけるを、かたへより吟賞して、「此詩有心かなや」といふこゝろして、各己が

觴詠―酒盛をしてうたひあそぶこと

家路にまかりぬ。

○年にはづかし

朔風觱發として日夜に冽しく、寒氣もいやましなりしかば、講會もしばらくやみて、後日を期せんといふ程こそあれ、今年もおほえずはや暮れにけり。例の人々、翁が起居を問むとて來りしに、翁むかひて、「このごろは、年の暮とて、世上はさぞいそがはしくこそ候はめ。しかるに、市朝に住みながら、翁が草堂ほどしづかなる事は侍らじ。蕭然たる環堵の中に、いつとなく病に臥して日をおくり侍れば、月のすぎ年の暮るゝをも覺え侍らず。されど、歳月の逝くはをしむにたらず。たゞ悲しむべきは、年ごろ學びし甲斐もなく、むなしく不德にて身老い年積りて、此まゝ朽果てむこそ、今更悔いてもあまりある事にて候へ」とて、

なにをして身のいたづらに老いぬらんとしのおもはん事もはづかし

といふ古歌を打ちずんじて、「年にこそはぢかはしく候へ」といへば、諸客聞きて、「むかし衛武公、行年九十五にて、猶箴儆於國ていはく、「苟在朝者無謂我老耄而舍我。必恭恪於朝夕以交戒我」とて、抑戒の詩を作りて自儆められしとなり。今翁、高年なりといへども、いまだ武公の年に及ばず、今より期頤のよはひを享けて、日に德にすゝまれ候やうにとこそ祝し候へ。諸弟子久しく師門に遊び候へども、今に吳下の阿蒙にて、むかしにかはりたる事もなく、多年の御教育をむなしういたし候事、材質の庸下なる故とは申しながら、學文のつとめざるによれば、翁のおしはかりもはづかしく、汗顏にたへぬ事にて候。されど、御善誘によりて、此一兩年はすこし道に見つけたる所も出來たるやうに候へば、此後は相ともに勉強して、日夜進益をもとめんとこそ存じ候へ。しからば、道においてなどか尺寸の効を得ざるべき。いよ〳〵翁の策勵を仰ぎ候」といへば、翁聞きて、「それは奇特なる御覺悟ながら、さもあるべき事にて候。さて翁が先各へ申し謝すべきは、衛の武公の事をもて翁をいましめらるゝこそ、永く佩服して忘れがたく覺え侍れ。もとより、武公の賢などか企及ぶべきにあらねども、其老いて自儆められしは、およそ年老いたる人の師法とすべき事にて候。翁かねて春秋列國の人物を論じておもへらく、春秋の時、衛において二人の大賢あり。諸侯には衛の武公、大夫には蘧伯玉、此二賢は、道を見る事眞に、學を好むこと篤し。皆聖人の徒なり。伯玉が

觱發—詩經の語、風の寒きさまむかひて—「むかへて」歟

環堵—禮記の語、方一丈の小室

期頤—百歳

吳下の阿蒙—何時までも學識のすすまぬ意

蘧伯玉—名は瑗、衛の

大夫、孔子を學び一生修德に心がけし人

寡過を欲すれども未能とし、五十にして四十九年の非をしり、六十にして六十化すといへるも、武公の自儆めて我過を聞かむ事を求むると前後相比して、自治誠切なる事一に出るがごとし。孔門七十子の中に求むるとも、顏曾の外には多く得やすからざるまじ、たゞに列國君太夫の賢といふのみにあらず。さればにや、その成德の篤實光輝、こゝに至りて今も猶人をして千載の下に興起せしむるぞかし。翁老いたりといへども、今より謹みて諸君の祝規を奉じて、殘生を終らむとこそおもひ侍れ。諸君のごときは、春秋に富み材力に足る。もし懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。

得やすからざるまじ—得やすかるまじの誤ならん

春秋に富み—行末長く

然れども歲月は恃むにたらず、材力は多とするにたらず。たゞ孳々汲々として勉めて不息にありぬべし。もし悠々として日を涉り、一旦年老い齡傾きて後、日ごろの懈を思ひいでて、いかに悔ゆともなにの益かあるべき。即今翁が身の上にて候。されば古詩にも、「少壯不努力、老大徒傷悲」すといひ、陶淵明も、「盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人」といへば、古人も此感懷を同じうすとぞ見えし。是等の詩句時々吟詠して、勇進の志を振起すべし。又世に傳る朱文公の勸學の文に、

朱文公—朱熹

勿謂今日不學而有來日、勿謂今年不學而有來年、日月逝矣。歲不我延、嗚呼老矣。是誰之愆。

少作—年若き時の作

此文本集に見えず。朱子家訓不自棄の文などの類にて、朱子の少作か、又は後人の擬作にて、名を朱子に託するにてもあらんか。よし誰の作にもせよ、言簡にして意も明白なり。折ふし打ちずんじて、自警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは、陶侃が語なり。「大禹聖人乃惜寸陰、至衆人當惜分陰、豈可佚遊荒廢。生無益於時、死無聞於後、是自棄也」といへるこそ、學者立志の法とすべし。前にいふ淵明が詩も、曩祖以來の家法にこそと思ひ侍る。およそ人と生れて學に志ありといふきはの、生れて時に益なく死して後に聞ゆる事なく、草木と同じく朽果てばいと口惜しかるべきことなり。されば、諸君も此陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。但學は勇進をよろこぶといへども、又急迫なるをきらひ侍る。とかく一生こゝを離れぬ事にて候へば、急迫にして求むべきにあらず。唯懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優遊涵泳せられば、久しうしておのづから進益あるべし。翁むかし加賀に在りし時、士族の中に紹鷗、利休が風流を慕つて、茶湯を好むものあり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂としけるを、同行の人見て「いかにすけばとて

涵泳—全く其ものに身をゆだねること

道中にてはやめよかし」といへば、其人いふは、「道中の日とて一生の外にあらばこそ。是も一生の日かずの内なれば、わが茶湯をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異ならん」とて、其後もやめざりき。學者の道に志すも、此人の茶湯をこのむがごとくなるべし。もとより道は須臾も離るべからざれば、一生の間道を行ふ日にあらざるはなく、あふさきるさ道のある所にあらざるはなし。しかるを急迫にしてもとめば、たとひ僅々として有得とも、皮膚の間にてやみなん。いかでか其、戚を嚌んで滋味に飫くことあるべき。況や、急迫なれば、久しきにたへぬ物ぞかし。いまだ日至の時に及ばずして　やがて倦怠するに至りなん。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす。たゞ急にして迫切なるをおそる。義理は涵泳を貴ぶ。緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進脩の道において、緩急相得て背かざるに近かるべし。程子のいはく志道懇切固是誠意。若迫切不中理。則反爲不誠」又曰。「人謂要力行。亦只是淺近語。這一點意氣能得幾時了」諸君程子の言を見よ。翁が說あたらずといふとも遠からじ」

黃金の術―神仙金丹の術、丹砂を化して黃金とするなり

意は理想に達し難きをいふ

董生―董仲舒春秋を治め、毎に帷を下して講話す、武帝に重用せらる

邯鄲の步を學ぶ―己が本分をすて

○壬子試筆の詞

日月迭に移つて、白駒の隙過ぎやすく、衰病日に侵して、黃金の術成りがたし。されば、犬馬のよはひ是までであるべしとも思はざりしが、いつしか老の波より來て、ことしは七十あまり五つの春にもなりぬ。あまさへちかきころより身に痿疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめるまゝ、昔の董生を學ぶとにはあらねども、此三とせ春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢につたふ鶯の音に殘りの夢をさまし、枕にかをる梅が香に、過ぎしむかしをしのぶばかりになんありける。しかはあれど、幸にわかかりし時より學びの窓に年を經る甲斐ありて、程朱の道にしたがひて、鄒魯の風をたづね、韓歐が文をこのみて、邯鄲の步を學ぶにぞ、老のね覺も慰みぬべし。さても多くの年月を經て、世のうつりかはる有樣を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはん、現とやいはん。誠に富貴は浮べる雲のごとく、禍福は糾へる繩のごとしといへるに、なにのたがふ事あるべき。中にたゞ吾聖人の建て給へる三綱五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、是ばかりはかはることあるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきは

て他の行爲に倣ひ兩ながら失ふにいふ

蚍蜉の樹を撼し云々―蚍蜉は蟻の大なるもの、精衞は小鳥、意は己の力も計らずに及ばぬ事に勞するなりいふ

うけられれ―原本「うけらぬ」とあり、意により今假に改む

此道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人々義理にうとく、利欲にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せんとすとも、わが力およぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼し、精衞が海を塡めむに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも吾儒分内の事なれば、是を度外に置くべきにもあらず。いかなれば世に老師宿儒と稱する人の、好みて異說を肆にし、又は他道を雜へて、仁義五常の沙汰をばよそにするこそうけられね。たゞ務めて新奇を競つて、俗耳を悅ばしめ、時好に投ずるなるべし。いと口惜しき事なり。古人のいはゆる阿世曲學とは是等をいふなるべし。よし人はさもあらばあれ、縱風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身ひとつはもとのごとく、仁義の道を守りつゝ、前脩の模範を失はじと思ふこそ、責て儒となりししるしともいふべけれ。しかるに、あら玉の春の初とて、人は皆己が志身の福を萬代といはふ中に、我はたゞ五常の道に心をよせて、いつもかはらず目出たき物は此道なりとて、かくなん筆をこゝろむるならし。

此春もかはらでゆかむ七十にあまる五つの道をたづねて

此筆記は、去年辛亥のとし春より冬に至る迄、諸生と語りし雜話を書集むとて、ことし壬子の春より筆を起して、秋に至りて稿を脫しぬ。もとよりいやしき蜑のもくづながら、もし朽ちずして吾黨にながく傳はりなば、後學の身を省る萬一の助にもならんかし。よりて、ことし試毫の言葉を末に附して、終りて復始まり、無窮におよぶの意をしめしけるとぞ。享保壬子のとし冬十月鳩巢しるす。

駿臺雜話 終

いひたき事いはぬは云々―兼好法師の徒然草にあり

ひとりごちて―獨り言

こしをれの歌―拙き歌なり

思惟―思ひ考ふ

獨語

太宰春臺著

一いひたき事いはぬは、腹ふくるゝわざなりと、昔の人の言ひしは誠なり。さればとて、思ふ事いふべき人にあらねば、得いはず。いはぬは今も腹ふくるめれば、唯空むきてひとりごちて、腹をすかすより外の事なし。世に和歌を好む人多けれども、和歌の道を知れる人こそなけれ。三十一字をつらぬる人は多けれども、萬葉集、古今集に入るべき程の歌を詠み出す人をいまだ聞かず。我父母ともに和歌を好みし故に、八九歳の比より三十一字をつらぬるすべを知り、十歳ばかりより十二三歳迄に、こしをれの歌凡三四百首もよみたり。師もなく友もなければ、歌よみたればとて、人に見する事もなく、書付けて藏し置きたるのみなり。其時の心に、歌はよみうべきものとのみ思へり。十四五歳の時、始めて詩といふ物を學びて、漸く七言絶句などを綴るすべを知れり。其時愚心ひそかに思惟せしは、和歌を學びて縱ひ上手に成りたりとも、公家の

天性—生れつき
覺悟—さとり
子細—わけ
風體—すがた

人々を超ゆる事なるまじければ、いつも公家の下にかゞみなん事口惜し。詩は公家の政を請くまじければ、上手にさへなりなば、公家をも弟子にすべし。此道におきては、天下におそるゝ所有るまじ。いざ歌詠む事をやめて、詩作る事を習はばやと思ひ定めて、書付け置きたる和歌の反古をことゞく焚きすてゝ、一首も殘しとどめず。夫より詩を好みて、ひたすら學習し、二十年を經て、漸く詩の道を明らめたり。天性不才なる故に、上手には得ならねども、詩の道を覺悟したる事は、誰にもまけじとぞおもふ。此道を以て考ふれば、和歌の道も明かに知らる。凡唐土と我國と風俗同じからずといへども、詩と歌との道ばかり其理全く同じ。其子細は、異國も我國も、古も今も、人情は異ならざるに、詩も歌も心の聲にて、性情を吟詠する物なれば、唐と大和と詞のかはるのみにて、性情を吟詠する事は少しもかはる事なし。詩と歌と其趣の同じきは此故なり。然るに、異國も我國も人の詞は時世につきてかはる故に、詩も歌も時世にしたがひて風體かはるなり。されば詩も歌も末の世になりては、むかしにおとるは風體のかはりにて、風體のかはりは其詞のかはりたるなり。此理を覺悟して、能々古にさかのぼりて古の風體を考へ、古の詞を取り用ふれば、今の人にても、いにしへの

見えわく—見分け得る
はらめる—ふくめる
しもつかた—以下吉備公—吉備眞備
あをうなはらの歌—有名なる「あまの原ふりさけ見れば云々」の歌。初句を「天の原」とせ

人にことならぬやうになるなり。詩の道かくのごとし。此理を以ておしはかれば、和歌の道も亦かくのごとくなるべし。我和歌を學ばねば詩の道をもつて考ふるに、今の世に居て、古におとらぬ歌をも詠出だすべきことは、さのみ難きことにもあらじ。詩を見たる眼にて歌を見れば、歌の位も姿も明らかに見えわくなり。萬葉集の歌は風雅なり。漢魏の古詩迄を兼ねて、稍盛唐の詩をはらめる物也。古今集の歌は、正しく盛唐の詩なり。後撰、拾遺の二集は、盛唐に初唐の詩をまじへたる物なり。後拾遺より新古今迄は、中唐晩唐の詩に、宋の詩を交へたる物なり。新勅撰よりしもつかたは、いふに足らず。和漢の時代を考ふるに、我國元正、聖武、孝謙の御宇、正しく唐の玄宗の開元、天寶の時にあたる。其頃阿部仲麻呂、吉備公のごとき人々入唐して、盛唐の禮樂文章を學び歸り、我國に弘めし故に、我國の歌も自然と唐詩の風體に似たり。仲麻呂が明州にてよみたりといふ、あをうなばらの歌は、盛唐の詩の佳境にて、李太白が峨眉山月の詩と同格なるべし。定家卿「天の原」と改められしは口惜し。桓武、平城、嵯峨の時に及びては、唐の大曆以後、中唐の世にあたりて、唐詩は格調すこしくだりぬれども、我國の歌は猶さかりなり。白樂天が詩は唐の極惡道なるを、白氏文集我が

しは、後に見ゆる如く百首を撰ぶ時、定家の改めたるなり

峨眉山月の詩―峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流、夜發清溪向三峽、思君不見下渝州

三代集―古今集、後撰集、拾遺集

異國―支那をさす

道學―道德

國に渡り、菅相公甚だ是れを好み給ひけるとかや。夫より公家の人々、皆々樂天が詩をおもしろき事とおもひて、其風調を和歌に移されし程に、其後の歌は三代集の體を失へり。又源平の亂の時、異國は宋の代にて、程氏、朱氏の道學興りて詩の道おとろふ。我國にも、俊成定家の歌道行はれて、萬葉集、古今集の風體衰へたり。俊成卿は天臺の佛法をまなびて、一心三觀の理を歌道の極意とせられたり。其子定家も亦其家訓を請けられし故にや、詠出ださるゝ歌、皆理窟にて、くだ〳〵敷事多かり。異國も我國も同時に詩歌の道衰へたるは、誠に氣運の然らしむるゆゑか、悲しき事なり。凡我國の歌は、定家卿より衰へたりと思ふ。爲家卿は又定家卿よりもおとられたるよし、然るに其後の人、京極家の教を尊信して、今の世までも堅く守り、金科玉條と心得るは口惜しき事、歌道の一大厄と云ふべし。今の人、書をよむ程にては、必ず公家の中の名家なる人を師として學ぶ、是大なる誤なり。古より、惣じて位高き人にものの上手はなき物にて、上手はいつも賤しきものに出來るなり。歌の道にても、人麻呂、赤人は貴人にあらず。古今集を撰びたる人々にも、友則一人、大内記にて五位の官人なり。貫之は又其下と見ゆ。躬恒は甲斐の目、忠岑は右衛門府生なれば。皆地下の賤

の學問

極意―奥義に同じ

金科玉條―科條はおきて、法律。金玉は美稱

貫之―木工頭なりき

府生―右衛門府の下官

地下―堂上に對して五位以下の昇殿を許されざる人をいふ

愚意に思ふに―一本「愚思ふに」

き者どもなり。此輩皆歌道に達せし故に、撰集の勅を請けたり。歌道の盛んなりし時だに、高位の人には達者希なり。況や、今の世歌道衰微の時に、公家の高位の人に、何として上手あるべきや。我に眼なきゆゑに、公家の名家にて歌所と定められたる人をば、必ず上手ぞと思ひて、其添削批判を受くるは、淺ましき事なり。然れども、名利は悲しきものにて、譽を當時にとらんとおもふより、公家の名家の稱美を得て、世にほこらんとはかるなり。愚意に思ふに、歌道は師に付いて學ぶに及ぶまじ。但歌道の書は、傳受なくては讀みがたきものなれば、其事心得たる人にしたがひて書をば讀み習ふべし。已に書を讀み習ひたる上は、萬葉集より三代集までを、くり返し千遍讀みなば、おほかた諳んずべし。詞をそらんじて、朝夕諷詠すれば、自然に風調をも悟るなり。其間に古今の諸家の歌學の書を讀まば、法をも知るべし。其上にては、花を見月に對して、人情興感の事ある時、自然に三十一字をつらね出すべし。是眞の和歌にて、上代の人の歌は、皆此境に至りて詠み出したるものなり。上代の人は、自然の風俗にて歌を詠む故に、師に學びたる人はなし。されば賤の男賤の女も皆能く歌を詠む後世は風俗移りかはり、人の詞も古におよばぬゆゑに、今の人は必ず三代集より、

賤の男賤の女―下級の賤しき男女
上つかた―上代
思量―思ひ考ふること
いたりぬべし―一本「足りぬべし」
わが庵の歌―わが庵は都のたつみしかぞすむ世を宇治山と人はいふなり
身の後に―身後。死

上つかたの歌を、數千首そらんじたる上にて。好き歌をばよみ得べし。扨詠みたる歌を、必ず人にみすべしとにもあらず。まして公家の人々に見せて、稱美を得て名譽を求むべきにもあらず。我が心にて幾度も玩味諷詠し、古歌に引きくらべて、其似たると似ざるとの所を思量せば、何ぞよしあしの見えわからざることのあらんや。かくのごとくにして、歌數多く讀まば、其中に一首二首、古人におとらぬ歌、などかなからん。身一生に勝れたる歌一二首ありて、人にも稱せられなば、不朽にいたりぬべし。喜撰法師が、我が庵はの歌にて、名を千歳に遺したるを見るべし。さりながら、當時の人に知られんことを求めず、詠みたる程の歌を書きしるして、知りたる人一人二人にも遺しおきたらんに、當時は取り囃す人なくとも、百年の後に貫之、躬恒なる人あらば必ず取上ぐべきなり。凡そ人の德行も才藝も、當時には知る人なくて、身の後に、世上の論さだまりて、信ずる人も譽る人もあるものなり。然るをおのが一生の内に知られんとする故に、きたなき心起りて、大事をあやまる。これ其志の高からぬなり。昔虞仲翔は、「天下に一人我を知る人あれば恨ざるに足りぬ」といひ、老子は、「我を知る者稀なればたふとし」といへり。此位にたてらば、ほまれを當時に求むる心やみぬ

足りぬ―一本「足れり」
一本、「稀なれば」の下に「我」あり
賤山がつ―山里に住む杣人など賤民の稱
服部子遷―名は元喬南郭と號し春臺と同じく徂徠の門人にして詩に高名なり
士庶人―一般の人々の事なり

べし。和歌の道のみにかぎらず、萬の事皆是に同じ。我詩の道を以て推して歌の道を知れることかくのごとし。詩は異國の詞なり、歌は我國の詞なり、詩にくらぶれば、甚だやすき事なり。學びやうのあしきと、志を立つる事の高からぬにて、古の賤山がつにも及ばぬは、いと口惜しき事ならずや。吾が友服部氏子遷は、和歌の道を知りて後に詩を學び、詩の道をさとりて遂に上手の名を得たり。されば今公家の人々に、我が輩のいふ詩の道を說き聞かせたく思ふなり。此道を聞きて悟を開き、我輩の詩を學ぶごとくに和歌を學び給はゞ、必ず古人に及ぶべし。さもあらば、おほくの人の中に傑出の人などか出來ざらん。今公家の人々、和歌の道を古にかへすべき事を思はずして、五百年來定家卿の教を守りて、道の衰へゆく事を知らず、至りて歎かはしき事なり。今の士庶人、我此說を信受して、詩を學ぶ道を以て和歌を學び、一己の精力にて歌道を悟り、上代の歌に似たるばかりの歌をよみ置きたらんに、身の後に知音ありて、必ずとりあぐべし。其時、此歌は師範なく、公家の人に學ばず、自力にて讀みたりとて、いやしめすつる事はある間敷なり。陽春白雪の曲は和するものすくなし、知音の士にあらざれば、是を賞する事なし。今の人はたゞ下里巴人の曲をうたひて、和するも

知音―心の友、よく我を知る人
陽春白雪の曲―詩詞の高き調ないふ文選に見ゆ
巴里下人の曲―通俗の下卑たる調
月やあらぬ歌―月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもとの身にして
つひに行くの歌―つひに行く道とは兼て聞きしかど昨日今日とは思はざりしをわすれては云々―忘れては夢かとぞおもふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは
毛詩―詩經の別名なり
嫋々―風の動く貌
萋々―草茂る貌
虚僞―いつはり
無病呻吟―

のおほきをほまれとする故なり。わが先師徂徠先生いはく、「異國とわが國と風俗大きに異なる中に、唯詩と歌との道ばかり、詞のことなるのみにて、其趣全くおなじ。人情おなじき故なり」又いはく、「和歌は人麻呂、赤人の外、在原業平を上手といふべし。伊勢物語に載せたる歌、絶妙なる多し。「月やあらぬ」の歌を見るに、何等の感概ぞや。「つひに行く」の歌は、古今の辭世絶唱なり。惟喬の皇子をとぶらひ參らせて、「わすれては夢かとぞおもふ」とよまれしは、歌すぐれたるのみにあらず、節義の心詞の外にあふるゝか」とぞいはれし。毛詩に「蕭々馬鳴悠々旆旌」と云ふは、軍中の靜なる狀をいへり。馬のいなゝくを聞き、旆の風にひらめくを見るのみにて、他は言ふべき事なき所を、この兩句にていひ盡せり。楚辭に、「嫋々兮秋風。洞庭波たつて兮木葉下」といへるは、秋風そよ〳〵と吹く時洞庭湖に波たち、湖邊の木の葉はら〳〵と落つるといへるのみにて、外に珍敷事も六箇敷事もなし。然れども、此兩句を吟詠すれば、洞庭の秋の氣色、今も目前にあらはるゝ樣におもはる。又「王孫遊んで兮不レ歸。春草生兮萋々」といへるは、人をなつかしむ心限なき感慨なり。これ等は皆詩の佳境にて、和歌も又此意なり。古の能き歌といふは、一度聞けば則ち耳にとまりてわすれず、其意も人の解說をまたずして知る。かりそめに吟ずる時は、さのみをかしき事もなきやうにて、諷詠玩味すれば、限なき興致あり。今の人の歌は、詞むづかしくて、再三聞くも、耳を過ぐれば則ちわする。人の解說を聞くもその心通じ難し。歌のよきあしき是にても知るべし。古人の詩は、必ず實境に對し實事ありて漫興より出づる故に、其意皆實なり。後世の詩は、題を設けて作る故に、其意おほくは虚僞なり。是を無病呻吟といふ。呻吟はをめくなり。和歌も、古の人は皆實意にて詠めり。後世は題を設けてよむゆゑに、おほくは虚僞の詞なり。

しら〳〵ししらけたる夜の月影に雪ふみわけて梅の花折る

といふ歌こそいと面白けれ。實境に對して詠める歌は、皆此の如く、わづかにとなへ出せば、則ち其時の事想像せらる。和歌の妙なり。天地をうごかし鬼神を感ぜしむること此境に有り。今の歌はしからず。

一近き世に人のもてあそぶ茶の道こそ心得ぬ事なれ。「器は舊きを求むるにあらず。維新らしきをす」と、尙書にいへるに、今の茶人は、幾年を經たるともしれぬ舊き茶碗の、汚穢不淨にして、然もかけ損じたるを、漆などにてつくろひて用ふ。けがらはしき

病もなきに苦しみをめくに譬ふるなり
鬼神を感ぜしむ—古今集序にあり
汚穢—けがれ
唾壺—灰ふき
抹茶—ひき茶
撤す—膳部を持去るなり
點心—茶請の菓子

事言ふばかりなし。朝鮮國の人の常に用ふる唾壺の舊きを求めて、抹茶を貯へて是れを茶入といふ。これもけがらはし。竹篦を撓めて匙として茶を扱ふ、是れを茶杓といふ。人に茶を呑するに、まづかこひとて一間なるせまき所に集りて、くひものも人によそはすることなく、手自もりくひ、酒も自らくみのみて、其うつはものをも手づから洗ひ拭ひて撤す。點心くひて後出でて口すゝぎて入る。あるじみづから茶を點じて客人にたてまつれば、一つの茶碗に點じたる茶を、上座の人すこし飲みて次の人に傳ふ。三人にても五人にても次第に飲みて、末座なる人殘なく飲みて、其茶碗を上座に授く。上座の人取りて子細に見て、珍器なる事をほめて、又次座の人に傳ふ。次座の人も子細に見て、次第に傳へて末座にいたる。末座の人見終りてあるじにかへし、客人一同に謝詞をいたして頓首す。次に茶碗の袋を乞ひて見、次に茶入を見、次に茶入の袋を見、次に茶杓を見る。みるべき程の珍器にあらざれども、請ひ見るを禮とす。爐に炭を置くをば、客人さし寄りて見て是をほむ。瓶に花をさせばほむ。大かた何にても、主人のする事を見てほめずといふ事なし。諂の至りといふべし。かこひのつくりは、傳へ聞く、維摩居士が方丈の室よりも今少しせまくして、小き窓をあけたるのみ

維摩居士—釋迦と同時の人一に淨名居士といふ
方丈の室—一丈四方の室
狗竇—いぬくぐり
調度—器物什器
物喰をしき—膳
やつ〳〵しき—やつれたる貧しき姿
まねびたる—一本「學

なれば、白晝にもくらく、夏は甚だあつし。客人の出入する口は、狗竇のごとくにて、くゞりはらばひて入れば、息こもりてそもたへがたし。のみくふものも、人の口に好みにくむものもあるに、主人のいかにこゝろづかひせりとも、口にかなはぬ物をば、かならず殘さずくはんとするも苦し。させる事もなき器を、珍らしげにほむるもそらはづかし。又物ずきとて、家の作りよりもろ〳〵の調度に至るまで、常にかはりて珍敷やさしき事をばすれども、茶人の家居は、必ず柱などもほそく、障子の骨までも風にたへぬばかりに細くす。或は丸くゆがみたる柱を、皮ながら用ひなどして、ものずきをかしともて興ず。物喰をしきも、足の高きを嫌ひて、平をしきを用ふ。すべて茶人の物好といふは、よろづ何事も貧しくやつ〳〵しき樣をまねびたる物なり。茶の道のおこりを尋ぬるに、漢土にては、南北朝の頃より、茶を飲むこと始まれりといふ。唐の代に至りて、世に盛に行はる。盧仝、陸羽はなはだ是を好めり。盧仝は茶の歌を作り、陸羽は茶經をあらはせり。其時の茶は、或は熱湯に瀹し、又は煎ず。或は細末となすを抹茶といふ。熱湯に點じて呑む、是れ今の茶人の用ふる茶なり。あるひは細末の茶を丸となすを團茶と云ふ。是も熱湯に點じて飲む。點茶には茶筅を用ふる事、今

の人のするわざのごとし。陸羽等が茶を煎じ、或は瀹すには、水を選む事甚だし。詳なる事は茶經に見えたり。陸羽等が茶をもてあそびし有樣は、今の世の茶人に似たり。陸羽が同時に常伯熊といふ人も、茶を嗜みて茶の道に精しかりけり。李季卿といふ人、丞相李適之が子にて、其身御史大夫の官なりしが、天子の使をうけ給はりて江南の方に往き、臨懷縣といふ所の旅館に著きしに、或人常伯熊が茶の道に達せる事を言ひしかば、やがて伯熊を旅館に請じ、茶をおこなはせけり。其時伯熊、黄なる衣に黑き紗の帽子を著、手に茶器を持ち、口に茶の名を唱へ、ねんごろに用意して、法の如く茶を煎ず。側にて見るもの、目をぬぐひて奇異の思ひをなせり。茶煮えければ、季卿二杯すゝりてやみぬ。夫より江外といふ所に至りて、又陸羽を請じて行はせけるに、陸羽野服を著て、茶具を先に立てゝ行きける。その作法ことぐく伯熊に同じ。季卿茶をば飲みけれども、此人共のしわざを見て卑しき事と思ひければ、從者に命じて、錢三十文を陸羽に與へしむ。陸羽大きにはぢくやみて、是より茶を弄ぶ事をやめて、毀茶論をあらはしけるとかや。我國にては、鎌倉の時、五山の禪僧、異國より茶を持ち來りて弘めしが、世の人さのみもてはやす事もなかりしに、室町の公方義政是を好

びたる」とあり同意なり
瀹す—湯にひたす
茶筅—茶をたてる時にかきまはす器
從者—ともの
五山—鎌倉にて寺格の高き五の禪寺
茶道—一本「茶堂」とあり。此方よかるべし
堅緻—質のかたくして密なること
大厦—大なる館
さつて—一本「さけて」
しつらひ—設け裝ふこと
樂みけるなり—一本「樂めるなり」
美膳—よき

み給ひ、朝暮に是を玩び、東山の慈照院の銀閣にて、茶の會しば〳〵なり。しかれども、義政は天性奢侈を好み給ひし故に、茶をもてあそばるゝにも、茶道より茶具に至るまで、必ず堅緻にて美麗なる事を好み給へり。今の世の茶人のごとくにはあらず。東山殿の調度とて、今に傳はれるを見るべし。近き世の茶人は、利休居士を祖師とす。利休は獨身の禪門にて、貧賤なるが、草の庵のせばき内にて茶をたのしみけるを、當時の諸侯富貴の樂みにあきて、利休が貧賤寒酸の樂みをしたひ、大厦高臺をさつて一間なる所をしつらひ、其内にてづから茶を點じて、人にのませて樂みけるなり。本獨身の禪門の、まづしくやつ〳〵しき者の樂みを學びたる故に、一間の作りより始めて、もろ〳〵の器物に至る迄、皆あたらしき物を用ひず。くひものにも、美膳をきらひて淡薄なる物をこのむ。凡茶人のなすわざことぐく貧賤なる者のまねびなり。されども富貴なる人は、貧賤なる者をまねび樂みとするもいはれあり。元より貧賤なる者、何ぞ更に貧賤のわざをまねびて樂しむことあらんや。今の世に、富貴なる人おのが好む心より、貧賤なる者を茶に請ずるは、心得ぬ事なり。凡萬の器の中に、舊くて善き物は樂器なり。昔の上手の作りて多くの年を經たるは、必ず妙なる聲出でて、奇

馳走まねび―學ぶこと眞似すること
奇なる事―一本「あやしき事」
繕りて―一本「つくろひて」同意なり
畫書―一本「書畫」
法則―手本
うつけたる―たはけたる愚なる
磁器―燒きもの

なる事もある故、樂器は少しも舊きを寶とす。樂器の外は、大かた何の器も、舊きはあたらしきに若く事なし。中について、のみくひの器は、いかにも新らしきを悅ぶ事誰も同じ心なり。茶具の中にて、釜計こそ舊きを用ふべけれ。茶碗はいかにも新しきを用ふべき物なるに、幾年を經たるとも知れず、何人の口の垢やらん染みてけがれたる、しかもかけ損じたるを繕りて、けがらはしとも思はず用ふるは、そもいかなる心ぞや。昔夜光の璧といひし玉は、夜車十二乘を照しける故に、世に希なる寶とて十五城にかへけり。明月の珠といふは、夜を照すこと明月のごとくなりしとかや。かやうのすぐれたる德あるものを寶として、多くの價にかへたるは、さも有るべき事なり。古畫、古墨蹟などを寶とするも、其畫書のたくみの、世にすぐれたる所をもてあそび、且は今の人の其業を學ぶ者の法則となるをたふとむ故に、力ある人は、金錢ををしまず、其代を出して是を求む。うつけたる事にあらず。今の世の茶をもてあそぶ人は、何の珍敷事もなく、すぐれたる德もなき常の磁器を、千金萬金に買ひ取りて、上もなき寶と思ひ、させることもなき人の作れる竹の筒、竹の篦などを、百金にも買ひて、世にめづらしき物ぞとおもふは、大なる迷ひなり。近き世に、茶の道を弘めし人は、

迷ひ―一本「惑ひ」とあり
漆器―うるしぬりのうつは

利休、宗旦等が外には、片桐石見守貞昌、小堀遠江守政一なり。此人々は、貴賤異なれ共、皆聖賢にあらず、常の人なるに、今の茶人必ずこの人々のしわざをまねびて、是は利休が法、これは遠州の法、是は石州の法として、禮法を守るがごとく一向に堅く守りて、少しもたがはじとす。かたはらいたき事なり。今にてもあれ、世にいきほひの有る人、茶をもてあそび先輩に替りて新らしき業をしいださんに、與する人あまたありて、爰かしこにて、其しわざをまねびてせば、やがて一流と成るべし。是れ茶の道に一定の法なき故なり。我も平生茶をたしむ故に、人の許にて美膳などくひたる後に、上品の抹茶を濃く點じて出さるれば、口に叶ひて甚だ快し。但それも廣き座敷にて、くひ物を心に任せてくひ、酒も人にくませて飲み、點心もよく喰ひて、茶をもあたらしき茶碗にて、つかふ者の點じたるを、人々別なる茶碗にて飲むはよし。今の世の茶の道は、極めていとはしきわざなり。茶を貯ふるは、此方の磁器にもさるべき物有り。さもなくば、棗の形なる漆器よし、銀器、錫器もよし。茶を扱ふには、銀の茶匙を用ふべし。茶碗はいかにもあたらしきをもちふるぞいさぎよく心よき。一俳諧は和歌の一體なり、古今集に見えたり。史記の滑稽傳の註に、姚察が話をのせて、

いへり―一本「いふなり」

滑稽は俳諧の如しと言へり。俳諧とはたはむれをいひて、人を悅ばせ、人の心に叶ふをいへり。古今集には俳の字を誹に作れり。誹の字は謗の字とつらねて、誹謗はそしる義なるを、俳の字にかへて用ふる事いかなるゆゑといふことをしらず。誹の字と俳の字と、音も義も大に異なるをかよはして用ふる事、字書に見えず。恐らくは古今集の誤ならん。古今集に載せたる俳諧の歌は、只常の歌のごとくにて、詞すこし常のにかはるのみなり。かりそめに見れば、只常の歌とみゆ。くはしくまなばざれば、俳諧の姿を知りがたし。連歌と言ふこと中古よりはじまりて、末の世に盛なり。其本は、三十一字の歌を二ッにわけて、二人して唱ふるなり。たとへば、近衞院の御前にて、

宇治の左大臣、

ほとゝぎす名をも雲井にあぐる哉

とのたまひしに、賴政

弓張月のいるにまかせて

と申されしなど、是も連歌なり。此事は上代より有りしかども、連歌とはいはず。後の世に及びて、上の句下の句をいくらもつらねて、ながくいひのぶることになりて、

中華―支那人が自國の誇稱

貞德―松永貞德

宗因―西山宗因

くだれる品―下品

連歌といふ名出で來れり。中華に聯句といふ事ありて、五言四句を、一人二句づつ作りて、人あまたして數十百句もつらぬるなり。此國の連歌は、彼聯句に倣へる物と見ゆ。連歌は和歌のたぐひなる故に、歌人も是をきらはず。後世に及びて、連歌師と云ふ者出來て、さまゞの式法を立て、遂に世のもてあそびとなれり。近き世に及びて、又別に俳諧といふ事出來て　賤しきたはむれごとをつゞりて、連歌の如く長く連ねてもてあそびとするは、俳諧の連歌なり。その初連歌師の輩、連歌の句に、たはむれごとの連歌にはいひがたき程の事を、一句二句つらねて笑ひ興じたるを、其後俳諧師といふもの出來て、是を專にすることになれり。貞德、宗因、芭蕉翁などいふ者是なり。されど、貞德等が時の俳諧は、たはむれ事ををかしくいひなして、うち聞く者、こらへずわらひ興ずるのみなり。芭蕉翁迄は猶その體なりき。夫よりくだりては、ひたすらにをかしき事をいはんとて、下部の者迄も、うち聞きて悅ぶ樣なることをいふ故に、極めていやしきことをきらはず、親子兄弟の中にては、いひがたく聞きにくき事をもいひ出す。俳諧の中にても至りてくだれる品なり。然れども五十年前は、只歌仙とて三十六句つらね、或は五十韻百韻とて、連歌のごとくつらねて、宗匠の點を乞ひて、

優劣をあらそひあへるのみなりしに、元祿の初の頃より、前句付といふ事起れり、其法、宗匠より下の句を一句出して、多くの人に上の句を付けさせて、點に第一第二の品を命じて、甲乙の次第にしたがひて賞を行ふ。其賞、或は布帛、或は器物など、そこばくの値あるものを出す。布帛、器物に望なき者は、其器なる金銀を取る。この賞を得んとて、貴賤となく我も〳〵と句を付けて、日々に點錢をつひやす。是れ則ち博奕の類なり。此事盛に行はれて、世の俗人皆これを好む程に、下の句に上の句を付くるも猶むづかしとて、宗匠より上の句の初の五文字を出して、次の七文字、五文字を諸人に付けさせる事になれり。是を冠付とも笠付ともいふ。かくいやしきわざとなりぬれば、下部のわらは、ゆすまでも俳諧といふ事を知りて、笠付して褒美をとらんとする程に、詞いよ〳〵いやしくなり。寶永の比より、冠の五文字を三つ出して、三つ冠に各七文字、五文字を付けさせて、勝負を分くる事あり。是を三笠付といふ。是彌々博奕に近し。其後五文字の冠をも出さず、下の七文字、五文字の詞をもやめて、只數の文字を封じて、外より此數をはかりて札を入れて、其數のあたれるを勝として金銀をとらする事になりぬ。爰に至りては、正しく博奕なれ共、本の名を存して三笠

賞―景物なり
布帛―反物
そこばく―若干
點錢―點をかくる禮金
今いふ入花料
げす―下衆
賤しき者共
三笠付の上に一本「猶」

の字あり
住吉玉津島の神―共に和歌の神なればいふ
戯と―一本「戯に」
殿上人―昇殿を許さる人、四位以上の公家六位の藏人

付といふ。此三笠付盛になりて、賤き者は言ふに及ばず、士君子も是をなして得つかんとするほどに、得は付かずして多くの財をつひやし、身を失ひ、家を亡す者數をしらず。此事上にきこえて、享保の初よりきびしく三笠付を禁ぜらる。其後禁を犯して刑罰にあふ者あれども、今に至るまで猶たえずと聞ゆ。和歌の流、その末變じて博奕となるべしとは、住吉、玉津島の神もいかでしろしめさん。淺ましく悲しきは、俳諧のわざはひならずや。凡むかしより戯に詠みたる歌、又時の人を嘲り笑ひたる狂歌の類、古き物がたり草紙に記し置きし事は、皆俳諧なり。しかれども、古き狂歌は詞いやしからず、きたなき事を言はず、父子兄弟の中にてとなふるに聊かさはる事なし。近き世に、江戸の醫師卜養といひしもの、狂歌に巧なりしも、世の諺のなれたる事共を戯といひかなへて、をかしき事多きのみにて詞いやしからず、やさしき姿なれば、其品くだらず。猶俳諧歌のたぐひなるべきか。此頃の俳諧といふ物にはまさるべし。寶永五年の春、京師火災にて、内裏炎上し、公卿殿上の人の第宅殘りすくなく燒け失せたりしに、清水谷の大納言實業卿、風早の參議公長卿も火事にあひて、爰かしこにげまどひ給ひけるが、二人道にて行きあはれしに、實業卿、

風早と聞くもおそろしけふの火や
とのたまひければ、公長卿とりあへず、
清水谷とてやけものこらず
と答へ給ひしとかや。これらをこそ眞の俳諧といふべけれ。和歌道おとろへたれ共、公家の人々には猶かやうのやさしきたはむれあり。此頃の俳諧といふ物は、さのみ笑ひ興ずるほどのをかしき事をいはず、連歌の詞に似て連歌にもあらず、意趣いかにも知りがたし。さしよりて其人にとひなじれば、俳諧は古今集に見えて和歌の一體なるよしを口に藉き、唐の大和の故事共を引きて其道をたふとくす。しかれども、其句をかき付けたるを見れば、何やらんえもいはれぬ事を、えも知らぬ文字にて記して、ものしれるやうなり。凡俳諧の草紙、究ていやしきものなり。俳諧師といふ者、極めていやしき者にて、諸侯貴人のもてあそび物になる故に、やんごとなき人々になれ近づきて、さま〴〵のよからぬ事をすゝめまるらする類世に多し。士君子の友とすべきものにあらず。心あらん人はきびしく禁ずべき事なり。近き比は諸侯貴人も多く是れを好むことになれり。よからぬ風俗なり。いたく俳諧を好む人に能き人をいまだ聞

意趣—心持ち

えもしらぬ—一本「えもしれぬ」

ものしれるやう—一本「ものしれる趣」

いやしきものなり—一本「すぢなきものなり」

阮咸—字は仲容竹林七賢の人なり

見にくし—一本「みぐるし」

忽ちに—一本「俄に」

小野氏の女—名をお通といふ、其年代につきては説區々なり、其作は卽ち十二段草子なり

かず。
一今の世の淫樂多き中に、糸竹のたぐひには三味線、うたひ物類には淨瑠璃に勝る淫聲なし。三味線は琉球國の樂器なるを、慶長の頃とやらん此國に傳へしといふ。昔晉の阮咸の造りし樂器を阮咸といふ。此國に傳はりて昔はもてあそびけるにや、延喜式に載せたり。今の三味線は阮咸の遺制なりといふ、如何あらん。阮咸は如何成る制にてかありけん、今の三味線は甚しき淫聲なり。其作り琵琶に似たるやうにて、琵琶にくらぶれば形甚だいやしく、是を彈ずるさまも極めて見にくし。此聲纔に發すれば、忽ちに人の淫心を引起して、放僻邪侈に至らしむ。其害いふ計なし。士君子のかりにも聞くべき物に非ず。淨瑠璃といふ物も、三味線と同じ頃に始れりと聞ゆ。小野氏の女、三河國矢作の宿の長者の女淨瑠璃といひし者の事を、十二段の昔物語に作りしを、其頃の目くら法師、是に節を付けて語り出せしとかや。後の人是れにならひて、色々の昔物語を彼の體に作りてもてあそぶ、本淨瑠璃が事を演ぜしより始れる故に都べて其名を淨瑠璃といふ。三味線の聲是によく叶ふ故に、淨瑠璃に必ず三味線を合せて、世俗の上なきもてあそびとなれり。然るに、寛文、延寶の頃迄の淨瑠璃は、皆昔物語を

多かりけり―一本に「けり」なし
鄙俚―鄙びたること
「面白き事と」の下、一本「思ひて興じけるに」とあり
世に賤しき―一本「世の賤者の」
あらぬ―一本「あらざる」
筑紫箏―今行はるゝ十三絃の琴

演ぜし故に、詞やさしくつゞりなして、哀れにをかしき事も多かりけり。淫聲といひながら、忠臣、孝子、義士、節婦の事をいへれば、おろかなる小人女子も、是を聞きては感じあへり。元祿の頃より稍々ます〳〵俗に近くなりて、淫靡の聲のみ多し。寶永の頃京の淨瑠璃師江戸に來りて、鄙俚猥褻なる淨瑠璃を唱へしより、江戸の人是れを面白き事とおもひ、もて興じけるに、享保の初に、また難波の淨瑠璃師來りて、かなたなる俗調を弘めし程に、江戸の人々彌々是れを好みて、江戸の舊き淨瑠璃を捨てて、ひたすら京、難波の淨瑠璃を習ふ。賤しきもののみにあらず、士大夫諸侯までも是れを好みて、一ふしを學ぶ人有り。こゝに至りて、昔物語を捨て、只今の世に賤しき淫奔せし事を語る。其詞の鄙俚猥褻なること言ふばかりなし。士大夫の聞くべき事にあらぬはいふに及ばず、親子兄弟なみ居る所にては、面をそむけ耳をおほふべき事なり。されば此淨瑠璃さかりに行はれてよりこのかた、江戸の男女淫奔する者數をしらず、元文の年に及びては、士大夫の族は言ふに及ばず、貴き官人の中にも、人の女に通じ、或は妻をぬすまれ、親族の中にても、姦通するたぐひ、いくらといふ數を知らず。是れ正しく淫樂の災なり。三味線も寛文延寶の頃迄は、調子ひくく、ひく手

一節斷―尺八に似て細く短きもの
鄭聲―鄭國の樂極めて淫猥なりしもの
鄭衛―共と國名なり

もまばらにして、筑紫箏に類せり。うたふ唱も、詞やさしく節もゆるやかにて、俗調といひながらいやしげすくなかりき。近き頃は、調子高くひく手も甚だせはしくこまかなり。うたふ歌も、詞いやしく拍子つゞまりて、いそがはしさいふ計なし。淫姫の至極、人の心をやぶる事是に過ぐるものなし。凡雅樂は、拍子まどほにて、糸竹ともに手をつかふ事まばらなり。雅樂とは正樂をいふ。淫樂は煩手とて、手をしげくす。今の三味線、牧笛、尺八、一節斷、皆煩手なり。中にも三味線の煩手、たとふべきものなし。箏は雅樂の器なるが、筑紫箏になりて俗樂に落ちぬれども、其聲もと雅音なるゆゑに、いたく人の心をとらかさず。今の人雅樂を學ぶ事あたはずとも、せめて筑紫箏をもてあそばゞ、猶少しよかるべし。牧笛、尺八、一節斷は、俗樂にて煩手なれども、三味線の如く淫聲にあらず。凡そ俗樂のあらゆる樂器の中に、三味線ほどの淫聲なし。古の鄭聲はいかなる聲にてか有りけん、孔子の「鄭聲をはなて」と宣ひしは、雅樂を妨げ風俗をやぶる故なり。世に雅樂ありても、鄭衛の淫聲を禁ぜざれば、雅樂行はれがたし。今の世には、雅樂絶えてなくして、淫樂のみ盛に行はるれば、風俗の衰敗する事甚だ速なり。我國の古を考ふるに、朝廷より民間に至るまで、雅樂の

みにて、淫樂なかりしと見ゆ。中古より白拍子、今樣などいふ者有りしかども、白拍子は今の大頭の舞その名殘ならんと思ふ。妓舞なれども古風猶のこれり。今樣はほろびにたれど、一つ二つ殘りて、人のうたふを聞くに、古雅の趣き、今の世にはたぐふべき物なし。此外に淫樂といふ物ありし事をきかず。されば、俗說にいふ、三河國矢作の宿の長者の女淨瑠璃が、侍婢を集めて管絃せしは、賤き者も外の翫びものなかりし故に、雅樂を奏してつれ〴〵をなぐさめけるなり。又平の重衡捕はれて關東に下りし時、旅寓のつれ〴〵をなぐさめんとて、駿河國手越の妓女千壽をすゝめしに、重衡琵琶をひかれしかば、千壽箏をひきて五常樂、皇麞、廻忽などを奏せしといふ。上りし世の風俗といひながら、いとやさしくたふとき事にあらずや。今の世には諸侯、貴人やんごとなき雲の上人も、雅樂をもてあそび給ふ事なく、筑紫箏をだに好み給はず、唯三味線、淨瑠璃をもてあそび給ひ、賤しき妓女を宮中に召して歌舞をなさしむるのみならず、あまたの女僕を蓄へ置きて、夜となく晝となくあらぬ戯をなさしめて、是を樂しみ給ふ類を多く聞けり。淺ましともいふ計なし。樂記に「鄭衞の音は亂世の音なり。桑間濮上の音は亡國の音なり」といへるは、淫樂に世を亂り國を亡ぼす道理

ほろびにたれど—一本「亡ぶに似たれど」

千壽—平家物語に詳なり

妓女—あそびめ

やんごとなき—身分の高き

桑間濮上の音—昔衞君が桑林の間濮水の邊にて聞きし琴聲、淫亂の聲なり

風を移し俗を易る—風俗を移し易ふるなりちからなり—一本「功なり」

有る事をいへるなり、今の世の好み樂む三味線淨瑠璃は、古の鄭衞桑間濮上の淫聲にも過ぎなんとぞおもふ。昔はかやうの俗樂なかりし故に、矢作の長者の女、手越の遊女までも、雅樂を習ひ知れり。今は色々の俗樂ある故に、やんごとなき人々も是れを好みて、雅樂を習ふ事なし。雅は俗に遠く、淫樂は俗に近き故なり。孝經に「風を移し俗を易ふるは樂より善きはなし」といへり。あしき風俗をうつしかへてよくするは、雅樂のちからなり。善き風俗をうつしかへてあしくするは、淫樂の力なり。雅樂にて風俗をよくするは其しるしおそく、淫樂にて風俗をあしくするは其しるしはやし。されば、たとへ雅樂世に行はれても、淫樂を禁ぜざれば、雅樂すたれやすし。孔子の「鄭聲をはなて」とのたまへるは此故なり。今の世には、雅樂たえてなくして淫樂のみさかりなる故に、士民の風俗年を追ひてあしくなりくだること、走る馬のけはしき坂を下るが如し。貞享より元祿の初までの人の風俗を思ひ出して、今の人の有樣をみれば、衣冠せる人の傍にて、赤裸なる人を見るが如し。五十年の間にかく計の變化あるは、いかなる事ぞや。全く是れ淫樂のなす所なり。三味線淨瑠璃は、元より淫聲にて、百年以來の物なれども、貞享の頃までは、三味線も今の如く煩手にあらず、淨瑠璃も、

所作—業

樂器—雅樂に用ゐるもの

配所—流されし土地

檢校—盲人の官名

皆むかし物語にて詞やさしかりしに、其後此藝に上手あまた出來て、我おとらじと巧をきそふ程に、様々の妙曲を作り出して、人の聽を悅ばしむ。淨瑠璃も俗に遠き鄙俚猥褻なる事を語る程に、今に至りては、詞極めていやしく、淫聲いやまさりて、少しも心ある人は、聞くに忍びがたく耳をおほふ。是を面白くおもひて樂む、淺ましき世の風俗なり。昔なき斯樣の事の出できたれるは、誠に國家の大なる病なり。のぞかずばあるべからず。たとひ俄に禁止せずとも、三味線淨瑠璃は非人の所作に定めて、座敷に上らぬものとせば、士君子はおのづから是をもてあそばざるべし。これ風俗を正しくする所の道なり。胡弓と云ふ物は三味線の類なれども、其業ことにいやしげなるにや、好む者少し。唯めくら法師非人の所作にてやみぬれば、風俗を破る程の事なし。箏は元樂器にて、管絃にのみ入りしに、いつの頃にかありけん、一二百年の昔、公家の人筑紫に流されて、配所のつれ〴〵に、箏の手をひきかへて煩手になし、雅樂の越天樂の歌を延ばして節をながうして、是に箏を合はせてひかれしを、筑後國善導寺の僧、其曲を習ひつたへて、世に弘めしより、筑紫箏と名付けて、世のもてあそびとなれりとかや。其後八橋の檢校と云ふめくら法師、此曲をならひて殊に上手成りしかば

作らせて、くみと名付けて—一本「作らせ、たくみに名けて」とあり。この本の「くみ」は組歌の意

絃—原本「弦」に作る一本により正す

淫聲—一本「淫奔」に作る

ひれもす—終日

ありき—歩き

越天樂の歌の「ふきと云ふも草の名」といふ歌を本として、色々の歌を誰人にか作らせて、くみと名付けてさま〴〵の曲折をなしけるより、彌世に行はれて貴賤のもてあそびとなれりと聞けり。雅樂には手のこまかなる事なく、一たびに六つの絃を鳴らすを、筑紫箏には一つ二つの絃をならし、ひく手細かにしげき故に、世俗の耳におもしろく聞ゆ。本樂器なれども、繁手に彈じ、諷聲などいふことをすれば、雅樂も淫聲を出す事、琴瑟といへども然なり。越天樂の歌は雅音なるを、のべて筑紫箏の歌となせば淫聲なり。然れども歌の詞猶やさしく、父子兄弟の中にても聽きにくからず、位ある人の前にても賤しからず、婦女の中にもてあそびても、淫聲を進むるまでの害もなし。三味線をひきて淨瑠璃を語るにくらぶれば、はるかにまされり。俗中にて絃歌のもてあそび、昔は唯是のみなりしといふに、今は貴き人もこれを好まねば、況していやしき者は其側に居ても聞かんともせず。江戸の内をひねもすありきても、箏の音をつひにきかず、只三味線の音のみ街にみちてかまびすし。されば、めくら法師にもめくら女にも、箏ひく者今は百人に一人なり。風俗の衰へて賤しくなる凡此たぐひなり。一猿樂といふことは、玄惠法師がかけるといふ庭訓往來に見ゆれば、鎌倉北條家の時よ

今の世の猿樂—能樂
室町の時—足利時代
鹿苑院殿—足利義滿
僞樂—一本「俗樂」

り有りしとみゆれども、いかなる戲なりしといふこと詳ならず。今の世の猿樂は、室町の時より始れりとかや。竹田の八郎秦の嘉勝といふもの、此戲をなし始めけるといふ。嘉勝は今の猿樂師の今春大夫が先祖なり。室町の公方鹿苑院殿より、武家にて天下を治め給ふに、古より有り來れる公家の禮樂を捨てゝ、別に禮樂を作らる。禮は今川左京太夫氏頼、小笠原兵庫助長秀、伊勢武藏守滿忠、三人命を受けて是れを議定す。樂は則ち猿樂なり。夫よりこのかた今の世に至るまで、是を武家の禮樂として敢て改めず。武家の禮は皆此國の俗禮なり。猿樂は僞樂なり。猿樂の音はいかれる聲なり。鼓うつ者の口を張りてさけぶも怒るさまなり。孔子の仰せられし北鄙殺伐の聲といふもの是ならん。今の武士はこはばりたる衣服を著て、道をゆくにも臂腿をあらはし、肩を張り、臂をふりていかめしくふるまふによくかなへる俗樂なり。但猿樂には淫聲なき故か、人の心をとらかさず、これのみ他の俗樂にまされり。然れども、猿樂には死せる者の幽靈あらはれて、僧にあひてとぶらひをうけ、罪業を滅し、佛果を得ることを多く作れり。幽靈にあらざれどもおほかた佛道を宗とする趣なる故に、世のはかなき事をしめして、人に菩提をすゝむる心なきはすくなし。是を作れる人、多くは

無常—一本「無情」
白拍子—昔の遊女のなせし舞の名また遊女をもいふ

佛者なる故なり。武家に猿樂を翫ぶは常の事にて、さも有るべきが、吉事の宴饗に是を用ふる事は心得がたし。酒をすゝむるにつきて、其詞の其事に叶へる一ふしをうたふは、賓主の情をのぶるわざなれば、中華の古人、詩を賦せしに類すべし。「猿樂をなせば、幽靈のあらはれて、とぶらひをうくるさま、または世の無常をしらするなど、はかなく悲しき事をうたひまひて、戲むるゝを忌はしともおもはず、只笛鼓にてはやしたてゝ舞ひかなづるを、目出たきとのみおもひて、いまはしきにこゝろづかざるは、愚なる事なり。湊の檢校といひしめくら法師、猿樂を好みしが、常にこの事をいひて笑ひあへり。又武家の貴人、猿樂のうたひものをならひて、一ふしをうたふまでは、せめての事なり。其所作を學びて、猿樂師に打交りて、色々のわざをなしてまひかなでものするは、有るべき事ともおもはれず。異國にて、後唐の莊宗といひし天子、俳優を好みて自ら其所作をなし樂しまれしが、程なく天下を失はれし事、五代史に見えたり。俳優は今の世の狂言なり。士君子の恥づべき事なり。昔平の相國の白拍子を好まれしも、妓王、妓女、佛などいふ白拍子を召してまはせしのみなり。宮女抔に是を習はせたるにあらず。鎌倉の相摸入道が田樂を好みしも、みづから其所作を習ひたる

田樂―法師の業にて種々の樂を付て舞ふ一種の舞、初は農民耕作の勞を慰する爲になしゝものといふ
しれもの―馬鹿もの
詐―一本「誤」
南都―奈良
流俗―風俗
湮鬱―ふさぐこと

にはあらず。今の世にはやんごとなき人も猿樂を好む程にては、必ず自ら其所作をなして樂とす。昔の人に異なり。風俗の下れる悲しき世の有樣なり。前代舊事本記といふ書は大成經とも云ふ。近き頃世のしれものありて、聖德太子の舊事本記の名をぬすみて僞作せるなり。近き世に出で來れる事共を、皆古よりあるさまに書きなせり。其中に、「猿樂も神代に猿女といふ者より始まれり。聖德太子の時、三十六番の猿樂有り。白翁黑翁といふ者あり。指折のつゞみ二つありて、兄皷弟皷といふ」など、あらぬ事を書きしるせり。大なる詐にて、世を誣ふるといふ事是なり。かやうの書を見て、猿樂は往古より此國に有る事ぞとおもはゞ、大なる惑なり。南都の春日の祭に、いづれの頃よりか猿樂をなし、內裏にても、近き世には猿樂を御覽有るは、いかなる故やらん。賤しき東人は得しらぬ事なり。世に古を好む人希なる故に、か樣の事にも心付かず、流俗に隨ひて、筋なき事をもよしと思ひて、其儘に打過ぐるなるべし。一人生れて、赤子の時は、啼く聲を出す、二三歲より聲を揚げて叫呼す。四五歲より人をしへざれども、いつとなく歌謠をまねびて、かたことなる童謠をとなへのゝしる。これみな自然なり。人としては聲を出して湮鬱を宣ぶるわざなくしてあられぬ故なり。

なくして―一本「なくては」
貫之―紀氏平安朝の歌人古今集の撰者
れをばなく―聲を上て泣く
まほろ―むさほり食ふ
かへらや―拍子言葉
おぎのりわざ―交易

されば、人は何にても少し聲を立つるわざを折々なさで叶はぬは天性なり。悅ぶ事、怒る事、かなしむ事、樂む事につきて、それ〴〵に聲を立つるは止む事を得ざるわざなり。賤しき者の力わざにも、聲を立てゝはげむは常の習ひなり。夫を其儘に捨て置きぬれば、かならず鄙俗に成りもてゆきて、はては淫聲のけしからぬ事になるを、古の聖人あらかじめしろしめして、樂といふ事を作り置きて、諷ひ舞ひ、糸竹鼓の拍子にて人をなぐさめ、湮鬱とて、うもれたる心氣を宣揚發越せしめ給ふ。異國の事はしばらく置きて、我國の古に催馬樂といふは、馬子の馬を逐ふにうたふうたなるを、取りあけて、是を糸竹にあはせて、朝廷の神事にも御遊にも用ひらる。是れ我國のうたひものゝ始めなりとかや。貫之が土佐の日記にかけるふな人の歌に、

春の野にてぞねをばなく、わかすゝきにて、手をきる〳〵、つんだる菜を、おやゝまほるらん、しうとめやくふらん。かへらや。よんべのうなゐもがな。ぜにこはむ。そらごとをして、おぎのりわざをして、錢ももてこず、おのれだにこず。

といへるがごとき、昔は賤しきものの歌も、詞やさしく聞きにくからず。それより後は朗詠ありて、雲の上人のたのしみなり。又其後、今樣といふこと起りて、酒盛など

朗詠―漢詩漢文、和歌などに節をつけてうたふもの
今様―七五句四句にて一首をなすうたひもの
聲明―梵讃又は經文に節をつけて長くひき唱ふること
幸若の舞―扇拍子にてうたひ舞ふ一種の舞

の興を催しけるに、是もいつとなくとなへうしなひて、今の世には跡かたもなくなれり。白拍子の歌の詞は、平家物語などにすこし殘れり。是も詞やさしく聞きにくからず。琵琶法師の平家物語は、天台の聲明のふしをうつして、生佛といふめくら法師、おのが生れ付きの聲にてかたり始めけるといふ。今の世までつたはりて、詞は元より平家物語なればいふに及ばず、ふしもむかしの習なれば聞きにくからず、琵琶をあはすれば其聲も淫ならず、もてあそぶ人に損なし。鎌倉の時の田樂には、いかなる謠ひもの有りけん、今知れるものなし。それより下りては、猿樂なり。又近き世に幸若の舞といふ物は、室町の末とかや、桃井氏の子孫に、比叡の山の兒にて、幸若丸と言ふものまひ始めけるといひ傳ふ。琵琶法師の物語に似たる所もあり、猿樂のうたひに似たる所もあり、いづれにも少しも淫聲なきものなり。まひとはいへども、起ちてまふことはなし、只扇にて手を打ち拍子をとるのみなり。詞はさだまりたる數ありて、皆昔物語りをのべたり。あたらしき事をば作り出さず。士太夫の中にもてあそびても、淫佚をすゝむる恐れなし。寛文延寶の頃迄は、諸侯貴人の宴饗にも是を用ひて心を慰め、酒をも勸めけるに、元祿の比より猿樂さかりになりて、幸若のまひ世にすたれた

かたりなし―一本「かたりしなり」
僞說―一本「俗說」
しほらしき―殊勝らしき

り。說經といふものは、もと法師の中に說經師と言ふ者ありて、佛法のたふとき事どもを詞につゞり、浮世の無常のあはれに戀しき昔物語を演じ、善惡因果のむくいある事どもを物語に作りて、これにふしを付けて、哀なるやうにかたりなし、鉦鼓をならして拍子をとり、世の婦女に聞かせて惡をいましめ善をすゝめて、菩提心を起さしめんとするなり。昔より法師の說法に、因緣物語するたぐひなり。其物語は、僞說にまかせて慥ならぬ事も多けれども、詞は昔の詞にて、いやしき俗語をまじへたる中に、やさしき事もすくなからず。其上幸若の舞の詞のごとく、むかしより定まれる數ありて、いつも古き事のみを語りて、今の世の新しき事を作り出さず。其聲も只悲き聲のみなれば、婦女これを聞きては、そゞろに涙をながしなく計にて、淨瑠璃のごとき淫聲にはあらず。三味線ありてより以來は、三味線をあはする故に、鉦鼓を打ちたるよりも少しうきたつ樣なれど、甚だしき淫聲にはあらず。いはゞ哀みて傷るといふ聲なり。淨瑠璃にくらべては、すこしまされる方ならん。めくら法師、妓女などのうたふ歌も、寛文、延寶の頃までは、長歌弄齋など言ふ曲ありて、俗調ながら詞やさしく、ふしもゆるやかに、いとしほらしき事ども多かり。かりそめのそゞろうたも、小倉、

かしまし—
やかまし

吉野などいふは、詞やさしくて、よき人の前にてうたひても、聞きにくからず。むかしの今様にもすこし似たるべきか。俗中の雅ともいふべき者なり。三味線も是にあはする時は、調子ひくく手も間どほにて、きくもの耳にかしましからず、つくし箏にも近き樣にて、いやしげ少なかりき。今はめくら法師も、むかしの曲をいさゝかしらず、調子たかくかしましき事のみをならひて、三味線はいつもかくのごとくなる物とおもへり。うたふ歌も、只さわがしく。いやしくかしましきのみにて、昔のやうなるやさしき事は、露計もきこえず。我等が一生のうち、五十年の間に、俗樂さへかくのごとくいやしくなりくだれる、これそもいかなる事ぞや。淨瑠璃は、江戸、京、難波のみにあらず、遠國の田舍にも其所の風ありて、一ふしかはりたる事さまぐ〜なり。其中に、江戸の淨瑠璃は本より武家の好みにあはせたる故に、詞もふしもいさめる樣にてつよみあり。京、難波の淨瑠璃は、聲かなしくふるひてよわげおほし。さりながら、元祿より以前は、何方の淨瑠璃も皆昔物語なりしほどに、詞がらさのみいやしからざりき。其後は、只今の世の新しき事をかたり出せる故に、ことば甚だいやしくなりぬれば、聲もふしもつれていやしく淺ましくなれり。されども、土地の風俗同じから

下ざまの人
—下流の人
うれはしき
—憂ふべく
歎かしき
いまはし—
厭ふべし
聞くさへ—
一本「聞く
だに」
一本「人ど

ねば、江戸の人、京、難波の淨瑠璃を聞ては頭をそむけ、耳をおほひて聞くべき事とせざりしに、寶永の頃、京より一中と言ふ淨瑠璃師來りて、京の淨瑠璃を弘めしより、江戸の人々稍是を悅びあへりしに、享保の始めに、又難波より竹本といふ淨瑠璃師來りて、難波の淨瑠璃を弘む。是れより江戸の人貴きも賤しきも、難波の淨瑠璃を好みあへりしに、其後又都路といふ淨瑠璃師京より來りて、悲しき聲にて、いやしき諺の淺ましく取りみだしたる事どもを語り出す程に、江戸の人又是にうつりて、興じもてはやす事限りなし。下ざまの人は言ふに及ばず、諸侯貴人、雲の上なるやんごとなき人々も、ひたすらにこれを好みて、歲の初にも、いかなる吉事有りて目出度折から壽きあへる座敷にても、哀に悲しき聲にてうれはしきこと共を、語りつゞくるをきかしと聞きて、いまはしともおもはず、日をくらし、夜を明かして飽かず聞くめり。淨瑠璃師盲法師などの語るを聞くさへ淺ましくみるに、士君子のさも賤しからぬ人ども、此一ふしをならひて、はれやかなる所にて、はぢ顏もなく、聲打ちあげて語る者有りとかや。此比に及びては、江戸の人偏に京、難波の淨瑠璃のみを悅びて、江戸の淨瑠璃をば、又聞くべき物とせず。世の風俗は民の好惡に隨ひて移りかはる物なれども、

も」の下に「の」の字あり

はれやかなる所―人中

相と成る―宰相をして

司馬―武事を司る官

三十年の内に、江戸の人のすき嫌ひ、寒暑の如くに變るは、他の故にあらず、これ全く淫樂のちからなり。雅樂の風俗を善くするよりも、淫樂の風俗を惡くするは其しるしすみやかなり。和漢古今の俗樂の中に、今の三味線淨瑠璃程の淺ましき淫聲またあるべしともおもはれず。世の末といひながら、淺ましく悲しき風俗ならずや。

一漢土にて俳優といふは、今わが國の狂言師なり。戲言を云ひて人をわらはすを俳といふ。優は別ち狂言師なり。俳優、侏儒といふは、人の身のたけ短きを侏儒と云ふ。たけみじかきものは、ものまねしてまひをどるによきゆゑに、俳優は多く侏儒なり。昔春秋の世に、魯の定公と齊の景公と夾谷といふ所にて會盟せられしに、孔子魯の大司寇の官にて、定公の爲に相と成りて行給ふ。會所にて宴饗の席に、齊の方より俳優侏儒を出して戲舞をなさしめしかば、孔子是をとがめ給ひて、先王の法に匹夫諸侯を惑すをば、其罪殺すべしとて、左右の司馬に命じてきらしめ給へり。聖人のいましめ後の世かんがみずんばあるべからず。優旃優孟などいひし者皆此類なり。唐の代には、利闔の樂工と云ふもの則ち俳優なり。宋元の代より雜劇と云ふ事あり。則ち俳優の所作なり。雜劇は全く此方の今の狂言なり。戲子といふもの、此方の野郎役者なり。雜劇の所を勾欄といふ。又戲場といふ。此方の芝居なり。雜戲を觀る所を棚屋といふ。此方の棧敷なり。今の猿樂も本中華の雜戲をまねびたるとみゆ。中華の雜戲には國家の法禁ありて、男女淫奔などの類、何にても世の風俗の害ある事をなさしめずして、只忠臣、孝子、義夫、節婦など風俗を奬ますべき事をなさしむ。若し此おきてに背く者あれば、刑罰を加ふ。これ國家の政なり。今吾國には此制禁なき故に、かりそめの戲にも、男女の色に耽り慾をほしいまゝにし、或は淫奔して身を失ひ、家を亡ぼしたる者の事をまねびて、ひたすら淫佚をすゝむるわざをなすよしなり。男女の若き者は言ふに及ばず、年たけたる者も、是を見ては面白き事の限りとおもひ、妻子を引具してしば〳〵戲場に遊ぶ程に、幼き者も昔より早く智慧付いて、よからぬ道にかしこくなり、物言ひ起居ふるまひより、姿かたち、身の粧ひ、衣服調度迄こと〴〵く野郎役者をまねび、かりそめにより合ひて物語するにも、戲場のをかしかりし事をいひ、野郎役者の名を指して、それはかくあり、誰はとありといひて、おのが心によしとおもふをほめ、あしきと思ふを謗れば、人々好ききらひありて、たがひに爭ふ程に、後には怒りを起して詞あしくなり、顏うちあかめ女などはいきまきてすゝり泣きするもあり。

調度―道具

什器

賤しき者のみかくあるにあらず、士君子の品よき人にも此たぐひ多し。人の風俗の日々に惡しくなりくだる事うべなり。又異國にては、士農工商の正しきわざをして、世を渡る者を平民といひ、戲子の類をば都て樂人と名付けて平民の數にいれず、人の外なる者とし、種類を分けて殊の外にいやしめ嫌ふ事我國の穢多の如し。されば平民の貧しき者も、子を樂人となす事を得ず、樂人より平民に入る事も叶はず、平民と樂人と婚姻を通ぜず、皆國家の大禁なり。是を犯せば刑罰有り。平民と樂人と種を混ぜしむまじき爲なり。我國にても野郎役者はもと穢多の部類に定め置かれけれども、世の人かれが伎藝を愛する心より、かれらを近付くる事を恥とせず。かれらは家富みて都の内によき住居し、美服を著るのみならず、怜悧にて歌よみ詩を作り、學問するものさへありときけば、まして世間のあらゆる事何か暗からん、何かつたなからん。人の機嫌をしり、人の心に入る事極めてかしこければ、常の人、是にあひては、かけずけおさるとなり。さればいつとなく彼輩に位付きて、士君子にもまじはれば、賤しき者と知りながら士君子も得卑しめず。をはりには都の内に宅地求めて、商ひなどして平民となるも多し。諸侯に召されて俸祿給はり、士となるもあり。心有る人是を見聞きては

けおさる—壓倒せらるる

長く大息すべし。國民の法禁ゆるき故に、非人を以て人類に混ずる、誠に痛ましき世のありさまなり。遠きむかしは云ふに及ばず、百年の前迄はかゝる事はなかりしと、古き人いへり。

一我父は寛永の中比に生れて、八十八歳にて享保の中比に終れり。大猷院殿、嚴有院殿の御代を經て、其時の事を常に語りつれば、我幼き時より能く聞きて、耳に熟せり。我は延寶の終の年に生れて、常憲院殿の御世よりこのかた、正しく此身に歴つれば、童稚の時より、是まで五十年のことをば目に見たり。父の語りきかせつると、我まのあたりみつる事を思ひつゞくれば、百年の世變歴々として目の前にあるがごとし。人に物がたりするついでには、昔の事ども云ひ出して、或は笑ひ又はなげき、且は治れる御世に生れて、干戈の苦をしらず、やすく寐ね靜かに起きて、嘯きうたひて明しくらす事を悅び、且は事ありし時にあはずして、猛虎も鼠となり、寶劍も鉈となる事をいきどほる。かくて此世治まれる事久しきによりて、上より下まで心ゆるみて、ひたすら觀樂のみをいとなむ故に、舊き事はをかしからずなりて、新しきことを珍しともてはやす程に、人の詞、身のさまより始めて、衣服、器物、屋作までむかしにかはり

いへり—一本「云ひはべりき」

一本「我父は」以下を別行とせず

大猷院—德川三代將軍家光

嚴有院—四代家綱

常憲院—五代綱吉

童稚—わらべ

干戈の苦—戰爭の苦

觀樂—觀は

歎か
歴然―はつきり見ゆる形容
禮服にて、糸にて―一本「禮服に、綿にて」とあり
そら言―虚

ぬれば、まして人間種々の儀式遊宴の樂など、新しき事ども年々に出で來りて、舊き事共はいつとなくすたれ果つ。大かた舊き事にはよき事多く、新しきことには能き事少し。風俗のうつりかはる事、目の前に歴然たり。其中に、昔と今と、寒暑のごとくかはれるさへあやしと見るに、冠をくつにはき、履を冠にする樣なる事有るこそふしぎなれ。つくぐと百年以來の風俗をおもひくらぶるに、余所の事をば置いて、江戸の人の風俗こそ殊にかはりたれ。我したしき者の中に、慶長、元和の頃生れたる者、男にも女にも有りて、寛永の頃を年の盛にて經たりといふに、男は冬革の打ちかけ革の袴を美服とし、女は紫の革の襪子をはくをよきけはひとせりといふ。その襪子は我幼き時までも殘りて有りしなり。婦女の帶は金欄を美麗の限とし、黑地に梅櫻松を所々にぬひつけて、是を鉢の木の帶と名付けて珍重しけり。廣サ僅に鯨尺の貳寸計、紙を心として綿などいるゝ事なし。四月より八月まで、婦女の禮服にて、糸にて廣サ鯨尺の八分計成るをうしろに結びてたるゝをつけ帶といふ。今のつけ帶は常の帶よりも廣し。今の人に昔のことをかたれば、そら言と思ひて露ばかりと信とせず。是等は我まのあたり見たりし事にて、詐にあらず、舊き事知りたる人あらば尋ね問ふべし。

言

すべて男女の衣服、帶は極めて質素なりき。男子も女子も十四五歳迄は、長き袖を著るに、むかしは鯨尺一尺七八寸を極とせしに、貞享の比より貳尺計になり、夫より稍稍ますゝ長くなりて、近き比は貳尺四五寸になりぬと見ゆ。婦女の帶も貞享、元祿の比より漸く廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸に及べり。綿を心として褥のごとし。男の肩衣といふもの、むかしは麻の幅鯨尺八寸計成りしに、貞享元祿の比より幅壹尺に及べり。寶永の比までは、婦女細き麻繩にて髪をつかねて、其上を黑き絹にて卷きしに、其後麻繩をやめて紙にて結ぶ。越前の國より粉紙にて元結紙といふ物を造り出して、海内の婦女皆これを用ふ。夫より絹にてまく事もやみぬ、と我父まさしく是を見てかたりきかせり。今の人聞きては信とせず。凡そ男女の髪かたち、我等が見及びてより此かたは、幾かはりかしつらん、今はむかしのかたものこらず。昔の婦人は、髪多く長きをたけにあまるといひてほめたりしに、近頃は髪すくなくみじかきをよしとする風俗になりて、髪多き女は髪の中を切り或はそりてすくなくす。此風俗は、京の婦女より移り來れり。此事にかぎらず、都て男女の風俗言葉づかひ、物の名迄近き比は京に似たること多し。京は公家の外、工匠商作のみなれば、人の心柔弱にして

利にかしこく、江戸は武家の都なれば、あづまうどの心粗暴にして利にうとし。然るに、三十年以來は江戸の人京の風俗を學ぶ故に、武士のこゝろも昔にかはれり。唯京の婦女のむかしより蒙衣するのみこそ、いまだ江戸にうつらね。江戸の婦女の外に出るに、むかしはきまゝとて、黑き衣にて頭面をつゝみ、目ばかりをあらはしけるが、其後綿にて頭面を包みしは、我二十餘り寶永の比まではしかなりき。今は少しき綿を頭上にいたゞきたるのみにて、面をばうちさらし、はれやかなる顏にて道を行くさま、面はゆげにも見えず。男は面をあらはすべきものなるに、此頃はあみがさの肩の上までかゝるをかぶるはめづらしからず。冑のごとくなる帽子をかぶりて、面をかくすも有り、つねの頭巾に覆面のごとくなるものをつくりつけて、目計をあらはして道を行くもあり、むかしの女のごとし。人目をしのぶ者の多くなりたるにや。此ごろの男は小袖の裏を紅にし、或は紅のはだ衣を袖口長にして、腕をまとふばかりにひらめかす者多く見ゆ。女はかへりて縹の裏白き裏などを著るあり。是等は男女所をかふといふべし。又昔は士君子こそ學問し、歌よみ詩作り連歌し、或は管絃を玩び、少し下れる品なれども、琵琶を彈じて平家物語し、筑紫箏、幸若の舞などを、習ひてたの

あづまうど—關東人
蒙衣—外出の時を頭背に被りて面を蔽ふ衣
きまゝ—原本「着まゝ」とせり、恐くは「氣まゝ」の意なるべければ特に假名に改めたり
衣—一本「絹」とあり。此方よろしかるべし
こゝに「衣」とせるは、前註に記したる誤の結果ならん
面はゆげ—恥かしさうに
市井—まち
おめず—恐れず
薄祿—祿高の少きこと
をこがまし—馬鹿らし

しみあへりける。三味線を鳴らし、淨瑠璃をかたる事は、只市井の賤しき者のみなりし。夫さへ大かた人にかくして、忍び〳〵にならひしぞかし。今は工人商賈の中にてやゝとめる者は、學問し、詩歌管絃のもてあそび、少し下れる品なれど、猿樂などを習ひてたのしみとして、淨瑠璃三味線などを近付けぬたぐひ有り。士君子は、却りてよきたのしみをしらず、ひたすら淨瑠璃三味線を好みて、はれやかなる所にして、おめず、憚からず、卑しき所作をして人のもてあそびとなる。薄祿の士のみにあらず、諸侯貴人にも此類多しと聞けり。是等をば冠と履と所をかふるといふべし。これのみにあらず、今の諸侯貴人の道を行くさま、むかしにくらぶれば、殊の外にをこがましし。少の所領にて從者の數もさのみ多からぬを、廣く長くならべつゞけて、人の妨となるを顧みず、かひなをふり足ぶみをして、いかめしくあたりをはらふ。見るもうるさくかたはらいたくおぼゆ。傍若無人是に過ぎたる事やある。凡そ君子は溫恭にして、萬穩便なるこそたふとけれ。萬人通行すべき都の大路を、何ぞ我一人の道とおもひていかめしくふるまふべき。かへすゞ〳〵おろかなる心なり。諸侯すら猶しかなり。まして夫より下つかた、少の祿を食みて十人廿人の從者を召ぐするばかりの人々は彌

けやけく―際立ちて

人さへ―一本「人だに」

佚樂―快樂を肆まゝにすること

彌分限を知りて身の程よりも引きさげて、萬穩便なるべしとおもふに、さはなくて、今ひときはをこがましく、我よりうへに人もなきやうに道をふさぎて行くさま、見ぐるしくもいふ計なし。此風俗も、我いとけなかりし時におもひくらぶれば、けやけくめざましく見ゆ。すべて昔は、諸侯貴人も多く恭敬にして禮をつゝしみ、賤しき者にも恥ぢてはしたなきふるまひをせず、君たる人も臣下に禮を厚くし、言づかひ迄もうやゝしかりしと、我が父語れり。今は大かたこの風もなくなりぬ。又むかしは、士君子の婚娶に財幣を求むる事なかりしに、今は一郡をも領する程の人さへ、財幣を求むる事になりぬれば、下ざまの人はいふにや及ぶ。世の治れる事久しきによりて、人皆佚樂して、近き頃は有祿の士より上つがた國郡のあるじまで、殊の外に貧困して、凡商賈をたのみて内外のことをいとなむ故に、位ある人も商賈を恐れ敬ふ事甚しければ、商賈は是に乘じて、士大夫をも輕しめあなどる。これも昔にかはれる風俗なり。かくばかりの貧窮にても、外に出でてしらぬ者の中にては、をこがましきふるまひするを、をかしともおもはれず。中華の人、往古は男も女も髪そることなし。五刑に及ばぬ程の輕き罪の者をば、髡刑とて頭髪をそりけり。佛法わたりてより、男女髪を

髭―一本「鬚」

大わらは―大童髪を取り亂したるさま

そりて僧尼となる事あり。僧尼の外に、常の人髭髪そることなかりしに、近き世に韃靼の夷國をうばひて、天下の人をことゞく其國の風俗にして、頭髪をそり、髻の所を少し殘し、組みて長くたれて、牛の尾のごとくなるを辮髪といふ。是中華の風俗の大變なり。我國もむかしは中華のごとく、僧尼の外に髪をそることなかりしに、いつの比よりか、武士の中に月代とて、頭の髪をそりしに、後は髭をもそりおとし、額に角をたて、頭髪をも半過ぎて項の邊までそりおとし、髪をば指のふとさにし、其末をきりすてゝ鶴の尾などのごとくなり。公家の人はいまだ髪をそらねども、是も武家をまねびて、髭をそり、武家もむかしは烏帽子、直垂を著たりしに、今は夫もやみぬれば、只月代をさらして、すこしの髪を後につかねたるさま、むかしの大わらはにもあらず、何と名づけんやうもなし。韃靼のえびすは髭をのこせるに、此方の人は髭さへそりおとしぬれば、斷髪の風俗彼よりも甚しといふべし。近き頃は、又うしろの髻の中をもそりて、いよ〳〵髪を少くす。しかのみならず、女も髪の多く長きをきらひて、頭髪の内を丸くそりて、髪をほそくし、髪の末を切りてみじかくす。これ大にむかしにかはれる惡風俗なり。もしこのまゝにて年を經ば、いつとなく女は今の男のご

とくにもなり、男は全く法師にもなるべからんとぞおもはる。さもあらば、韃靼のえびすよりも見ぐるしかるべし。風俗のうつりかはるも、人力にはあらず、是も時運なり。されば古の聖人、只此事をおもんぱかり給ひ、よき風俗を永久にたもつべき術をまうけ置き給へり。其術は何ぞといふに、正樂をおこなひて、淫樂を禁ずるにあり。是國家を治むる政の要務なり。

獨語終

梧窻漫筆序

道則高矣美矣。必有卑近易入之言。然後可繇以行焉。可階以進焉。故子思稱。大舜察邇言。孟子亦曰。君子之言。不下帶。子思孟子之意。卽夫子之諄々善誘也。後世聖學不講。競騖高遠。厭棄卑近。欲勝大舜思孟而上。不亦妄乎。而顧其所行。則狂猥之不若。嗟亦過矣。商鞅說秦王。以唐虞。則睡而不聽。及五伯之事。則不知膝之前於席。徐無鬼以金版六韜進魏王。則瞶眊不通。爲說相馬之道。則瑳然啓齒。卑近之言易入如此。雖然。其易入者。未必易行也。菅輅諫何晏鄧颺。二氏嗤以爲老生常談。不用其言。菅輅於是嘆其不免矣。劉晏問釋道欽要語。道欽告曰。諸惡莫作。衆善奉行。晏謂。五尺童子亦知之。道欽

曰。百歲老人行不得。夫論語一書。槩是孝悌忠信。家庭俯仰。閭巷交接之近事而已。若有能行其一言者。卽聖人也。邇言之可察。而庸行之可行。固旣如此。錦城先生所著。梧窻漫筆二卷。出入治亂。揚搉古今。其事皆覈實。其說皆切近。無高遠可駭之論。亦非陳陋腐臭之談也。讀之。則可由以行聖人之道矣。因可以窺夫子之牆矣。世能有咀嚼之者。以爲汪信民之菜根耶。抑將顧愷之々甘蔗耶。如此書。則不可不傳之以與衆饜飫也。因慫慂荒井堯民。鏤板行世。刻成所視。乃題數言。以弁其首云。文政六年。歲次癸未。春三月之吉。宅山處士唐公愷譔

姬路　山田安朴子孚書

梧窻漫筆序

余遊錦城先生之門。十數年矣。於其言語文章。未嘗爲無聞焉。唯至其論天人之際。說幽冥之故。槩乎未聞。或偶聞之。唯爲後塵之瞠若也已。嘗廁子弟群輯之席。聞其絮々談近古之事。刺擧史傳。引證經籍。往復論質。注焉不盈。挹焉不竭。沛然如河之決。油然如雲之興。私以祈嚮。欲筆以貽家庭。有志未果。其後陪侍書院。觀悟窻漫筆者。則往日爲子弟所訓諭。而其親哀錄者也。於是請受誦讀。則鄙吝日去。好善之意。津々而生。因謄寫藏之。以代韋弦之佩焉。蓋此書一時流傳。雖門外之士。猶能知其言之有裨益乎名教。然亦苦謄本之多註誤也。余不肖不自量。欲校訂上木。匡豕亥之轉訛。亦有志未果。今玆

癸未。余年甫四十。於少年紛華之事。稍々屏欲。卽欲捐資刻之。以圖不朽。因請藁本。校訂累日。功竣以授剞劂。前志初展矣。若夫四方之士。取此書一通。措諸座右。時々觀覽。豈啻陸賈新語耶。夫先生之於此書。實涓埃之微也。學於先生之門者。儻以此書自足。則非先生之所以誘掖教育也。詩書義之府也。易天地之蘊也。學者必欲入義理之府。探天地之蘊。當今之世。舍先生其誰歟。宜親炙叩問。如日亦不足也。且先生著書之富。無論於經籍。至陰陽小數之事。皆考核成書。世有素封者。出貲印行。使積年苦學之功。暴著天下。徒季孫之粟南宮之車邪。何必傚余之從事於末舉。沾々自喜焉。余乃樗朽。無與諸子並騁之才。亦乏爭抗時輩之具。唯愼奉先生之正朔而已。老聃曰知足不辱。余雖不敏。私事斯語也。刻已成。因冒數言爲之敍云。蓋此書有三錄。曰畏天。曰知命。曰畏聖。梧窻漫筆其統名也。

文政六年癸未二月望　　晴湖　荒井堯民　撰

梧窻漫筆

大田錦城著

卷上

一天下の治亂は、奢儉の二字にあり。先祖は儉素にして興り、子孫は汰侈にして滅ぶ。漢唐宋明は勿論なり、劉宋蕭齊偏安の國と雖も皆然り。漢書貢禹の上疏を見て、治亂の大體千歳一轍なることを知るべし。

一儉素とは、吝嗇にして財を積畜せんと願ふには非ず。財を積んと願へば大欲なり。此一念已に上天の冥慮に違背す。鹿臺の財、鉅橋の粟、殷紂は大富の人にて其滅亡を救ふには足らざるなり。扨天下を有つ身にしては、軀に錦繡を纏ひ、口に膏粱を飽くこと、幾程の費にも非るなり。されど禹は菲飲食惡衣服卑宮室とあり、文王は卑服卽康功田功とあり。是にて、天下を有つ身にしても飲食衣服に儉素なるべき

鹿臺の財、鉅橋の粟―紂鹿臺を築きて財を貯へ鉅橋（倉の名）に粟を積む

費の—「の」は「を」か
腴食—美味を十分食ふこと
暴殄—荒らしつくす
舜禹、—支那古代の聖王
契、后稷、伯益、四嶽、皐陶、—皆古代の賢人

ことを知るべし。況や其下たるをや。

一儉素の本は財を積で富まんとに非す、財の費の惜むにもあらず。唯人天地の間に生れて上下の差あるとも、同じくこれ同胞の人なり。然るに同胞の兄弟に衣食住に乏して、一生困苦せるものあるに、我獨り天地に何の功德ありて、美衣腴食して天物を暴殄すべけんや、と云ふ理を眞に知りて、天の冥鑒を畏れて、衣食居住事々節約にすべし。是れ成德の本なり。養生の術なり。子孫長久の基なり。學道の人は先づ是よりして眞智を開くべし。

一舜有二臣五人一天下治る、禹は當レ身て天下を有ち、契は十四世、殷湯にて天下を有ち、后稷は十六世、武王にて天下を有ち、伯益の後は戰國の時秦趙是なり。始皇は呂氏の子四嶽の後なり。唯皐陶の一人、其子孫振はず。臧文仲、聞二六與蓼滅一曰。皐陶庭堅不レ祀忽諸(文六年左傳)春秋の時、其僅に存するの小國だも滅亡せり。一體堯舜の時に當りて、學德最も優なるは皐陶なり。其謨を見て知るべし。陸九淵子靜は、唐虞之際。道不レ在二堯舜一而在二皐陶一。殷周之際。道不レ在二文武一而在二箕子一と云へるは知言なり。されど其子孫の興らざるは、刑官の故なり。刑の畏るべきこと如レ此。英布は

陸九淵—字は子靜象山と號す宋の哲人
大辟—死刑にして支那古代五刑の一なり
卓茂—字は子康、慈仁を以て名あり光武皇帝召して大傅に拜し褒德侯に封ず
并命—死を共にするを

皐陶の後なり、楚漢の時、勃興すれど、猶被レ刑然後王たり、黥刑を免れ得ず。祖先の宿緣免れ難きの理あり。此事北魏の高允も能く辨知せり。達人と云ふべし。

一刑罰は後暗きものと云ふ事を知るべし。今姦通露顯せば、男女共に大辟に處すべし。されども姦通の露顯せざるもの、天下の内幾萬人もあるべし。發露せざれば刑を免る。皇天より人主に問給はど、人主何の辭ありて答へんや。刑は天下古今の大法なり。されども天へ對して後暗きことなき樣には、聖人にも能はざる事なり。故になるべきだけは刑を輕くし刑を省き、且教を明にし、風俗を儉朴にして刑を犯す人少なき樣に政を爲す事は、聖人の仁心なり。さて人家に發露せざる姦慝の多き事は、後漢の卓茂の賄賂取れる吏を訴へし惡民に告げし語にて悟るべき事なり。

一平家の人は、西海の波に沈溺せる日も一門并命たり。北條滅亡、五月八日の番場の辻堂、五月二十二日の鎌倉、是亦一族并命たり。其故は如何なるやと子定に問しに、桓武天皇は平安城を築て、百代帝王の居を定め給へる、雄傑の姿ある天子なれども、一體は失德の御方なれば、子孫にも如レ此業報あるにやと云へり。此事は覺束なし。桓武の御失德は、御父白壁王田原皇子の御子にて、天智流なり。稱德天皇(孝謙重祚)

いふ
番場の辻堂—兩六波羅滅亡の時なり
白壁王—光仁天皇
田原皇子—施基皇子
褚淵—字は彦回、宋及南齊に仕へ官尚書令侍中に至る
南北史—南史北史にて支那南北朝の歴史
斬艾—斬りたやす

の跡を繼ぎて天武流を相承け給ふ時、時の勢威に畏れて、藤原百川の勸にて、嫡母井上皇后と姦通し給ふ。宋の逆臣褚淵が山陰公主の逼迫を拒しには遙に劣り給へり。されど是は子孫幷命の基にはあるまじき也。清盛時政の惡自ら子孫幷命べきの理あり。南北史を讀て劉裕、蕭道成、高歡、宇文泰等が前代の子孫を斬艾して、易代の時又吾子孫を斬艾せらるを見れば、時政上洛して、平家の幼兒共を搜り出して、盡く屠害せしにて考ふれば、其子孫の數を盡して誅戮を蒙りしは、天道の業報、免れがたき理なり。

宋齊の子孫は、多くは易代を待たずして斬艾せらる。清趙翼が二十二史劄記に極めて詳悉せり

一平家一族魚腹に葬て後、重盛一綫の血脈は、伊勢の關の五家（神戸龜山國府鹿伏兎峰五家）に存せり。關實忠の弟、長崎盛綱泰時の家令となりてより、子孫北條の内管領と稱して、天下の權を秉れり。盛國の弟、津田先生親實は織田の元祖にて、信長に至ては、遂に再び大臣に任じて天下の權を秉る。一族兄弟皆滅と雖も、有德の人の子孫は存在して勃興の期あること、天道の昭明畏るゝに餘あり。

盛綱—盛國の子
公曉—頼家の子
親、祖父—義時時政を云ふ

一頼朝父の讎を報じて、平家を滅せるはさる事なり。範頼義經を忌み害せるは何事ぞや嫡子頼家は實朝に殺され、實朝は姪の公曉に殺され、父子三世相害して、其家滅びたるなり。

一泰時は四代の帝王（後鳥羽、土御門、順德、九條廢帝）を廢流して天下を領せり。然ども親、祖父には勝りて、我日本にては大賢八九分の人とも云ふべき人なり。頼家を諫しより、父母に孝なり、兄弟に友愛なり。寡欲にして私なく、感服すべき事少からず。子孫七代天下の權を執しも宜なり。

一時頼時宗も、禪學を奉崇して一代の賢人なり。祖先の家法儉素を宗とせるを、高時入道に至り、愚昧不肖にて驕奢に長ぜる故、一時に滅亡せり。さて世間不學の人は、北條九代は能く治りし世の樣に思ふは大なる謬なり。幼主を奉じて陪臣にて國命を執ること、本極難の事なり。故に平治の時なし。將軍成長の後は、北條家を滅さんと陰謀あるに因て、京都へ逐ひ上せり。先づ同族相害するは、名越越後守光時、寛元四年丙午五月、時頼を擊たんと謀りて、事顯れて六月伊豆へ配流せらる。頼經將軍上洛の亂なり。光時の弟修理亮時幸も一味にて、五月入道して六月朔日卒去す。文永三年

時輔—時頼の嫡子時宗の兄

攝關—攝政關白

丙寅七月、宗尊親王上洛の亂に、名越中務大輔敎時、左近將監公時一味陰謀あるに似たり。同九年二月、式部丞時輔京都にて逆心を企て、六波羅にて害せらる。此時敎時公時一味にて誅せらる。佐介時國は、弘安七年六波羅にて逆心して誅せらる。師時宗方は、共に時頼の孫にて、嘉元三年、兩人權を爭て不和なり。常盤左近將盛時村、熙時が師時に黨せるを怒て。宗方夜討して時村を害す。宗宣、宇都宮貞綱と宗方を誅す。外族には。寛喜五年丁未（寶治元年也）六月五日、三浦若狹守泰村、能登守光村以下三浦一黨誅に伏す。是は頼經上洛の後、足立景盛義景と不和にして滅亡に及べり。弘安八年十一月には、秋田城介陸奥守足立泰盛、宗景（泰盛は藤九郎盛長曾孫、景盛の孫義景の子なり）父子誅せらる。永仁元年には、內管領長崎平左衞門尉頼綱入道果圓、其子飯沼判官と共に誅せらる。されば北條の時も、治平の世には非ず、文永弘安の蒙古の亂のみに非ず。

一皇統の二流を分ちて十年更代の帝位とし、攝家を分ちて五家となす。皆貞時の時立てたる新法にて、其子高時にて滅亡せり。帝王攝關の權を輕くせんと謀りて、其事亡國の基となれり。

虎狼の世界—爭鬪のみを事とする故にかく云ふなり

豁達大度—事理に通達し度量大なるをいふ

一足利の十五代は、開國より滅亡まで、一日片時も、安寧の日なし。尊氏の正成義貞顯家を擊て天下を領せしは、能き手際なり。然れども其臣の叛逆を制すること能はず、弟直義子直冬まで逆心せるにて、その人の無道を知にる足れり。開國の始より如此なれば、まして應仁の亂後より元龜天正まで、天下は爭戰の衢となり。人々仁義の心なく、利欲熾盛にて、君を弑し、父を弑すること、國々に蠭起せり。此百五十年は、虎狼の世界と云ふべし。

一信長は弟勘四郎信行を殺して、家を治め、嫡家の彦五郎を滅し、本宗の右兵衞尉を亡して尾張一國を鎭め、外家の齋藤を滅して美濃を奪ふ、是れ身を立るの始なり。天下を領するの德器あるには非るなり。

一秀吉は豁達大度、人君の器あり。されども勝家を伐て小谷の方を奪ふの志あり。若狹の武田に腹切せて松の丸殿を奪へり。失德甚し。且天性驕奢にして、開國創業の道を知らず。秀次を殺せるはさることなれど、其妻妾に何の罪ありて命を幷せて畜生塚とは何事ぞや。暴逆甚し。無罪の朝鮮を侵して、兩國の民命を草芥にせるは、淺野長政の狐憑の亂心と云へる一語にて盡せり。是れ子孫永久天下を有つべき德には非ざる也。

東照神君―徳川家康の尊稱

鼓腹―太平を樂むをいふ

作俑者―惡例を作るもの

關東征伐の軍中にて、忍の成田の女を幸し、氏鄕沒後、其妻をも妾とせんの志あり。皆失德の事也。

信孝を殺し、信雄を伐つの罪は、戰國の習にて責難し。

一保元平治より慶長元和まで四百年餘、天下戰爭の區と成つて、四民安堵の日なし。東照神君の武德にて、天下凱安、四民鼓腹して樂むことを得たり。今日の天下に生長する者は、天地父母の恩よりも東照神君の神恩弘大無邊なるを知つて、四民共に天下の治平を助くるの心あるべし。假にも治安の妨をなし、且は亂を願ふ心ある者は、先祖以來十世、太平の澤に浴するの神恩を忘れたる逆罪に均しき者なり。

一左傳に大德百世祀之とあり。孟子に始作俑者。其無後乎。又云。不孝有三。無後爲大。文言に積善之家。必有餘慶、積不善之家。必有餘殃。近時、物茂卿の學、其淺薄疎謬は論ずるに足らず。茂卿は子なし、姪の道濟を嗣とす、又子無し。他姓の子を養嗣として、血脈斷絕せり。其高足弟子太宰純も子なし、他人の子を養て嗣とす。定保是也。酒を嗜みて至愚至陋の者なり。吾友井上貫流の家に寄寓して此に終る。終身世に所謂宿なし也。服元喬が子は、夭死して別に子なく、此亦仲英を養ひ子とす。

天命を畏る―天の命ずるところを畏れ謹む

天道好還―天道は善惡ともに後に必ず報ずるあるをいふ

一時名高の三先生、皆子孫斷滅の人なり。其學の天に背ける驗明白なり。畏天命も人を奉崇して其學を悅ぶは何等の愚昧ぞや。

一天道好還の一語千萬世に涉て差ふことなし。信玄の父を逐出して、其子義信父を弑せんと謀て誅せらる。姑聟の諏訪頼茂を欺き害して、其女を奪ひ、夫が腹に勝頼を生して國を滅す。天道の巧なる、造作し出せるに似たり。

一信玄は無道の人なり。姉の子の今川氏眞を欺き、其國を奪ふ。信玄が駿河を奪ひしは、今川の家臣を欺き、降參せば駿河の半國を分ち與へん、或は一郡或は二郡を與んなど云しに、信長又武田の家臣を欺き、降參せば甲信の半國、或は一郡二郡を分ち與んなど云て、共に其國を奪ふ。天道好還の明驗なり。されども信玄親を逐出せるの大逆罪を知て、一生手に論語を把らざりしは、聖經の尊を知る、今の學者に優ること萬々なり。數箇國を併呑して、一代の英雄と稱せられしも無由には非ざるなり。

一堯舜禹の相傳に中の一字を說き給へること、無量の妙義なり。近く中を知らんとには、飲食を作るも、生烹なれば食はれず、烹過たるも食はれず、程能く烹たる處是れ中な

り。飲食も過れば食傷霍亂の病を生ず、不足なれば飢ゑて氣力乏し。程能く飲食する處、是れ中なり。一身の世に處するにも、柔に過れば事を立ること能はず、剛に過れば凌人犯上、身を亡すに至る。國家の政事も、寛に過れば下より上を侮りて治らず、猛に過れば、上より下を賊して叛亂に至る。天地の萬事萬物皆此理なり。善も過ぐれば惡となりて、一身よりして家國の害となる事あり。中とは何ぞ。無過不及。恰好得節の義にて、此理を得ること極て難し。

一周易の大過に、剛過而中と云ふことあり。夫子此一語至妙の理なり。過れは中に非ず、何故に過て中なるや。平常の病に烏頭の毒藥を用ふるは過なり。劇病に至て平常の藥效なきに至りては、此大毒の藥を用ひて效を得る事此れ其時の中を得たり。天下華靡奢侈に流るゝ時、平常の中禮を用ふる時は、世の敝風を矯ること能はず。此時に於て過儉過朴を以て此を挽回するは此れ其時の中を得たり。人平日飯三椀を以て節とするものも、或は遠行、或は力業を爲して、各別に饑たる時は、食平常の度に過る、此れ其時の中を得たり。故に中庸に時中と云ひ、孟子に執中無權猶執一也と云へり。

一學記に當其可。謂之時と是れ時の字の妙解なり。中の字も當其可の義なり。孔子の聖之時なるも又是中なり。一部の周易中の一字を以て要とせり。聖人の意煥然として明なり。

一平治の亂に、藤原光頼其弟小別當を戒めし言（平治物語）西光法師の大相國淨海入道を詈しりし言（盛衰記）、佐竹の家臣の頼朝を難ぜし言（東鑑）、五郎時致の頼朝の前にて辨ぜし言（曾我記）、我邦にては希覯のことにて、皆痛快を覺ゆ。清盛上皇を幽する時、小松内府の諫められし言（盛衰記）、承久の亂に、泰時の義時へ異見を入れられたる言（承久記）、此二つは千歳の下之を讀で欽襟起敬、感賞嘆服せしむ。笠置山にて楠公の言は人をして義膽を張らしむ。皆千古不刊の言と云べし。

一曹操父子漢に逼りて天下を奪へば、司馬懿父子孫魏に逼りて天下を奪ふ。宋の後廢帝、無道にして齊祖天下を奪へば、齊の東昏無道にして梁武天下を奪へり。北宋の滅ぶる、金人宋の妃嬪公主を奪ひ去りし處を青城と云ふ。金の滅ぶる、元人金の妃嬪公主を奪ひ去る處、又青城なり。天道好還又巧なり。

一劉宋三廢帝の無道あり、父を弑するの元凶劭あり、武帝明帝も亦皆無道なり。蕭齊に鬱林東昏の無道あり、武帝明帝是も亦皆無道なり。陳には後主の奢侈淫肆あり。唯梁

煥然―煥は散るなり釋くるなりはつきりわかるかたち

千古不刊―千萬年も滅せざる

曹操―三國魏の祖

司馬懿―字は仲達魏の名將

武父子學を好で無道なし。元帝は善人に非ずと雖も宋齊の君には同じからず、佛法の弊仁柔に過て天下を喪へり。故に後梁三世宗祀猶血食す。唐に至て蕭氏の高官に至る者絶えず。唐人の言に、六朝之亡。唯梁無罪。故其子孫至今名官相繼と云へり。

天道の昭明なること如此。

一先帝崩御まし〳〵て、太子御幼少なれば、御相傳の方なりがたき故、御成長の後關白御相傳仕ると云ふこと、諸書に是れ有て其言は記せず。聖德太子十七條の憲法にや、又は宇多法皇の御遺誡にもやと思ひしに、後に後太平記と云へる大俗書を讀みたれば其事を記せり。觀音經の慈眼視衆生福聚海無量と云ふ二句なり。誠に難有御事なり。平城天皇の藥子の亂に、藤原の仲成を誅戮せるより、帝王二十七代、三百四十餘年、保元の亂まで衣冠の人を刑殺せず。仁厚の政、三代聖人の御世も企て難きこと也。和歌佛法などにて柔過て遂に天下の權を失ひ給へども、一體慈仁の德、天地に充塞して、皇統百二十代の今日に至ること、由無くして然らんや。

一善も必しも賞せられず、惡も必しも罰せられず、天下の事は、白日に十字街上を走る樣には無き事なり。さればとて善人は世にも用ひられ人にも敬せらる。人を殺せば首

衣冠の人―朝廷に仕ふる人

白日―白晝に同じ

太虛寥廓の間―虛空をいふ、何もなくほがらかにして大なる間

を刎られ、物を盜めば笞たる。暗夜の如きにも非ず。唯世の中は、朦朧たる春月の夜の如きものなり。されども君子は白晝の十字街頭なりと心得て世を渡るべし。

一飲食男女の欲の心に生ずるは、自然の妙理なり。此にて性命をつなぎ、此にて嗣續を生育す。世の人、僧などを見慣て、男女の欲を拙なき事の樣に思なすは、以の外の僻事なり。人此欲を斷て、心中淸淨なるを覺るは、異端の極なり。欲の心に生ずるは、雲の天地の間に生ずるに同じ。一年中天地晴明にして、雲行雨施すこと なき時は、草木枯死して、人と禽獸と皆餓死すべし。されば太虛寥廓の間に、雲を生じ雨を施すの妙にて、天地の萬物、皆生育を遂る事を得たり。人も心中空虛の處に男女の欲を生じて、子孫連綿す。此欲は是れ天地の正理生民の大道なり。さればとて心中常に此欲のみならば、天地常に雲雨して晴明ならざるに同じ。是も亦萬の生育を遂げがたし。

さて少壯の時、男女の欲の熾なるは、春夏の雨多きと同じく、老衰の日、此欲の薄なるは、秋冬の晴日多きに同じ。人は一小天地なること此にても知るべし。然ばあれども、此國の人は、出家を見なれたる風俗にて、男女の欲さへ薄き時は、大賢君子の樣に思ふ愚惑なる習尙なれば、道に志す人は心得あるべき事なり。謹まずんば有るべ

からず。

一男女の欲は、人の心を柔弱にするもの也。男女陰陽和合の和は、國語に、以宅平宅謂之和とあり。左傳に、和羹の和の義なり。やはらぐるの義には非ざれども、男女の和にて人情柔順になるを見れば、やはらぐるの義、妙なり。世の人男女の欲を遠ざくるときは、自然と粗厲猛暴になりて、忿戾鬪爭の心を生ず。畏る可きの至なり。國家を治むる人は、尤も此の所に心を付けて世の亂を防ぐべし。左傳に、戎事不近女器と云ふにて女子の猛勇の氣を挫くことをさとるべし。予が幼少の時老人の話を聞しに、世は三寶にて治れり。女房鐵砲佛法なりと云へり。當時は理ある言とも思はざりしに、今日能々此言を味て其妙を悟れり。女故に人の氣を和柔にし、且は妻子に羈さるゝ故、忍難き事をも忍べり。如し妻子もなきものならんには、忿怒の爲に人を打果すもの少かるまじ。佛法も慈仁柔弱を以て說を爲し、地獄天堂などの說にて世間の亂を止むること少からず。念珠を揑ぐり觀音を伏し拜む人は、人と擊合ことも少かるべし。是にて其大功を悟るべし。鐵砲なき時は、武暴猛勇の人、無涯横行をなすべけれども、劍術も、槍法も、此にて打碎かるを以て、武勇の人も、手を束ねて其惡

粗厲猛暴—氣が荒く亂暴するをいふ

を肆にすることを得ず。不仁の器にて、又大仁の用を爲せり。何れにも此三寶にて、人の心を和柔にして、天下の太平をなす者なり。

一女色の害は畏るべし。第一には、人の身體を尪羸せしむ。第二には、人の心志を柔弱にして成立すること無らしむ。第三には、驕奢の心を生じて華靡に流れしむ。世俗の華奢は皆女を悅ばしむるの一念より、無量の害を生じて身を亡し家を亡し、國天下を亡す。古昔の亡國を以て觀れば、淫慾より奢侈を生じ、奢侈より困窮を生じ、困窮より亂亡を生ず。堯舜相傳の四海困窮。天祿永終とあるにて、困窮の源を塞ぐべきことなり。一身一家に取ても、其理一同なり。

一老子三寶は、慈仁なり、儉約なり、不敢爲天下先と云ふは降挹退託のことにて恭謙なり。人此三寶を失はざれば、終身安穩なるべきこと也。夫子溫良恭儉讓も三寶に同じ。溫良は慈仁の發ならずや。儉は卽ち儉なり。恭讓は不敢爲天下先なり。老子も多くは易論語を襲へり。

一論語に、慮以下人と云ふは謙なり。されども謙の字はなし。恭の一字にて謙を兼たり。繫辭に謙也者致恭とあれば、恭の倨り亢ぶらざると謙のへり下ると、其實大

尪羸—弱ること

天祿—天より賜はる福、天祐に同じ

大梗—大概に同じ

慎房室―情慾を謹しむこと
樽節―おさへて制限すること
漢文―前漢の名君なり
光武―後漢創業の皇帝
高祖―前漢創業の皇帝

梗相同じ。

一約の一字を心得べし。慎言語も約なり、節飲食も約なり、遠嗜欲慎房室も約なり、恭にして不倨傲も約なり、儉にして不汰侈も約なり、樽節も約なり、降挹退託も約なり、侈然として放肆なるべき心を抑へ制することこれ約なり。以約失之者鮮矣。とは(論語は言語を以ていへり)此事なり。大雅には抑々とあり、抑と云ふも可なり。此を能得るときは天祿を全うして身家を興すべし、年壽をも永くすべし、子孫をも榮昌ならしむべし。唯人に施し恵む時は約の繩を解き、慳貪の心を去て厚く多きに從ふべし。左傳に、施取其厚。事舉其中。斂從其薄と云ふにて施の別なるを知るべし。

一周易は柔を用ふるの書なり。亢龍有悔。群龍无首。黃裳元吉。何れか柔道に非らん。老子も此意をばよく知れり。漢文は柔道にて天下を治め給ふ。三代の聖人より後の帝王は、文帝を第一とせり。光武も朕以柔道治天下と宣へるは、誠に難有こ。となり。光武も末世希なる明君なれど、郭后と東海王强を廢し給ひしは、一生の大過なり。さて韓歆が災異を云ふを怒て父子共に害し給ひしは、柔道を得給はず。高祖の周

龍顏―高祖
李沆―字は太初宋太宗眞宗に仕て後相となり謹直名望あり
高明之家云々―鬼神は滿てるを惡

昌が桀紂に比せしをも低頭て納られたるは、寛弘の量は言ふにも及ばず、是却て柔道を得給へるなり。一體の行狀を論ぜば、光武は高祖には遙に優り給へる樣なれど、此一條を以ても、子孫に文帝光武ほどの人を生し給へる人なれば、龍顏の不凡を知るに足れり。

一後世の人主は、漢の文帝光武、唐の太宗、北魏の孝文、宋の仁宗、僅に數君には過ざる也。漢の宣帝、金の世宗、明の孝宗も英主と云べし。

一易理を知る人は天理を知る人なり。古の人は家を作るにも、意に滿ざる處を一所のこし置と云ふ。此易理の至妙なり。萬事此理を知るべし。李沆が天地缺欠の世界也とて、藥欄の損ぜしを修補せざるも、實は此理を知れり。明曆の火災後大城を再築せられたるに、大變の後幾程なく造營出來せるは、奇特の事なり。物は十分ならざるを好とすと云ふ御評議にや、天守をば再興是なし。これ一には易理なり。二つには餘り高大なる家は必ず火災ありと云ふ。漢の建章宮又宋の玉淸昭應宮にても知るべし。易の天際翺也と云ひ、楊雄の高明之家。鬼瞰其室と云しも不祥を召く事を云ふ。此御時代の人は、書を讀ことは多からざれども、易理に暗合する事は感服すべきこと也。

む故富貴の家にては其室をうかゞひて禍を下さんとすといふ意

崇禎―年號

收歛―とり入

今時の儒生輩には遠く優れることなり。さて其效にて百五十年を經て今日まで火災の御憂なし。京都の大佛殿の、天火にて燒失せるを見ても、感嘆に勝へざるなり。（都て屋の棟嵩高なるは惡き事なり）

一儉約は治世の大道なれども、吝嗇と混ずべからず。吝嗇は亡國の基なり。明の亡る時崇禎の天子より、宗室の諸侯王一人として吝嗇ならざる人なし。李自成張獻忠の攻圍む時、一日とも防こと能ずして皆害に遭へり。洛陽にありし福王（萬曆子　鄭貴妃所生）など最其魁なり。唯汴京に在りし周王は、代々學問の家にて吝嗇にも非ざる故、李自成の三度攻るを防ぎたまへり。（守汴日志に詳なり）其次は蜀に在し瑞王のみ也。皆吝嗇にて亡びし事、綏寇紀略に詳に記載す。されども兵亂起つて後吝嗇なるは必亡の理なり。治世には美事には非ざれども、吝嗇は汰侈には優れる也。

一論語に、少時の戒は色、壯の戒は鬪、老の戒は利得なり。色は春華光麗の象なり、鬪は夏の暴雨迅雷の象なり、利得は秋冬收歛の象なり。一年の春夏秋冬も、一生の春夏秋冬も、同じ事にて、人の小天地たることを知るべし。周易損大象には、此三を二として君子以懲忿窒慾とあり、色と利得は欲なり。鬪は怒なり。人の一心は靈妙にして諸德の本なり。唯色欲利欲の熾盛なる處よりして、身を害し家を亡す。忿怒の暴發する處にして、身を害し家を亡す。人此二つを戒愼すれば、一生安穩なるべし。

さて佛法には、此二を三として、貪嗔痴の三毒と名付たり。貪は欲なり、嗔は怒なり。只痴の一を加へたる事最妙なり。欲怒は愚痴より生ずるなり。人有不及。可以情恕。非意相犯。可以理遣と衞玠の云へる味にて、人の行とゞかざるは、彼が愚昧故とさとる時は、怒うすし。夫を妄に暴怒するは、己が愚痴より生ず。色欲も己が精血を損じ骨髓を乾かし、性命を促がす。法華に云へる氂牛の尾を愛するに同じと云ふことをさとる時は、色欲も薄し。夫を妄に肆にするは、己が愚痴より生ず。利欲も昇進には落るの理あり。積蓄には散の理あることを知り、死する日に金銀財寶を抱いて、閻羅王の前にも出難し。子孫に貽せば子孫必ず能く守らず、却て金銀の勢を以て驕奢淫泆を肆行して、身を害し家を亡す。子孫不肖の種子を蒔くと云ふ事を曉る時は、利欲うすし。夫を妄に慳貪にして、目を瞑するまで饜足ることを知らざるは、己が愚痴より生ず。されば痴の一字は欲怒の生ずる基なり。佛老も有用の處は皆經傳より出たる也。